

---

# 咸宜園教育研究センター 研究紀要

---

## 第 8 号

平成29年度咸宜園教育顕彰事業(教育文化部門)優秀賞  
「廣瀬淡窓ならびに咸宜園教育関係者の顕彰及び学術研究、  
また関東方面に在住している日田及び咸宜園関係者の交流・情報交換等」 淡 窓 研 究 会

咸宜園が近世最大の私塾であった理由について 深 町 浩 一 郎

京都府の学校と咸宜園教育—とくに廣瀬青邨について 深 町 浩 一 郎

研究ノート  
咸宜園と慶應義塾の関係について 溝 田 直 己

咸宜園門下生略伝(六) 渡 辺 み か  
吉 田 博 嗣

教育遺産を歩く(二) 吉 田 博 嗣  
3. 水哉園(福岡県行橋市)  
4. 青谿書院(兵庫県養父市)

---

咸宜園教育研究センター年報(平成29年度)

咸宜園教育研究センター要覧

---

日田市教育委員会  
2019.3

---

咸宜園教育研究センター

# 研究紀要

第八号

二〇一九年三月



咸宜園開塾 200 年記念事業「咸宜園門下生遺墨展」  
(平成 29 年 9 月 3 日～ 17 日)

於：パトリア日田



咸宜園開塾 200 年記念事業「嬰鳴フォーラム in ひた」  
(平成 29 年 11 月 10 日～ 11 日)

於：咸宜小学校



平成 29 年度 咸宜園教育研究センター教育顕彰事業表彰式

於：パトリア日田



「咸宜園門下生子孫の集い」第 3 部（平成 30 年 2 月 24 日）

於：みくまホテル

目次

平成二九年度咸宜園教育顕彰事業（教育文化部門）優秀賞 「廣瀬淡窓ならびに咸宜園教育関係者の顕彰及び学術研究」 また関東方面に在住している日田及び咸宜園関係者の交流・情報交換等」受賞者「淡窓研究会」会長 廣瀬 貞雄 …………… 一	咸宜園が近世最大の私塾であった理由について 京都府の学校と咸宜園教育―とくに廣瀬青邨について 研究ノート 咸宜園と慶應義塾の関係について 咸宜園門下生略伝（一六）	教育遺産を歩く（二）	3. 水哉園（福岡県行橋市）	咸宜園教育研究センター研究員 深町 浩一郎 …………… 三三
4. 青谿書院（兵庫県養父市）	咸宜園教育研究センター年報（平成二九年度）	咸宜園教育研究センター 咸宜園教育研究センター 咸宜園教育研究センター 世界遺産推進室研究員 咸宜園教育研究センター 咸宜園教育研究センター	1. 教育普及事業（展示事業、講座・講演会等）…………… 1	深町 浩一郎 …………… 三三
II. 調査研究事業 …………… 6	II. 資料収集事業 …………… 12	II. 調査研究センター研究員 深町 浩一郎 …………… 三三	III. 咸宜園開塾200年記念事業…………… 26	溝田 直己 …………… 五〇
IV. 教育顕彰事業 …………… 30	VI. 世界文化遺産登録推進の取り組み…………… 33	渡辺 みか …………… 六四	V. 利用状況・日誌抄 …………… 42	吉田 博嗣 …………… 七二
VII. 各種委員会・職員名簿 …………… 43	咸宜園教育研究センター要覧	吉田 博嗣 …………… 七二	I. 沿革 …………… 44	
II. 施設の概要・組織 …………… 45	III. 利用案内 …………… 46		II. 施設の概要・組織 …………… 45	
IV. 条例・規則 …………… 47			III. 利用案内 …………… 46	

平成二九年度咸宜園教育顕彰事業（教育文化部門）優秀賞

「廣瀨淡窓ならびに咸宜園教育関係者の顕彰及び學術研究、また関東方面に在住している日田及び咸宜園関係者の交流・情報交換等」

「淡窓研究会」会長 廣瀨貞雄

はじめに 淡窓研究会の成り立ちについて

淡窓研究会は、昭和四二年（一九六七）の秋、私の父である廣瀨正雄・郷土史家として活躍し、戦前に『教聖・廣瀨淡窓の研究』を刊行された碩学である中島市三郎先生、教育史学者であり、教育史学会の代表理事・日本教育史学会の会長などを務め、お茶の水女子大学の名誉教授であられた石川謙先生、また石川謙先生のご子息で日本女子大学の教授（教育史学者）であられた石川松太郎先生（当時は、和洋女子大学に在籍）ら四氏による会合をきっかけとして発足しました。

父・正雄は、郷里の日田の「淡窓会」（昭和二九年発足、一時休会を経て現在に至る）にならって、東京でも淡窓会をつくり、廣瀨淡窓や咸宜園の顕彰を図りたいと考えて、石川謙先生・松太郎先生の元を訪ねたようです。その結果、石川先生のご協力を得られ、「淡窓会」（東京）の設置・開催されることとなりました。発足当初は、「淡窓会」（東京）と称しておりましたがいつの頃からは判然としませんが、会の名称が「淡窓会」（東京）から「淡窓研究会」に改められました。

発足後、石川謙先生に会長をお引き受けいただいたこともあり、淡窓・咸宜園の顕彰の枠に留まらず、研究的側面の強い集まりとなったのが「淡窓研究会」の特徴です。

初期の会員には、教育史学者の武田勘治先生・小久保明浩先生といった方々にご参加いただきました。武田先生は、大分県杵築市のご出身で石川謙先生と同じく苦学を重ねて、文部省中等教員検定試験合格ののちに、近世教育史を中心に多くの研究業績を挙げられた研究者です。小久保先生は、東京教育大学大学院教育学研究科を修了されたのち武蔵野美術大学にご奉職され、近世教育機関の研究など研究を進めておられました。

また主要な会員として古川哲史先生（東京大学名誉教授、哲学者）がおられました。一九七二年に刊行された古川先生の著書『廣瀨淡窓』は、戦前の小西重直著『廣瀨淡窓』（一九四三年刊行）に次いでの名著です。

古川先生は、鹿児島のご出身で日本倫理思想史を専攻され、東京大学教授のちに亜細亜大学教授を務められ、廣瀨淡窓の道徳思想にも深い関心をもっておられました。古川先生の淡窓研究会へのご参加により、先生の薫陶のもとにあつた若い有能な学徒を会員として迎えることができました。

石川謙先生が亡くなられたのちは、古川先生に会長を引き継いでいただき、父・正雄も運営に関わりながら淡窓研究会は続けられておりましたが、平成元年（一九八九）より一時休会状態が続いておりました。

その後、平成二年（二〇〇〇）に私が会長を務めさせていただきました、淡窓研究会を再開して、現在に至っております。

#### 活動内容

淡窓研究会の主な活動内容については、年二回（六月・一二月の第一土曜日）の定例研究会が中心となります。

この定例研究会では、毎回二名ほどの方から廣瀨淡窓や咸宜園などに関わる研究報告をいただき、活発な質疑応答を交わしています。また会に出席されている方による近況報告などを行っています。また平成一七年（二〇〇五）より、これらの定例研究会の内容について、会報誌を作成して会員の皆様に頒布して会の活動記録として残しています。

出席する会員は、毎回一五名〜二〇名程度で、廣瀨淡窓や咸宜園などに興味・関心を持たれている方、また咸宜園門下生ご子孫の方など様々な方にご参加いただいております。主に関東在住の方が中心となりますが、日田や九州にご縁のある方なども多く出席しております。

平成二年（二〇一〇）に日田市に咸宜園教育研究センターが開設された後には、センター職員の方にもご出席いただき、研究報告や咸宜園を始めとする「近世日本の教育遺産群」に関しての世界遺産登録推進の活動状況や日田市の近況についてもお話しいただいております。

現在の淡窓研究会は、廣瀨淡窓や咸宜園の學術研究の場として、また日田及び

咸宜園関係者の交流・情報交換の場ともなっております。

活動の場所については、平成一二年に淡窓研究会が活動を再開してからは、石川松太郎先生の邸宅である「謙堂文庫」（東京都豊島区西池袋）において定例研究会を長らく開催しておりましたが、現在は二松學舎大學（東京都千代田区）を会場として開催しております。

### おわりに 今後の展望について

今回、文化一四年（二八一七）の咸宜園開塾から二〇〇年、また昭和四二年（一九六七）の淡窓研究会の発足から五〇年を迎える記念すべき平成二八年度（二〇一七）に、咸宜園教育顕彰事業（教育文化部門）の優秀賞をいただき、誠にありがとうございます。

これからも廣瀬淡窓・咸宜園に関わる學術研究と顕彰活動を中心にを行いながら、日田・九州出身者や咸宜園門下生子孫を始めとする興味・関心を持つ多くの方々にご参加いただきながら、長く会を運営していきたいと考えております。



咸宜園門下生 大村益次郎銅像と二松學舎大學  
(淡窓研究会会場)



淡窓研究会 風景

# 淡窓研究会会報

成宣園跡と廣瀬資料館

廣瀬貞雄（廣瀬家第十一世）



廣瀬 貞雄 会長



廣瀬 淡窓

この頃、淡窓研究会会報が創刊された。とにふたつ、長い当研究会の活動の中で、報告を出すことについての要望はあったと思われるが、昨年十二月の例会の席上、提案がありその決定を見たのである。(2)多忙の中、発刊に漕ぎ着けられた幹事の方

発行所	成宣園跡と廣瀬資料館
発行日	2005年11月1日
発行部数	100部
編集者	廣瀬貞雄
発行所	成宣園跡と廣瀬資料館

に心よりお礼申し上げます。  
丁度、今年の十一月一日が淡窓没後五十年に当たり、地元の日田市では記念行事が行われるが、その中で十一月二日には石川松太郎先生が講演を引き受けられ、催しに輪上花を添えて頂くことになっている。日田市では成宣園跡地を整備し、主要な建物を再建して史跡公園として公開して行くべく長期計画を進めている。  
成宣園跡は昭和七年に国史跡に指定されているが、ここに明治末期には日田郡役所が建てられたり、日田郡立工業徒学校が出来たりして、秋風庵等の一部の建物を除いて大部分が壊されたり移されたりしている。因面としては、大正二年(一九一三)に集まった門人の話を元にして絵師・長岡永福に描かされたものが唯一のものとなっている。(下図参照)



成宣園跡、史跡公園

中心的な建物は秋風庵であるが、(一)に伯父の月化が創建した形がそのまま残っている。淡窓は文化十四年(二一七七年)に桂林園から伯父の住む秋風庵に隣接する成宣園を開いたののである。これが後述の二軒と呼ばれるようになる。更に大政四年(二八二二)には、成宣園が塾生の増加で手狭になり、秋風庵の東に東塾を新築した。秋風庵の建物は長い間の損傷がひどく、管理人も住んでいたので放棄

大分県のご出身、父と同じく苦学を重ね、文部省中等学校検定試験合格ののち学界に活動の場を定め、近世教育史を中心に多くの研究業績を挙げられた研究者です。小久保君は、私の後輩として東京教育大学に勤務、新道寛毅の学徒として近世教育機関・青年教育の研究を中心に著書業績を積み上げていました。大切なもう一人は古川哲史先生です。先生は鹿児島県お生生まれ、東京大学を卒業、日本物理思想史を専攻され、同大学教員、淡窓の道徳思想に深い関心をもっておられました。のちに、著書としてまとめる『廣瀬淡窓』(一九九二年刊)に淡窓研究の分野にあって大戦終結以前の小西重直『広瀬淡窓』(一九四三年刊)に次いでの名著といえます。古川先生のご参加によって、この会は先生の薫陶のもとにあつた若い有能な生徒を会員として迎えることができました。廣瀬代議士は、研究的側面の強い本会の特徴を手承したうえで、若い研究生徒の育成を促すために、研究奨励金の授与を申し

出られました。そして、会長の父が会員と際つて第二回の授与者と決めたのが前掲の小久保明浩君です。小久保君は、これをもとに成宣園を中心とする近世史の研究を推し進め、学会活動の足場を固めています。一九六九(昭和四四年)七月、石川謙が鬼籍の人となつてより、古川先生に会長職を継いでいただきました。石川会長が生前と同じように、廣瀬代議士が運営の中心的な役割を担われ、私が補佐となつて事務方の手伝いとなります。代議士は自身も健康そのもので、早朝、時計の針が六時を過ぎる早苦の末に成った成宣園秋風庵を懐す建物において開講されたこと、NHKの職員により廣瀬代議士にレディ出演していただいたのが、私が聞き手となつて、淡窓先生の思想、事跡を語っていただいたこと(その記は石川等編『近代日本教育の記録・上』日本放送出版協会発行)に収録)など、淡窓会足しこの頃の想いは尽きません。ただ、今回は与えられた紙幅をすてに超えていますので、またの機会を俟つておきます。

こうして淡窓会は、廣瀬代議士と会員の熱意によりながら重なり、代議士が一九七〇(昭和四五年)一月より七(昭和四七年)七月まで第3次佐藤栄作内閣の新政府を勤めて分割り刻みの忙し間にあつても、淡窓会一度の中断もなく続けられました。会(た)び(こ)に、きめ細かく配慮でかかっていた代議士をたすける子(こ)う(こ)夫人のお姿は、今でも鮮やかに眼望にのこっています。三川大学の小原岡夫・船越二代の学長による厚志により、同大学の学生諸君による早苦の末に成った成宣園秋風庵を懐す建物において開講されたこと、NHKの職員により廣瀬代議士にレディ出演していただいたのが、私が聞き手となつて、淡窓先生の思想、事跡を語っていただいたこと(その記は石川等編『近代日本教育の記録・上』日本放送出版協会発行)に収録)など、淡窓会足しこの頃の想いは尽きません。ただ、今回は与えられた紙幅をすてに超えていますので、またの機会を俟つておきます。

## 淡窓会(東京)発足のいき

石川松太郎(鎌倉文庫館長、社)石門心学理事)

一九六七(昭和四二年)秋の候です。廣瀬代議士(著者)の電話により、父石川謙の遺志として、面談したいとの電話がありました。自分は近世史の情者であり教育者であった廣瀬淡窓の子孫であるが、教育研究の立場から、その思想・事跡をどのようにして語っておられるのか、もし高い評価が淡窓会にあれば、廣瀬の日田にたつた東京でも淡窓会をおこす中心的な役者に就いていただければ有難いのだが、といった近世教育史の研究者であり、その業績が評価されて、教育史学会の代表理事、日本教育史学会の会長などに就いてきたので、面談にあたり白羽の矢を立てられたものと思えます。当時、息子であった筆者(松太郎)は父を継いで教育史研究に従事、和洋女子大学に勤務していたところから、

父より会見に当たっては同席するようにとの命を受けました。同年秋の深まってきた日の午後、廣瀬代議士は中島市三郎先生をともなうて、父の勤務する日本大学教育程度研究所を訪ねてこられました。中島先生はいうまでもなく、大戦前の一九二五(昭和十)年に、浩翰の著書『教壇・廣瀬淡窓の研究』を世に出されたほどの碩学です。秋のやわらかい日差しの中、筆者も加え四人のあいだで和やかな談話が始まりました。父もまた日本教育史研究の立場から淡窓先生の思想にたつたこと、跡がもつ意義を重く考へていたこと、お二人と別れた後、父は私に向かい「廣瀬代議士は高い教養をもつ深い人格者だわ」との讃評をもしました。そして、東京の淡窓会が発足し、年に数回の会合を重ねていきますが、石川謙が会長を勤めたことをもって、顕彰とともに研究的側面の強い集まりとなつたことが特徴として挙げられると思います。会員には教育史の分野で武田勤次、小久保明浩といった方々が参加されました。武田先生は

## 再開後の淡窓研究会の活動について

三澤勝己(国学院大学兼任講師)

今はじき田中加代先生からお電話があり、淡窓研究会で発表してもらえないか、とお話をかけていただいたのが平成十二年を迎えて間もなくのことであつた。記憶している。そのことが、淡窓研究会に参加させていただく機会となつたのである。田中先生のお話は、伝説的な淡窓研究会も諸般の事情から平成三年以来、休止してのことであつた。その再開後の初の研究会で発表させていただいてから、五年が経過して、そのような活動の中から、会報を発行する機運が生まれ、再開後の淡窓研究会の活動について、簡略ではあるが発表者と発表題目を列挙させていただきます。ことした。なお、またまた記録を採録していな

- 平成十三年(二〇〇二)七月一日 [廣瀬淡窓と経学・文学・洋学、及び経世論] 大倉精神文化研究所専任研究員 三澤勝己
- 平成十四年(二〇〇三)七月一日 [廣瀬淡窓の経済思想] 中央大学大学院生 宮田純
- 平成十四年(二〇〇三)十二月七日 [左記論文の翻訳について] Masahiro Kasai, The Kingdom of Hirose/Tsunetsugu (1858) Educational Theory and Practice in the Late Tokugawa Period. 国学院大学兼任講師 三澤勝己
- 平成十五年(二〇〇四)六月二日 [安政元年正月 廣瀬淡窓と幕府有田の会見について] 田中加代先生を偲ぶ。 平成十五年十一月二十一日逝去された田中加代先生を偲ぶ。





























ても、「短心蘭」の直筆も向野本に伝え残されて...

「短心蘭」の直筆も向野本に伝え残されて... (Continuation of the previous block)

- 『短心蘭』(写本)というより「出版用の手書き原稿」と呼ぶ可能を推察してきた...

成宜園における助手の心得

成宜園の教育方針には、誰をも拒まず万人に門戸を開くこと、個性尊重の精神がある...

「都講」とは何かを説明する前に、親任職の紹介をしておきたいと思う。成宜園で塾生を教える、師範代から宿直、日直まで何らかの職につかせる、責任を持たせようという方針が...

成宜園門下生子孫の集い

平成二十二年(二〇一〇年)十月二十一日、十一月の両日、成宜園教育研究センター開館の記念事業として、成宜園門下生子孫の集いが開かれた...

加えて十一月十四日、五門心学会におきまして三澤隆巳先生が「廣瀨政教の教育」について発表されました...

近年の淡窓関係論文の紹介

廣瀨資料館館長に格別のご高配をいただきました。また、「成宜園門下生子孫の集い」については、吉田博嗣成宜園教育研究センター主幹のお世話をお願いした...

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

淡窓研究会会報

第5号 10月 2012年 10月 成宜園門下生子孫の集い... 淡窓研究会会報

長島氏が「長三洲」の題目で、それぞれ先祖についてお話をされた。次いで、長福寺の住職、武内和朋氏の法話があった...

成宜園門下生子孫の集い

成宜園門下生子孫の集い... 淡窓研究会会報

その後、二つのグループに分れて、淡窓ゆかりの地を散策した。午後六時からは、豆田の「ホテル風早」敷地内に新しくできた「アプロのデイリール」を会場に、第二部「成宜園教育研究センター」が開かれた...

成宜園門下生子孫の集い

成宜園門下生子孫の集い... 淡窓研究会会報

私に着いたグループは、右隣りが日本健康スポーツ連盟評議員の幸嶋馬馬氏、左隣りが井上酒造の井上野子社長だった。幸嶋氏のお話をうかがいながら、強い御土産を持っておられる情報であることを感じた。井上社長からは井上酒造が井上清之助の生家であることを教えていただき、同酒造の銘酒「男子の本懐」を注いで...

律を穿るといふ役割を担っていた「都講」であるが、この役割は現代でいうところの大学教員の何に相当するのだろうか...

された。昨年初冬から体調の異変が見られるようになり、寛平夫夫から何度も病院へ行くことになった...

加えて十一月十四日、五門心学会におきまして三澤隆巳先生が「廣瀨政教の教育」について発表されました...

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

廣瀨資料館館長に格別のご高配をいただきました。また、「成宜園門下生子孫の集い」については、吉田博嗣成宜園教育研究センター主幹のお世話をお願いした...

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

私に着いたグループは、右隣りが日本健康スポーツ連盟評議員の幸嶋馬馬氏、左隣りが井上酒造の井上野子社長だった。幸嶋氏のお話をうかがいながら、強い御土産を持っておられる情報であることを感じた。井上社長からは井上酒造が井上清之助の生家であることを教えていただき、同酒造の銘酒「男子の本懐」を注いで...

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。

「成宜園」のCDで学思をいただいている日野雅彦氏と、初めてお目にかかれたのも意外の喜びであった。



古来、学校制度は命令(皇室令)、学期(日換、明和六年) 学規(高橋藩明倫堂) 学約(建学私塾)等と呼ばれてきた。

廣瀬淡窓は幕末、豊後日田に於いて私塾或宜園を開き、均是人也(均しく是れ人なり)という自由を基調に、近代的教育制度を創造し、それを実践した。

なお『注言』では七百六拾餘言で簡潔に近代学制の理念を説いて、そこに見る教育の理念・方法は、世界的に卓越しており、人類平等教育の魁をなすものである。

この研究は成宜園門下生であった清原吾郎、理次郎、久米千正、長壽吉、小西重直、松月芳雄、藤原助市、石川謙、後藤三郎等々多くの著明な人々から、賛成と諷刺を得た。市三郎の死後、新資料より長文の断片を地道に発見し、その断片を『学制の研究』(凸版印刷株式会社、昭和四十八(一九七三)年)が刊行され、市三郎の研究は再び注目されることとなった。

明治学制西洋論は、学制、冒頭の学区制を始め、医師及び一部の新しい教科書の採用を概して、しかし、学制取調掛長次(昭和四十八(一九七三)年)が刊行され、市三郎の研究は再び注目されることとなった。

わが国の風俗や風俗により、歴史や法令に比べて、中国や西洋に制があれば、彼我を比較対照して、その長短を論議し、未だ世界にない学制の最良なるものを作る。

友基実(三洲)の依頼を受けて執筆したものと伝聞されている。また同年、内田正雄の『和蘭学制』は、明治学制より早い、維新政府の政策の中で使用であった。

加藤有隣は長文の奇兵隊での職であり、成宜園第四代廣瀬林外著『学制』の紹介があったものと考えられる。このように見ると、明治学制以前に『学制』という呼称を用いたものは、廣瀬淡窓・成宜園以外には見当たらない。今の時点では、日本で初めて『学制』を定義したのは廣瀬淡窓であり、淡窓の『学制』である可能性が高い。

この『学制』は大村純顯、仙石政直など数藩の藩主に歓迎され、淡窓の門弟で養子の廣瀬青村(成宜園第二二代)並びに松田道之(内務大臣、東京府知事)による京都府立小学校の創設につながり、さらに明治五年(一八七〇)には同じ『学制』の弟子長次郎の努力によって、『学制五篇』にまとめられ、『文部省学制』の明か台として上られた。その基本的な条項は学制制定をはじめ、明治学制の土台となり、現在もなお各所に生きている。

『学制』は、初めから世界の良ものは採用するものでもあった。それは制度局在籍中から一貫しており、『学制五篇』や文の『学制』(古雲)著『学制一覽』の日本地図上の区分についても、それなりの工夫と苦勞によって成った。八大学の区分だけでも単なる模倣で生まれるものではない。

『明治学制』は、西洋の模倣とする考え方は、当時の日本の社会状況ととりわけ教育事情に鑑みて、現に齟齬を生じさせている。もともと日本で効力を上げていたものに、西洋の技術を取り入れたと解釈した方がより自然であり、妥当であると考えられる。

『明治学制』の『注言』の学制や『村学制』及び規約の優るものは見当たらない。特に、淡窓が取り組んできた作りのための『三善法』、月旦評の考査法や真樫二法を意味した等教習は成宜園を隆盛に導いた独特の教育法であり、その一部は採用され、明治学制の小・中・大の学校の骨格をなしているといえる。

このように、『学制』は廣瀬淡窓が初めて使用した呼称である。ならば、明治学制の模倣において、呼称についての前置きもなく取り組まれたこと自体が、廣瀬淡窓・成宜園を尊重した何よりの証であろう。

『私塾学制』等と当然の如く『学制』という呼称を使用しているが、『学制』は明治の造語ではない。

『明治学制西洋論』は吉田熊次博士の学制制定に関する動機、文、の内容は、主として廣瀬の制度に拠ったものであること、明白である。唯、学制の分類及び名称に関しては米国の制度を参考しているように思う。

『学制制定の動機』は、時の文部少丞待詔三治中期、廣瀬淡窓の成宜園教育にめくく進み、次の様に報告した。

『学制』としていないものを『学制』として取り扱っている。その名のあいまいさは免れるところであるが、内容的には、淡窓の『注言』ほど核心にふれ、具体的に説いたものには見当たらない。もし、淡窓の『注言』をのぐものがあれば、それこそ『学制制定の動機』をより明確に裏付ける資料となるであろう。

学予、改ヤ其字、其文ハ國文、其語ハ邦語ナレバ、科目ノ限タルヲ以テ、認メベカラズ。

この包容性と同化力の豊で自主性の強い二人が、学制頒布後日本全国の太に及ぶ第三大学区、第四大学区、第五大学区、第六大学区、第七大学区は七大学区になつて、第七大学区

学年	上 等 生			中 等 生			下 等 生	
	上 等	中 等	下 等	上 等	中 等	下 等	一 等	二 等
文化二年				四級	三級	二級	三級	二級
文化四年				四級	三級	二級	三級	二級
文化五年				四級	三級	二級	三級	二級
文化六年				四級	三級	二級	三級	二級
文化七年				四級	三級	二級	三級	二級
文化八年				四級	三級	二級	三級	二級
文化九年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十一年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十二年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十三年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十四年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十五年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十六年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十七年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十八年				四級	三級	二級	三級	二級
文化十九年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十一年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十二年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十三年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十四年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十五年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十六年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十七年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十八年				四級	三級	二級	三級	二級
文化二十九年				四級	三級	二級	三級	二級
文化三十年				四級	三級	二級	三級	二級

区の学事を通理して新学制の実地指導に當つたのである。

このような西民平等普通教育の形生えは武士階級の優越性内よりも、天領に於て成宜園の得意とするものであつた。

今、廣瀬源成成宜園の学級制と明治学制学級制を比較すると、学級の等級設定だけに視点を

しければ、如何にも西洋の学制に習つた感があるところだ、カリキュラム内容の組み立てにおいて、正に、成宜園の組み立て方の中にあり、両者は設法形式において相似形を成している。

また、成宜園で等級が進むほど学年の数が増すのに対して、学制では級数が逆に減少している。このことについては、金澤博士は長文家蔵

の、合衆国サンフランシスコ二年四級制と四年八級制の教則の體を發見し、小学教則のモデルであつたことを認めて、これは、漢学者長天の西洋に対する姿勢の柔軟性と、学制の等級が成宜園制と違つた点にも寄つてゐるものである。

なお、「私塾・家塾・試案法の類」と「明治学制」にある日本国民の主体性は、廣瀬源成がわが國に於いて最も早くから創案・実施し、成宜園を確立し得た試案法に最もよく似てゐるものである。

し、著書『学制論考』六〇六頁の約一五〇頁に同表の全文を紹介し、私文では、長の名文連筆とはほど遠いと一顧してゐる。その表紙の「文部省学制原案」は長自書に間違ひなく中味を見ると、法文化されたその前半だけである。後半は、未だ検訂不十分な留學生を派遣し研究中のもの、あるいは必要な経費、予算、開校文書等、今後に備へたものを一まとめにしたものである。前半の法文化された部分には、

四、学制五編について

長天が『学制五編』を起草し、明治五年二月五日に上つたことは日録の題名書にあり、その長天蔵のものに關東大藏氏蔵のものに於いては、編者名と著述の通りである。

『西暦を以て』二、四四頁、学制原案

『西暦を以て』二、四四頁、学制原案

大中小学区分ノ事 一、二〇章

学校ノ事 二、一四〇章

教員ノ事 四、一、四二章

生徒及び検査ノ事 四、九、九二章

学費ノ事 九、三、二二二章

の五編二二二章である。そして、三に使用されてゐる「〇ノ事」を初め「試案」、「等級」という用語は、成宜園特有の用語の規約、皆論等に最も多く使われた独特の用語である。〇ノ事、〇ノ事と一貫性を欠いた部分があるものの、長天の起草が、それに近いものと思われ、しかも、『文部省学制原案』の条文は明治学制成文中の該当部分に上号としてしっかり挿入

れば、如何にも西洋の学制に習つた感があるところだ、カリキュラム内容の組み立てにおいて、正に、成宜園の組み立て方の中にあり、両者は設法形式において相似形を成している。

また、成宜園で等級が進むほど学年の数が増すのに対して、学制では級数が逆に減少している。このことについては、金澤博士は長文家蔵

られている。また、明治五年に発行された『学制』の白表紙に長印の印のあつたもの、その内容の一部に未をいれ、未自ら訂正した字三葉がある。これは、市三郎が長博士から譲りうけたものであるが、その訂正部は正式に発行された学制では朱書きの通りに訂正されている。これらことから、『学制五編』が学制作成のたき台として初めて形をなしたのであり、十分に役目を果たしたことが伺ふ。

『最初の学制』次に「二級学制」については明治五年に大いなる規模の教育制度が發令された。即ち、即ち一九九章より、

『西暦を以て』二、四四頁、学制原案

『西暦を以て』二、四四頁、学制原案

のようになり、追加、追加の離産となつて、いふ『学制五編』(文部省原案)二二二章中の大中小学区分ノ事」は勿論のこと、学校ノ事について、字句に細かい修正や変更がみられるものの、大筋では大部分がそのまま成文に生きている。

五、学校の単一化について

さらに、液受の三筆法は、学制の教育内容だけでなく、教育方針として学校の単一化についても成宜園制を輸入したものである。旧体依然とした武士階級の封建下に根付いた、執拗な二重系統の組織、すなはち武士階級と農工商の差別を完全排除し、純然たる単一化に一新した大いなる立役者となつて、

以上のように廣瀬源成・成宜園教育の理念、方針、制度、方法は、『学制五編』(文部省学制原案)の当初から、明治学制の骨格をなしており、多くのものが現在も生きている。このことは後さらに明らかにされるであろう。

六、おわりに

液受の書ヲ讀ムハ日用ノ爲ナリ、吾等開スルハ日用ニ供セン爲也。己ニ益アルコトハ之ヲ取ル、其子ヲ教フルモ亦カノ如シ。

『西暦を以て』二、四四頁、学制原案

や、一身を立てての財本(並びに、其の産を以てする)とした教育の目的は液受の言葉そのまま太政官の「御披出書」に生かされた。

長天はさらに、「田圃家に鑑み、「國家(譯)の爲にする教育は誤りである」と明記した。これに対して、液受論者は「個人の立身出世のための教育を説き、人民に愛の気があれば、直ちに「國の獨立の基礎となり、國のためになる」と「國のため」を主張した。長天文部省下ろしが成功すると、教育の目的は「國のため」に置きかえられ、学制西洋模倣説(「國に倣はば、生え抜きの制度を、自立的に確立させていたにもかかわらず、その内容を完めようとする、何故「明治学制西洋模倣説」を主張し続けるのか。そこに隠れた教育学者の

発行 液受研究会  
事務局 東京都町田市玉川学園六・一  
五川大学芸術学部 高橋愛  
編集 西江錦史館、高橋愛  
印刷





る。この後、白華は官立京版に遊学し、獲得

した宗学を修め、引きつづき福澤に学ん

でいる。白華の「癡癡」には、万延元年

(一八六〇年)二月の福澤が現れており、

「吾輩向來訪英氏席上感以主人及其少女

擊口舌及一須摩和屈生強待」(吾輩は

吾輩生訪英席上感以主人及其少女

このように、白華は福澤と交遊する

の、大阪の福澤塾で学んでおり、長三洲と

同じく福澤塾の人物であるといえる。

その後、白華は真宗僧として福澤塾を退

社、福澤塾(福澤塾)に在りて

明治四年(一八七二)に上京、福澤塾出

身の真摯、小僧福澤、小僧福澤、小僧

争の火網鉄然ともにも宗名復運動を行

當時の福澤塾は大隈重信に働き掛けて、徒

の福澤塾に於て浄土宗の名称を使用す

こと成功した。翌明治五年四月に福澤塾

に出仕し、同年九月から翌明治六年(一八七

七月まで福澤塾(大谷谷)や福澤塾らと

もに宗名復運動のため福澤塾に赴いて

一方、長三洲は福澤塾に在りて福澤塾

長、明福塾長などを兼任した。明治三年(一

八七〇)には上京し大谷谷大史として制度局

に入り、江藩塾生の知己を得る。同年、新訂

を世に問うて福澤塾に在りて福澤塾

あり、以後良好な関係にあつたと見られる。大

字少宗制度局出仕となつた長三洲は同年四月

小僧福澤塾とともにも清國との条約締結交渉に

たる伊藤博文、福澤塾に在りて福澤塾

新設された文部省に在りて福澤塾

新し明治五年(一八七二)である。

長三洲は福澤塾(福澤塾)に在りて福澤塾

れた。これは福澤塾に在りて福澤塾

白華は福澤塾(福澤塾)に在りて福澤塾

白華は福澤塾(福澤塾)に在りて福澤塾

福澤塾(福澤塾)に在りて福澤塾

の福澤塾福澤塾が設立された。八月三日には

学則が頒布され、十月一日には学区出版が

あり、同日には文部大臣に任ぜられ、同

二十七日には教員会を兼ねる。

このように、明治五年の長三洲は、文部省

として学則の制定に多大な役割があつた。

福澤塾の制定に多大な役割があつた。

の福澤塾福澤塾が設立された。八月三日には

学則が頒布され、十月一日には学区出版が

あり、同日には文部大臣に任ぜられ、同

二十七日には教員会を兼ねる。

このように、明治五年の長三洲は、文部省

として学則の制定に多大な役割があつた。

福澤塾の制定に多大な役割があつた。

る状況であり、次のように述べられている。

福澤塾の福澤塾が設立された。八月三日には

学則が頒布され、十月一日には学区出版が

あり、同日には文部大臣に任ぜられ、同

二十七日には教員会を兼ねる。

このように、明治五年の長三洲は、文部省

として学則の制定に多大な役割があつた。

福澤塾の制定に多大な役割があつた。

外挿書」とあり、広瀬林外、青木純徳、吉野

安ら、八人の福澤塾生を長松文館に引き

留して、林外は江藩塾生に就職し、利き

九月三日には「福澤塾塾生参事長松文館

事務長不説」とあり、長三洲は福澤塾の

を当時の京都府参事長松文館に依頼した

このように、明治五年の長三洲は、文部省

として学則の制定に多大な役割があつた。

福澤塾の制定に多大な役割があつた。

11

二四

は長松を白華が初版し、各方面に紹介を求

ていた記事がある。

白華未だ、云、福澤塾生、余作書

しかし、長三洲は白華の作行については詳細

静養への出仕を働きかけていることは福澤(松

本白華と福澤塾の人々)と、長三洲より江

福澤塾(福澤塾)に在りて福澤塾

福澤塾(福澤塾)に在りて福澤塾

三洲に對してその進捗状況についての問合せ

福澤塾(福澤塾)に在りて福澤塾

12

二四



四郎孫太郎、三六、大井輝實、有女二人、北日本各報助産婦人、とある。  
註1) 本報は五川時社の人々(註2)に掲載(一九二〇年、頁三二)。  
註2) 註1)に提出。

〔脚註〕 本報執筆にあたり、本報専任編輯、松本九氏、妙正住職、小栗橋法寺氏、善教寺住持、本門居士、長福寺住職、武内和朗氏、成宜園教育研究センター、白山市立松尾圖書館、北方心算館、佐伯史館ならびに各寺門徒の方々には、資料の閲覧、撮影等に高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。

〔附註〕 本稿は日本学術振興会・科学研究費(北九州の真宗を例とした仏教近代化に関する基礎的研究)・基礎研究(C)・平成二十四年度(二〇一三年度)文化庁・課題番号24617018、研究代表者・川邊雄大によるものである。

### 廣瀬旭社と僧月性

西江錦太郎(国士館大学)

(一) 廣瀬旭社門下からは多くの専業主婦が輩出している。藤井龍田、行徳宗氏、西島青南、三浦、尾月性、河野秋興、佐村、亀谷春軒、訓子、尾崎善吉、松林飯山、岡田門、田嶋村直人などである。

月性は文化一四(二八)一七、興行園大島郡海崎の妙向寺に生まれた。父は、紙屋、母は尾上、叔父に龍興、海庵がいる。周邦は妙向寺九代住職で、月性はその養子となり同寺十代住職を嗣ぐ。龍興、周邦、月性ともに廣瀬旭社とは深いかかわりをもつ。

龍興は寛政五年に妙向寺に生まれ、文化二年十三歳で筑前大津の船着場に入門した。後には修業時代の廣瀬深形にいた。龍興は文化九年(二〇)歳の時、大坂長光寺の住職の養子となった。

長光寺は交通の要衝大津の船着場に近かった。在任中の月性はここに居住した。専業主婦家月性の身辺には志士達が集まり、長光寺は彼等の運動の拠点になった。

周邦は文化五年三月二十三日の時疫後日田野廣瀬旭社西にいた八幡側で歿を命じた。

### 科研費採択について

川邊雄大(二松学舎大学非常勤講師)

平成二十四年四月より、日本学術振興会・科学研究費(北九州の真宗を例とした仏教近代化に関する基礎的研究)・平成二十四年度(二〇一三年度)文化庁・基礎研究、研究課題番号24617018が採択された。

本研究は、明治期の仏教開拓とわけ浄土真宗(以下、東西本願寺)による布教活動等とされる対外的活動と、それと相連の関係に於いた宗教界の革新の両面に目し、宗教や教育が新時代に刷新し直された日本近代化の過程を広く文化学的見地から捉え直そうとするものである。具体的には、北九州(福岡県・佐賀県・長崎県・大分県など)における東西本願寺に地域と宗派を限定して、その特徴と意義について、特に上記の視点から考察を加える。

- 1 北九州の真宗が持つ地理的・歴史的・政治的な特徴。
- 2 真宗宗義と漢字の関係を踏まえて、仏教と漢字の関係。
- 3 真宗復興期に目を注ぎ、仏教近代化の過程。

廣瀬旭社は、江戸の文人活動の結果、時務に関する最新の情報と知識をもつていた。旭社は羽生善堂、河井信道、伊東玄村、川本香氏、葉作前、佐久間象山らの一流の学識者との交流により世界情勢の知識が深かった。また運動の精進法門と密な協力関係があった。再会された狂言はたまに京坂での人気を集めた。

月性は旭社の下に入門した。旭社の大坂到着の三日後、龍興の十一月以前に弘化三年九月九日であった。日田軍事備忘録には、弘化四年九月二十四日に十返の月性来訪が記録されている。

(二) 幕府が本野忠邦政権の下で、それまで鎖国政策を転換したことが、天保一四年(一八三〇)月性に至りやまれば東上の決意をさせた。月性は大阪では長光寺に寓して、龍興の竹に入門した。小竹はこの時期山崎なごの基坂文壇の拠点にいた。門下には専王廣瀬の御三郎、高橋松次らがおお、周辺には廣瀬旭社、後藤松次、藤沢東睦、野田信清、仁科白らがいた。これらの字名は各国事情に精通した言論者であった。月性は懸命に外国事情について勉強した。

弘化三年九月、廣瀬旭社は江戸での高橋を断念し、大坂に帰着した。〇月十五日には後路野廣瀬旭社西にいた八幡側で歿を命じた。

### 海外布教活動が文化交感と仏教近代化に果たした役割

研究代表者は筆者、研究分担者は町原善雄(二松学舎大学准教授)、高山秀樹(同非常勤講師)、中村聡(三川大学教授)の三名。本会の広瀬真雄会長、西江錦太郎国士館大学教授に研究協力者をお願いしている。

筆者は研究全体を統括するとともに、主にIVについて本報を中心の研究する。

明治期前後、東本願寺は松本白布、小栗善一ら成宜園系派の僧侶を介して、三條実美、江藤新平ら新政府要人の関係を構築した。だが、江藤新平(明治六年の政変)による彼らの失脚によって破産し、別々に大久保利通との関係を構築する。大久保としては西本願寺・長福寺ラインに對する重視から東本願寺と関係を保持することは有益であるため、国内外各地への布教活動を推進したのである。こうした政治と教団の関係を念頭に置きつつ、具体的には成宜園出身で明治初期に接漢布教に従事した田原法水・小栗善一、同じく朝鮮布教に従事した長村四心らを中心として、明治期の東本願寺による琉球・朝鮮布教を中心として研究を進めていく予定である。

これまでに実施した主な研究活動は以下の通りである。

- 第一回報告会  
日時 四月二十八日  
場所 二松学舎大学千代田キャンパス  
内容 研究テーマ、方針の確定、報告七資料等について打合せ
- 第二回報告会(後援研究会共催)  
日時 六月一日  
場所 鎌倉文庫
- 第三回報告会(第二回報告会)  
日時 七月二十八日  
場所 二松学舎大学千代田キャンパス  
進捗状況の報告、今後の予定について打合せ
- 第四回報告会  
日時 八月二十四日  
場所 長福寺(大分県日田市)  
場所 高橋善成宜園教育研究センター長 武内和朗准教授

発表・町原善雄(松本白布と小栗善一)  
武内和朗(高倉宗義と長福寺)  
○現地調査 八月 川邊・町・中村  
十月 高山  
○第四回研究会 十一月五日  
場所 北尾研究所  
資料合わせ・小栗善一(琉球日記)  
進捗報告・今後の研究方針について打合せ  
日時 一月五日  
場所 北尾研究所  
資料合わせ・高山秀樹(「新報と布教」)  
進捗報告・今後の研究方針について打合せ

八月の日田における研究会では、開催にあたって成宜園教育研究センターに協力いただき、ともに、長福寺より会場をご提供頂いた。誌面を借りて厚く御礼申し上げます。次第である。平成二十五年度も引き続き、各分担者が現地調査・研究を実施し、また定期的に研究会を開催して研究成果の共有化をはかり、研究活動を推進していかないと考えている。

最後に、平成十九年の入会以来、筆者の研究活動に理解と協力をいただいた関係各位に、この場を借りて感謝の意を表すとともに、今後の研究活動への更なる御鞭撻を賜りたく思う。

### 事務局より

二〇二〇年度前期は、西江錦太郎先生(国士館大学)による「弘化三年以降の廣瀬旭社」(後編)は、堀本一規先生(明治学院大学)により「谷口重田と成宜園」について発表がありました。その他報告は、前期では向野謙三先生(筑波大学)から向野敬一編年表、後期では高橋善(五川大学)からの「五川大学教授職センター」年報「創刊号」への投稿論文についてです。

二〇二〇年度から、前事務局担当向野謙江先生から引き継ぎましたが、力不足により諸君には御迷惑をお掛け致しております。特に会報の発行の遅れについては、深くお詫び申し上げます。編集行務等見直しをさせていただきます。また、廣瀬旭社に関する情報等ございましたら、お気軽に教えてください。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(高橋善)

発行	漢学研究会
事務局	東京都町田市玉川学園六-二 五川大学芸術学部 高橋善
編集	三澤誠己 西江錦太郎 高橋善
印刷	五川学園DTP制作課











講義をやり、講山安民をよんで修習しても  
らた(要のみ一日ほど絶食した)。

森立之編(官報刊行)『真宗本誌』名譽出版、一  
九八一年。

上野学芸出版部、小室編『真宗本誌』一九  
八八年(昭和六十二年)。

山田三郎『真宗本誌』北條編、一九九二年。  
伊藤九人『真宗本誌』北條編、一九九二年。

伊藤九人『真宗本誌』北條編、一九九二年。  
伊藤九人『真宗本誌』北條編、一九九二年。

### 古谷道庵と大坂成宣園関係史料について

清田直己

本報告は日田成宣園・大坂旭庄の門下生であつた古谷道庵について、また古谷家が持つ大坂成宣園関係史料について若干の考察を加え、紹介するのである。  
古谷道庵は、文政元年(一八一八)二月一日、長府藩西條郡宇賀本郷村(現・山口県西條郡)の古谷忠伸の長男として生まれた。古谷家は、その祖を寿仙といひ忠伸、道庵・鶴光とつづき、四代にわたつて宇賀本郷で医者(守子)を務めた家である。  
道庵は、名を漢、百姓名は幾太郎、字は士先、号は道庵のほかに柳村、望津屋主人、藤堂主人などがあり、通称は良平、秀(尊)平を用いた。  
道庵は十歳の時、成宣園で字んだ(見守)と名を改め、出身の佐々木屋平に譲を受けて(門下生)として、成宣園で学んだ。

### 成宣園研究の現状と課題について

川越建夫

発表者は、これま約一〇〇年間にわたり成宣園に関する研究を行つてきた。  
従来、成宣園および広瀬家に関する研究は、主に教育者からの視点で進んでおり、成宣園における教育や、広瀬家との関係などに着目して研究されてきた。  
これに対し、発表者は近代日中文化交流史・中国文学および日本漢学史の視点から、幕末明治期における真宗僧と成宣園の関係について研究を進めてきた。  
博士論文をまとめた、拙著『東本願寺中国布教』(日本文学出版、平成五)では、幕末に大坂の成宣園に学んだ真宗僧・松本白華を中心に、成宣園が宗門における教育に与えた影響や、成宣園が宗門に与えた影響が明治期に宗門で果たした役割について明らかにした。また成宣園第一代会主を務めた廣瀬道庵は、幕末から明治にかけて、上方へ向

### 成宣園研究の現状と課題について

川越建夫

発表者は、これま約一〇〇年間にわたり成宣園に関する研究を行つてきた。  
従来、成宣園および広瀬家に関する研究は、主に教育者からの視点で進んでおり、成宣園における教育や、広瀬家との関係などに着目して研究されてきた。  
これに対し、発表者は近代日中文化交流史・中国文学および日本漢学史の視点から、幕末明治期における真宗僧と成宣園の関係について研究を進めてきた。  
博士論文をまとめた、拙著『東本願寺中国布教』(日本文学出版、平成五)では、幕末に大坂の成宣園に学んだ真宗僧・松本白華を中心に、成宣園が宗門における教育に与えた影響や、成宣園が宗門に与えた影響が明治期に宗門で果たした役割について明らかにした。また成宣園第一代会主を務めた廣瀬道庵は、幕末から明治にかけて、上方へ向

### 成宣園研究の現状と課題について

川越建夫

発表者は、これま約一〇〇年間にわたり成宣園に関する研究を行つてきた。  
従来、成宣園および広瀬家に関する研究は、主に教育者からの視点で進んでおり、成宣園における教育や、広瀬家との関係などに着目して研究されてきた。  
これに対し、発表者は近代日中文化交流史・中国文学および日本漢学史の視点から、幕末明治期における真宗僧と成宣園の関係について研究を進めてきた。  
博士論文をまとめた、拙著『東本願寺中国布教』(日本文学出版、平成五)では、幕末に大坂の成宣園に学んだ真宗僧・松本白華を中心に、成宣園が宗門における教育に与えた影響や、成宣園が宗門に与えた影響が明治期に宗門で果たした役割について明らかにした。また成宣園第一代会主を務めた廣瀬道庵は、幕末から明治にかけて、上方へ向

旭庄において日田成宣園と同様に月旦評(家名)が実施されており、塾主である旭庄が主宰している。道庵が代りに月旦評を作成して塾生に発表していた。この月旦評は日田成宣園で字んだ塾生が大坂の旭庄に入塾した際には、月旦評の級がそのままだけに引き継がれており、日田・大坂間の月旦評には互換性を有しており、旭庄が大坂に開いた塾は大坂成宣園とも呼ぶべき塾であった。  
現在、古谷道庵関係の史料は、道庵の日記である『古谷道庵日記』を始めとして下関市教育委員会が所蔵している。その道庵関係の史料を調査すると、大坂成宣園における月旦評三枚と塾のカリキュラムが書かれている(時刻)を確認した。日田成宣園の月旦評も三枚しか現存しておらず、新たに三枚の月旦評が確認できたのは大きな発見である。これらの月旦評には後に備後福山藩の藩儒となつた五子寛忠や華岡青洲の弟の鹿城の子である華岡種軒、華岡南洋の子である華岡青洋など華岡流外科医として共に活躍している。また、(時刻)によれば、朝六時に起きて朝飯までの間に会を勤め、朝飯後から昼までは時

で「世説」講、次いで「世説註」、同時に「家名」が実施されており、塾主である旭庄が主宰している。道庵が代りに月旦評を作成して塾生に発表していた。この月旦評は日田成宣園で字んだ塾生が大坂の旭庄に入塾した際には、月旦評の級がそのままだけに引き継がれており、日田・大坂間の月旦評には互換性を有しており、旭庄が大坂に開いた塾は大坂成宣園とも呼ぶべき塾であった。  
現在、古谷道庵関係の史料は、道庵の日記である『古谷道庵日記』を始めとして下関市教育委員会が所蔵している。その道庵関係の史料を調査すると、大坂成宣園における月旦評三枚と塾のカリキュラムが書かれている(時刻)を確認した。日田成宣園の月旦評も三枚しか現存しておらず、新たに三枚の月旦評が確認できたのは大きな発見である。これらの月旦評には後に備後福山藩の藩儒となつた五子寛忠や華岡青洲の弟の鹿城の子である華岡種軒、華岡南洋の子である華岡青洋など華岡流外科医として共に活躍している。また、(時刻)によれば、朝六時に起きて朝飯までの間に会を勤め、朝飯後から昼までは時

で「世説」講、次いで「世説註」、同時に「家名」が実施されており、塾主である旭庄が主宰している。道庵が代りに月旦評を作成して塾生に発表していた。この月旦評は日田成宣園で字んだ塾生が大坂の旭庄に入塾した際には、月旦評の級がそのままだけに引き継がれており、日田・大坂間の月旦評には互換性を有しており、旭庄が大坂に開いた塾は大坂成宣園とも呼ぶべき塾であった。  
現在、古谷道庵関係の史料は、道庵の日記である『古谷道庵日記』を始めとして下関市教育委員会が所蔵している。その道庵関係の史料を調査すると、大坂成宣園における月旦評三枚と塾のカリキュラムが書かれている(時刻)を確認した。日田成宣園の月旦評も三枚しか現存しておらず、新たに三枚の月旦評が確認できたのは大きな発見である。これらの月旦評には後に備後福山藩の藩儒となつた五子寛忠や華岡青洲の弟の鹿城の子である華岡種軒、華岡南洋の子である華岡青洋など華岡流外科医として共に活躍している。また、(時刻)によれば、朝六時に起きて朝飯までの間に会を勤め、朝飯後から昼までは時

で「世説」講、次いで「世説註」、同時に「家名」が実施されており、塾主である旭庄が主宰している。道庵が代りに月旦評を作成して塾生に発表していた。この月旦評は日田成宣園で字んだ塾生が大坂の旭庄に入塾した際には、月旦評の級がそのままだけに引き継がれており、日田・大坂間の月旦評には互換性を有しており、旭庄が大坂に開いた塾は大坂成宣園とも呼ぶべき塾であった。  
現在、古谷道庵関係の史料は、道庵の日記である『古谷道庵日記』を始めとして下関市教育委員会が所蔵している。その道庵関係の史料を調査すると、大坂成宣園における月旦評三枚と塾のカリキュラムが書かれている(時刻)を確認した。日田成宣園の月旦評も三枚しか現存しておらず、新たに三枚の月旦評が確認できたのは大きな発見である。これらの月旦評には後に備後福山藩の藩儒となつた五子寛忠や華岡青洲の弟の鹿城の子である華岡種軒、華岡南洋の子である華岡青洋など華岡流外科医として共に活躍している。また、(時刻)によれば、朝六時に起きて朝飯までの間に会を勤め、朝飯後から昼までは時

で「世説」講、次いで「世説註」、同時に「家名」が実施されており、塾主である旭庄が主宰している。道庵が代りに月旦評を作成して塾生に発表していた。この月旦評は日田成宣園で字んだ塾生が大坂の旭庄に入塾した際には、月旦評の級がそのままだけに引き継がれており、日田・大坂間の月旦評には互換性を有しており、旭庄が大坂に開いた塾は大坂成宣園とも呼ぶべき塾であった。  
現在、古谷道庵関係の史料は、道庵の日記である『古谷道庵日記』を始めとして下関市教育委員会が所蔵している。その道庵関係の史料を調査すると、大坂成宣園における月旦評三枚と塾のカリキュラムが書かれている(時刻)を確認した。日田成宣園の月旦評も三枚しか現存しておらず、新たに三枚の月旦評が確認できたのは大きな発見である。これらの月旦評には後に備後福山藩の藩儒となつた五子寛忠や華岡青洲の弟の鹿城の子である華岡種軒、華岡南洋の子である華岡青洋など華岡流外科医として共に活躍している。また、(時刻)によれば、朝六時に起きて朝飯までの間に会を勤め、朝飯後から昼までは時

で「世説」講、次いで「世説註」、同時に「家名」が実施されており、塾主である旭庄が主宰している。道庵が代りに月旦評を作成して塾生に発表していた。この月旦評は日田成宣園で字んだ塾生が大坂の旭庄に入塾した際には、月旦評の級がそのままだけに引き継がれており、日田・大坂間の月旦評には互換性を有しており、旭庄が大坂に開いた塾は大坂成宣園とも呼ぶべき塾であった。  
現在、古谷道庵関係の史料は、道庵の日記である『古谷道庵日記』を始めとして下関市教育委員会が所蔵している。その道庵関係の史料を調査すると、大坂成宣園における月旦評三枚と塾のカリキュラムが書かれている(時刻)を確認した。日田成宣園の月旦評も三枚しか現存しておらず、新たに三枚の月旦評が確認できたのは大きな発見である。これらの月旦評には後に備後福山藩の藩儒となつた五子寛忠や華岡青洲の弟の鹿城の子である華岡種軒、華岡南洋の子である華岡青洋など華岡流外科医として共に活躍している。また、(時刻)によれば、朝六時に起きて朝飯までの間に会を勤め、朝飯後から昼までは時

事務局だより

○ 協会研究会へのご参加をお待ち申し上げて  
おります。  
問い合わせは、左記の事務局へお願いしま  
す。

〒三〇一八五二二

茨城県水戸市文京二丁目一

茨城大学教育学部 向野康江研究室 気付

協会研究会事務局

事務担当： 向野康江 (090-3417-7658)

(yasun\_konoh@nait.ac.jp)

編集担当： 向野正弘 (090-2915-3843)

(suzuki77@nait.ac.jp)

発行 協会研究会  
事務局 茨城県水戸市文京二丁目一  
茨城大学教育学部・向野康江研究室  
編集 向野正弘

## 咸宜園が近世最大の私塾であった理由について——七つの要因

咸宜園教育研究センター 深町 浩一郎

はじめに

豊後の国日田にあつた儒学者・廣瀬淡窓の開いた私塾「咸宜園」は、江戸時代後期において常時百人程度が学んでいた私塾で、近世日本で最大規模の私塾として知られている。在塾生の最高は二三三人（嘉永五年六月）であつたとの記録があり、全国六八カ国中の六六カ国から塾生が来て学び、塾生数は入門簿上では閉塾までに四、七九七人が記録されており、入門簿の見当たらない塾生や聴講生も相当数いたので、実際の塾生数は六、〇〇〇人近くにのぼるものといわれている。

最大規模とされているのは、一つには塾生数の規模が、在塾生数としても卒業生数の総数としても大きいことであり、二つには存続期間の長いこと、主宰した廣瀬淡窓が約五〇年間の教授をした後、淡窓の養子や門人が引き継いで明治三〇年まで約九二年間存続した存続期間の長い私塾であつたためである。

当時の多くの私塾は、一般的に主宰者の住居などにあつた比較的小規模なもので、しかも主宰者が亡くなれば閉塾となる短期間の塾がほとんどであつたのである。

「咸宜園」は、「史跡 咸宜園跡」として現在、大分県日田市に遺つており、居宅であつた「秋風庵」と書斎の「遠思楼」が現存するが、当時はそのほか「東塾」「西塾」「南塾」「講堂」や居宅「招隠洞」などが立ち並んでいた。また、多くの咸宜園関係の文書・史料については、「公益財団法人 廣瀬資料館」の書庫「廣瀬先賢文庫」に大切に保存されており、当時の状況もよく知ることができる。

この私塾「咸宜園」のあつた大分県日田市は、県の西部に位置し、筑後川の上流の山間部の盆地に開けた小都市である。現在は、JRの鉄道（久大本線）と道路交通（大分自動車道、国道210号、212号、386号など）が通じているが、どちらかと言えば交通の利便のよくない、かなり山間部に位置する地である。

都会でもないこうした小さな町になぜ近世日本で最大規模の私塾といわれる「咸宜園」が存在し、全国から多くの若者が来て学んだのであろうか。

その理由について、以下で、咸宜園を取り巻く様々な要因について考察を行なつてみたい。

### 1. 要因の考察

咸宜園が近世最大規模の私塾となつた理由については、従来よく挙げられるのが、当時としてはユニークであつた咸宜園教育の内容の特徴やその独自性の指摘であるが、その要因だけに帰したのでは十分とさええず、さらに広くさまざまな要因を探つてみる必要がある。

まず、咸宜園の開塾した江戸時代後期の時代背景、とくに咸宜園など私塾を取り巻く教育文化環境がどうであつたのかを理解しなければならぬ。さらに咸宜園の立地した日田の地の歴史的背景や自然環境が重要な要因であつたことも検討する必要がある。そして広瀬淡窓の生れた家庭環境、淡窓の教育にかける信念など、教育者としての広瀬淡窓の人物像・思想なども大きな要因であつたと思われる。さらに全国から集まつた塾生と、全国へ拡がつていった卒業生の動きなども総合的に考察しなければならぬであろう。

そこで、これら様々な要因をあらかじめ整理して簡単にまとめると、以下のようにおおむね七つの要因が考えられるであろう。

まず、外的な要因として、

#### ① 近世の教育環境

咸宜園の開塾した江戸時代の後期は、全国に寺子屋（手習い塾）が普及しており、庶民の教育熱が高まつていた時代であつた。それは、江戸時代が何ごとも文書や書簡での通知や申請が必要とされる「文字社会」と言われる社会であつたため、読み書き・算盤の知識が必須とされる時代で、庶民の子弟が学ぶ寺子屋が広く普及したのである。その結果、庶民の識字率は諸外国に比べて高い水準を示している。そして、寺子屋などの初等教育を終えた若者がさらに中・高等な教育を望んだため、私塾（学問塾）に学ぶ者の需要が増加していったのである。「咸宜園」はその需要に最も広汎に応えることのできた私塾であつた。

#### ② 近世日田の歴史的背景

近世日田は、江戸幕府直轄地の「天領」であり、九州の政治の中心地として「西

「国筋郡代」の役所があった。そのため各藩の御用達を勤める日田商人が活躍することとなり、文化的にも俳諧文芸などが盛んな地であった。また、地理的にも北部九州の真ん中に位置し、当時は交通の要衝として人々の交流も盛んで、いわば九州の政治・経済・文化の中心地とも言える場所であったのである。

このような地に、淡窓は、豊かな商家の子として生まれ、幼少より修学してその恵まれた才能を伸ばし、儒学者となつて私塾経営に情熱をかけて当たつたのである。「咸宜園」の発展には、この日田の地の繁栄の基盤があつたのである。

加えて日田は、代官所の武士は数名しか居らず、実質は町役人の管掌する町人町であつて、比較的自由な雰囲気のある地であつた。そのため、咸宜園に入塾のために日田を訪れた離れた離れる塾生の出入りの行動も、他の地域とくに大名領内の地などの場合に比べて、格段に自由であつたと言えるであろう。

### ③日田の自然的環境

日田は、九州の山間部の盆地にあるこじんまりとした小都市であつて、周囲を低い丘陵が囲む自然豊かな環境にある。そのため、江戸や京都・大坂などの大都市に比べて静かな落ち着いた雰囲気にあつて、寮生活をしながらじっくりと勉学に励むにはかえつて適した土地であつたと言えよう。そして、塾生は勉学の合間には付近の山野に遊びリフレッシュできたのである。

ただ、自然豊かとは言つても「咸宜園」はまったくの孤立した山間に在つたのではなく、人の行き交いの頻繁な豆田町の郊外に位置し、それなりの小都市の雰囲気の中に在つたのである。

要するに、当時の日田は勉学に最適な土地であつたと言えよう。

つぎに、内的要因として

### ④淡窓の人間的魅力

淡窓は、人格的にも教育者としても魅力のある人物であつた。

淡窓は、とても謹厳で誠実な人格者であつたといわれる。しかし、普段は優しい温かみのある人であつた。この淡窓の人は、幼少から病弱な体質で、生涯のほとんどを病気に苦しんだ生活を送つたことと関係していると思われる。自分で三大厄と称している、生死の境を彷徨うような生涯に三度の大病に逢つたほか、いつも流行病に罹つたり、いくつもの持病に苦しんで床に臥して寝込むことが多

かつたのである。病苦に耐えただけに、忍耐力や克己心に富む強い精神力をもつ、謙虚で温かい温厚な人物となり得たのだと考えられるのである。

淡窓は、教育者としては、講義の時や日常の塾生の生活面については厳しい態度で臨んでいるが、言葉では叱らず態度で示して自然に教化がなされるように配慮し、また塾生を差別的に扱ふようなことはなく、その塾生の持つ個性を尊重する姿勢を執つていた。淡窓は、このように、教師として威厳をもち、かつ温和で誠実な態度で接する先生であつた。

加えて、幼少時から神童と称され、亀井塾においても秀才の評判を取つた才能と学識の優れた学者であり、さらに高名な漢詩人としても広く名を知られていた人物であるので、漢学の才能については誰もが皆な尊敬せざるを得ないような先生であつた。

さらに、淡窓六一歳のときには幕府から永世苗字帯刀の恩命を受けて、いわばその業績が全国的に認められることとなつたので、「淡窓先生」と「咸宜園」の評判はますます広がつたのである。

淡窓の人間的魅力、とくに教育者としての魅力は、学問を志す塾生にとつてかなり大きいものがあつたと言えよう。

### ⑤咸宜園独自の教育システム

咸宜園が、常時百人を超える多くの塾生を擁し、しかも永年にわたり運営できた最大の要因は、整つた教育システムを備えていたことに因る。その特色として掲げられるのは、「三奪法」「月旦評」「職任制」などの制度である。これらの制度は、淡窓の独創とは言えないものの、それを塾の仕組みとして採り入れ、淡窓が工夫に工夫を重ねて独自の制度に整えたものである。

これらのシステムによつて、塾生の入門時のスムーズな受け入れから、毎日の学習・課業と毎月の成績評価の効率的な運用がなされ、塾や寮の日常の生活の統制運営が可能となつたのである。このシステムがあつたため、塾生を多数受け入れることができたのである。この教育システムこそ、「咸宜園」が近世最大規模の私塾となつた最も大きい理由である。

この教育方式は高く評価され、全国的に広く知られて模倣する私塾も多く現れ、「咸宜園」以降、次第に全国に拡がっていったのである。

## ⑥ 廣瀬家の支援

淡窓は、日田の有力な商家の一つであった博多屋廣瀬家の長男に生まれた。病弱なため、家督を弟の久兵衛に譲ったが、廣瀬家の中では一番の年長者として最後まで重きをなしていた。廣瀬家の慶弔の際や弟たちとの相談などで広瀬家に頻繁に出入りしている。

淡窓は二四歳で開塾して三六歳で咸宜園に移るまで廣瀬家に居住しており、開塾当時には廣瀬家の土蔵を一時塾として使用していた。このことから、開塾から桂林園の時代の経営はまだ財政上は廣瀬家に依存していたと思われる。また、後に咸宜園に移っても、塾舎建設や運営などに際しては弟の久兵衛や三右衛門らによる協力と支援を受けている。

このことから、咸宜園の私塾経営は、廣瀬家の物心両面にわたる支援、とくに財政上の支援がなければ軌道に乗ることができなかつたと言えよう。そうでなければ開塾初期の段階では運営できなくなつた可能性も考えられる。廣瀬家のバックアップがあつてこそ、着実に塾の規模の拡大ができたのである。

## ⑦ 塾生紹介の全国的ネットワーク

咸宜園に入門の際には、入門簿に塾生の住所・氏名等を記するとともに必ず紹介者を記載する必要があつた。当初は、紹介者は淡窓や廣瀬家の知人や友人が主であつたが、次第に卒塾生が紹介人となり、さらに在塾生も積極的に紹介人となり郷里の親族・友人・知人を入門させている。このようにしながら、塾の評判とともに、入門者も拡大していったものと思われる。

咸宜園には特に塾生に僧侶が多かつたことから、郷里や近隣地や遠方に居る同じ宗派の知人を紹介していくなど、地域の枠を超える宗派のネットワークを利用していったものが多かつたことと思われる。同じように、僧侶の次に多かつたとされる医師の塾生も、同じ医師仲間のネットワークによつて次々と紹介していったものと思われる。

このような紹介によつて国や地域の枠を越えて塾生が広がるようになったと考えられ、紹介システムは咸宜園が全国に知られていくこととなつた大きな要因であつたと言えよう。

これらの七つの要因について、以下さらに詳しく考察してみたい。

## 2. 近世の教育環境

江戸時代の中ごろから、庶民の教育環境が大きく拡大してきたとされている。まずそれは「寺子屋(手習い塾)」の普及に現れている。「寺子屋(手習い塾)」は、庶民の子弟の七歳から一二・三歳に及ぶ子供たちに「読み・書き・そろばん」程度の初等普通教育を教授した庶民教育機関である。

子供たちに文字学習や計算能力の学習が必要となつた理由は、江戸時代が「文字社会」になつたためであると言われる。つまり、幕府による行政の文書主義の徹底と全国的規模の商品流通網成立が、文字の読み書き能力や書式・用語・約束事の学習、文字を流麗に書く能書の習得、計算能力や計算知識の学習などの必要性、いわゆる「読み・書き・そろばん」の学習への需要を一举に高めたと言われている(1)。

「文字社会」とは、文字を使用することを前提として社会の仕組みが出来ている社会を意味する言葉であるが、江戸時代に「文字社会」が成立したのは、戦国時代が終わり「兵農分離」体制となつたためだといわれている。武士と農民が分離され、少数の武士が城下町に住み、多数の農民が農村に住み、支配する武士側から文字に書いた法令や行政文書の情報が示され、支配される農民側からも届出・陳情・申告・訴訟などが文書で提出されるシステムとなつたのである。こうした徹底した文書主義の社会では、読み書きの能力があることが当然の前提となるのである。農民支配は、村の有力な村民が村役人となつて年貢など請負う制度であつたので、村役人には書記能力や計算能力が必須の教養であつたし、また農民も、武士や村役人の不正などに異議を申し立てるためには、自身にも読み書き能力が必要とされたのである。また、商業の発達と海運の整備による全国的な商品流通網の成立によつて、農村までも貨幣経済の社会となり、農民でも文字や計算の能力が必要となつてきたのである。江戸時代は、都市・農村を問わず、庶民が文字学習と計算能力の習得を必要とした時代となつたのである(2)。

さらに、「出版文化」の広がり・普及があつた。庶民の文字の識字率の向上、つまり読者層の増加によつて、商業的な大量出版をする専門出版業者(書肆)が出現する。版木に直接文字や挿絵などを彫り込む整版印刷技術の発達が大量出版を可能にしたのである。出版本は、筆写による書写本と違い誤字や誤伝がなく、文字文化に大きな変化をもたらし、文芸作品や学問教養書が大量に流通して文化

の大衆化が出現したのである。そして、貸本屋も多数出現し、営業も盛んで、貸本で読んで楽しむ人々も多かった。こうした大量出版により、「寺子屋（手習い塾）」のテキストである「往來物」も、多種類のものが大量に普及し、このため、全国で共通のテキストによる教育が行われることとなったのである。また、漢文の書籍である儒学の「経書」などの学問テキストも普及して比較的容易に入手でき、さらに、儒学者などが成果である著作物も出版できることとなって、学問の環境もますます広がっていくのである。江戸時代には全国的に均質な文字文化が成立し、庶民が学ぶ教育環境が成立していたのである（3）。

このように「文字社会」の成立と「出版文化」の発展の背景があり、全国的な教育・学問の普及が拡大していくのである。寺子屋（手習い塾）は、一七世紀から次第に普及し、江戸時代後期である一九世紀の前期には「教育爆発」といわれるほどに拡大したと言われている。『日本教育史資料』によれば、江戸時代の全国の寺子屋（手習い塾）の総数は一万五千余であり、とくに文化期（一八〇四―一八一七）・文政期（一八一八―一八二九）以降に年々爆発的な開設数（全体の七十％）を見たと言われている（4）。

このような初等教育を終え、なお向学心のある子弟を対象にする中等・高等教育機関として「私塾（学問塾）」があり、「寺子屋（手習い塾）」の普及・発達と同時に増えていった。「私塾」には、「漢学塾」「国学塾」「洋学塾（蘭学塾）」「医学塾」「習字塾」「武芸塾」などさまざまな種類があったが、学問の基礎には漢学的素養が必要とされたため「漢学塾」が圧倒的に多かった。『日本教育史資料』によれば、江戸時代の全国の「私塾」の総数は約千五百余であるが、「寺子屋（手習い塾）」の普及と同じく文化・文政期以降から急速に増えている（全体の七五％）（5）。

廣瀬淡窓の「咸宜園」は文化一四年（一八一七）の開設、前身の「長福寺学寮」は文化二年（一八〇五）の開設であり、淡窓が開塾した文化期にはこのような庶民階級の教育環境がすでに整っていたのである。

ところで、このような庶民教育に支えられた、江戸後期の日本の教育水準の高さは、諸外国と比較してもけっして引けを取らないものであったとされるが、日本の場合には特権階級ばかりではなく一般庶民が読み書きできたというところが特

筆される。また、男子ばかりでなく女子も読み書きができたことも特色である。江戸後期の日本の識字率については、基礎史料とする統計の取り方や地域の選び方で研究者によってまちまちであるが、高いものでは七〇〜八〇％程度とするものが多い（6）。

この国民的規模の高い教育普及の基盤があつて、明治の教育制度の実現が可能になったばかりでなく、明治維新後の欧米列強と肩を並べる日本の急速な近代化が達成できたのである。

なお、当時の日本人とくに庶民の読み書き能力の高さと教育の普及については、幕末維新期に日本を訪れた外国人が非常に驚きの目を向けそれを高く評価する記録を残していることが出来る（7）。

ロシアの軍人ゴロヴニンは、文化八年（一八一―）に千島列島で日本側に捕えられ函館等に二年以上幽閉された人であるが、その体験記には「他国民と比較すれば、日本人は天下を通じて最も教育の進んだ国民である。日本には読み書きのできない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もない。日本の法律は、大きな板に書いて町々村々の広場や人目にたつ場所に掲示されるのである。」「国民全体を採るならば、日本人はヨーロッパの下層階級よりも物事に關しすぐれた理解をもつてゐるのである」と記している。日本がヨーロッパ諸国に比べても教育の最も普及した国であると高く評価している。（ゴロヴニン『日本幽囚記』）

安政五年（一八五八）に日英修好通商条約のために来日した在日イギリス公使館書記官のローレンス・オリファントは「日本の子どもたちは男女を問わず、すべての階層を通じて必ず初等学校に送られ、そこで読み書きを学び、自国の歴史に関するいくらかの知識を教えられる。そして、日本の国民教育は、イギリスよりもっと普及しており進歩している、町を通るとき私は学習する子どもたちの楽しい喋々の声を聞く、日本人は確かに書物を読む国民であり、女性はその心情の発達において男性に劣らない。（中略）彼らはまた、まるで郵便制の楽しみにふけているかのように、たがいに短い手紙を書くことが好きである・・・手紙を王国の端から端まで運ぶ組織はきわめて完全なものがある。」と、教育制度の普及や全国規模の郵便制度（飛脚制度）の整備などについて驚きをもって記録している。（ローレンス・オリファント『エルギン卿遣日使節録』）

また、嘉永元年（一八四八）に来日して長崎で幽閉され、長崎通詞たちに英語を教えたアメリカ人のマクドナルドは「日本のすべての人―最上層から最下層まであらゆる階級の男女・子供―は、紙と筆と墨を携帯しているか、肌身離さず持っている。すべての人が読み書きの教育を受けている。また、下層階級の人々でさえも書く習慣があり、手紙による意思伝達は我が国におけるよりも広く行われている。」と記し、すべての日本人が読み書きができ、筆記用文房具（矢立て）を持ち字を書いて頻繁に手紙のやり取りをしていることに驚き、母国アメリカよりも進んでいると記録している。（リナルド・マクドナルド『マクドナルド「日本回想記」』）

さらに、嘉永六年（一八五三）に浦賀に来航したアメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは日本の印象について「下田でも函館でも・・・書物は店頭で見受けられた・・・通俗的な物語本又は小説本で、明らかに大いに需要されているものであった。人民が一般に読み方を教えられていて、見聞を得ることに熱心だからである。教育は同帝国至る所に普及しており、また日本人の婦人は支那の婦人とは異なつて、男と同じく知識が進歩しているし、女性独特の芸事にも熟達しているばかりではなく、日本固有の文学によく通じていることもしばしばである。」と述べている。一般の人々が読み書きできるため物語本などの書籍が普及していること、とくに婦人の知識レベルの高いことに注目している。（ペリー『ペリリ提督日本遠征記』）

万延元年（一八六〇）～文久元年（一八六一）まで日本に滞在したプロイセン人の画家ベルクは「読み書き、国史、道徳哲学などについての青少年教育は、非常に熱心に行われている。いろいろな段階の教育施設もある・・・書道は低い身分の間でも一般的によく広まっている。暇なときの読書はあらゆる階級の日本人が第一にすることである・・・本屋に至る所の通りにあり、本は信じられないくらい安く、それでいかに多くの本が読まれているかもわかるのである」と述べ、日本の教育の普及と出版（読書）文化の普及を驚きの目をもって記している。（ベルク『オイレンブルク日本遠征記』）

また慶応元年（一八六五）来日した、トロイアの発掘で有名なドイツ人シュリーマンは「日本の教育は、ヨーロッパの最も文明化された国民と同じくらいよく普及している・・・だから日本には、少なくとも日本文字と中国文字で構成され

ている自国語を読み書きできない男女はいない。」と、教育の普及がヨーロッパの文明国と同じく国民に及んでいることを記録している。（ハイリッヒ・シュリーマン『日本中国旅行記』）

このような幕末明治期に来日した外国人は、いずれも高等教育を受けた知識人であり旺盛な好奇心を持って日本のことを観察したのであり、その外国人の目で見えた旅行記・印象記は、多少の誇張表現はあっても、当時の様子を精確に記録したものと云つてよいであろう。これらは、当時の日本の教育水準の高さを正しく証明する資料であるといえる。

### 3. 近世日田の繁栄と歴史的意義

「咸宜園」は、日田の地に無関係に突然に現れて発展したのではない。その背景に近世日田の繁栄の基盤があったのである。

近世の日田は、九州の政治・経済・文化の中心地の位置にあった。政治面では、寛永一六年（一六三九）に代官所が置かれて以降九州の幕府直轄地の中心として、明和四年（一七六七）には西国筋郡代となり九州の諸大名を監視した。経済面では、代官所と各藩を取り次ぐ御用達や幕府の金銭を取り扱う掛屋を勤める日田商人が活躍し、大名貸を中心とした「日田金」といわれる金融資本が九州一円を支配した。こういった商業的繁栄をバックに町人文化が繁栄し、とくに日田俳壇といわれる俳諧文化が栄えた。近世後期の淡窓の時代は、日田はすでに幕府直轄地「天領」として大いに繁栄し、文化的な雰囲気が高まっていたのである。

こうした繁栄の基盤の上に、天明二年（一七八二）に日田の商家廣瀬家の長男として淡窓が誕生したのであり、淡窓は幼少から神童と呼ばれるほど聡明で、當時の庶民として望みうるかぎりの勉学に励むことができたのである。

日田が幕府直轄地「天領」になったのは、地理的に北部九州の真ん中に位置し、古代から交通の要衝であったことにあるとされている。日田から六〇キロの円周上に、北部九州の主要都市（福岡市、北九州市小倉、大分市、熊本市、佐賀市）がすべて位置し、しかもすべての都市へ陸上交通の街道が通じていて、また河川交通では九州一の大河である筑後川の上流に位置している。日田は、九州の大藩を監視するのに適地であるばかりでなく、唯一の海外交流の地の長崎とも結ばれていてその情報が届き易く、それを瀬戸内海を通じて大阪・江戸へ報告しやすい

中継的な場所でもあった。

日田の文化的繁栄では、日田商人を中心に庶民文芸であった俳諧が盛んであり、江戸初期から江戸中期に俳人を輩出し「日田俳壇」ともいうべきものを形成していた(8)。中村西園、坂本朱拙、長野野紅、長野倫女などの俳人が活躍し、松尾芭蕉門下の蕉門十哲に数えられる各務支考や志太野坡らが来遊している。また、日田代官であった岡田庄太夫俊惟(俳号露泊)や、揖斐十太夫政俊(俳号楽水)も俳諧を嗜み好んでいる。江戸後期になると、廣瀬月化、廣瀬桃秋、佐藤葵亭などが活躍し、とくに月化は日田俳壇の中心で全国に知られ、その隠居所である日田の秋風庵を訪れる行脚俳人が絶えなかったという。廣瀬月化は淡窓の伯父である廣瀬平八で、三五歳で家督を弟三郎右衛門に譲って秋風庵に隠居した。廣瀬桃秋は平八の弟で、淡窓の父である廣瀬三郎右衛門である。淡窓は二歳から六歳まで伯父月化の秋風庵で養育されている。そのため、その幼少期に秋風庵の文学的雰囲気と周囲の田園の自然環境の中でのびのびと育ち、文学的資質に大きな影響を受けたものと思われる。

また、豆田町の長福寺住職の宝月及び子の法幢・法海と、隈町の広田寺住職の法蘭は、学僧でもあり漢詩文に長じていて名を知られ、子ども時代の淡窓にも漢詩文において大きな影響を与えている。彼らは、本山の京都高倉学寮において講師を勤めたり漢詩集を刊行したりしている。

なお、代官支配の日田の町は代官以下の武士はわずかしか居らず、実質は町役人としての町人が取り仕切っていた町人町であり、そのため比較的自由な雰囲気があつて人々の出入りも厳しくなく、遊学して来る者が集まり易かったと言つてよいであろう。このことは、咸宜園が塾生数で規模の大きな私塾となるのに大いに影響した点であろう。もし咸宜園が、大名支配の藩の中の地域にあつたならば、塾生の自由な出入りはかなり困難を伴つたであろうと思われる。この比較的自由な教育環境にあつたことは、自主的な塾運営上、公的な干渉を極力排除すべき私塾にとって無視できない観点であつたであろう。

#### 4. 淡窓の人格的魅力と教育者としての資質

江戸時代に遊学をめざす者が塾に入門するに際しては、当然ながら、私塾としての評判とその先生の名声を聴いてその決断をしたものと思われる。先生の評判

はとくに重要な目安であつたであろう。咸宜園の入門者が年を追うごとに次第に増えていることからみて、淡窓は教育者として次第に高い評価を受けて広く知られていったものと思われる。それに加えて、漢詩人として次第に有名になり、また儒学者としても名前が知られるようになって、さらにいつそう入門者が増えていったものと思われる。

このように、教育者としてまた儒学者・漢詩人としての淡窓の評価が高まつたため塾生が増加していったことはもちろんであるが、さらに塾生にとっては、淡窓の教育にかける情熱や温かい人柄などその人間的な魅力も大きかつたものと思われる。

#### ① 人間的魅力

淡窓は温厚篤実そして謹厳高潔な人格者であつたと評されている。しかしまた、謙虚で柔和、温かみのある人でもあつた。このような性格は、淡窓が非常に病弱な体質の人で、常に病気に苦しみ悩んだ生涯を過し、そのため、自分の身体の養生と精神の修養の生き方を心がけ、善行の実践に涙ぐましい努力を重ねた人であつたところから形成されたものと思われる。よく知られているように、淡窓は自ら「三大厄」と呼ぶ、生涯に三度も死を覚悟したような大病に罹っており、日常においても多くの持病や流行病に苦しんで寝床に就くことが多かつたことが日記のいたるところに記されている。そのため常に養生に努め、結果として当時としては長寿である七五歳の生涯を全うしたのである。また、病弱である自分の運命をどうにかしたいとして、常に厳しい自省と自己修養に努めたのであり、その善行の実践記録が一万善を達成した「万善簿」として残されている。

病弱であつた淡窓の生涯を見てみると、単に虚弱な弱い性格ではなく、自分が病人として常に苦しんだだけに、むしろ病苦に耐える忍耐力や我慢強さと克己心に富む強い精神の人であつたことが分かつてくる。それだけに、他人に対して謙虚で優しく温かみのある態度を示せたのであろう。また、希望を失わずけつして悲観しない楽観的ともいえるポジティブな志向の人であつたと思われる。このように、人の痛みが分かる優しい人で、かつ前向きな性格も人々を魅きつけたものであろう。

淡窓はまた、穏やかで信心深い人でもあつた。表向きには儒学者として過して

いるのであるが、神仏への敬虔な態度が見られる。廣瀨家は代々信心深い家柄であったためと思われるが、淡窓の日記には廣瀨家での法事の記事や墓参の記事が多く見られ、近隣の神社に参拝している記事も頻繁に見られ、とくに曾祖父の源兵衛の勧請した稲荷社（龍馬森の源兵衛稲荷）には廣瀨家の氏神として事あるごとに詣でているのである。さらに、日記では、毎年、元旦の朝には必ず聖像（孔子像）と、大神（天照大神）、祖先神、年神、諸神を拝し、二日頃には日田地域の総鎮守社の大原八幡宮に参詣している記事が見られる。

## ② 教育者としての信念

淡窓は教育者としての資質に長じた人であった。咸宜園教育においては、「人材ヲ教育スルハ善ノ大ナルモノナリ」（9）という信念で、教育者を自分の天職と定めて、塾教育に真摯な努力を行って、様々な教育システムを工夫したのである。また、「淡窓先生の」生徒ヲ教育スル、偏固狹隘ニ陥ラズ、務テ其ノ材ヲ達スルヲ主トス」（10）と評されるように、塾生それぞれの個性に応じた指導を行い、社会に有用な人材の育成を心掛けたのである。何よりも「咸宜」という名称が『詩経』の「咸ク（ことごとく）宜シ（よろし）」という言葉からきており、すべての人はそれぞれ天より豊かな資質を稟けた存在であり、それぞれの役目を世のために活かしていくという理念が込められているといわれている。塾生一人一人の資質を大切に、その可能性を引き出し伸ばしてゆくことを目標として教育して行くことが自分の使命であると考えていたのである。

そして教師としての在り方にも心を配っている。教師としての心構えについて、塾生に対して「礼義ヲ詳ニシテ法律ヲ略シ、教化ヲ先ニシテ賞罰ヲ後ニシ、口ヲ以テ教ヘズ身ヲ以テ教ヘ月日ヲ経テ自然ト人ノ化スル様ニ致スベク候」という姿勢を示しており、また、「師ニ孔子ノ徳ナクテハ弟子ニモ顔閔ノ行ヒハ責メ難ク候」（11）と述べているように、教育者としては師に人徳があつて始めて塾生が服するということを語っており、「人の師となるは容易のことにあらず。・・・弟子の行状は多く其の師に似るものなり。・・・少々文字を知りたりとて、師とすべき程の器にあらざるものに教を托する事、猶ほ未熟の医に性命を托するが如し。危き事なり。・・・若し人の師たることを欲せば、得と学業を修し、行事を研ぎ、己が為にするの務め既に終て、而して後、人の為にせば、誠に天下有益の事な

り」（12）と塾生たちに論じたように、師たる者はそれなりの学業と徳とを修めて見識を研いた後でなければ、師となつても世の中にとつては益がなくむしろ危険でさえあり、人を指導する立場の師となることはとても厳しいものであることを述べている。

## ③ 淡窓の教育方針―先ず治めて後教える

淡窓の教育方針は、塾生を正しく教え導くには「教える」だけでなくその前にしっかりと「治める」ことが大事であるとし、塾での「職任制」や「規則類」を定めていた。「凡ソ人ヲ率キルノ道ニツアリ、一ハ治、一ハ教ナリ。・・・数百傑驚ノ少年ヲ一室ニ聚メ、唯ダ経義ノミヲ伝ヘ、規約賞罰ヲ施サズバ、是レ之ヲ駆ツテ放逸ニ赴カシムルナリ。故ニ余ガ人ヲ教フルハ、先ツ治メテ、而ル後之ヲ教フルナリ」（13）と述べ、血気にはやる少年たちに規則などで統制せずに唯だ勉強を教えるだけでは放逸に向かつてしまうので、そうならないように、共同生活の中で塾生全員に職任分担をさせて自主的な運営を行わせて塾の統制を保つとともに、規約規則類で厳しく規則正しい生活習慣を实践させたのである。規約については「規約法度、謹厳ヲ極メ、賞罰黜陟、殆ド軍令ノ如シ。其ノ施設スル所一端ニ非ズト雖モ、大意、其ノ放蕩懶惰ノ氣ヲ除キテ、順從勤勉ノ行ヒヲ生ゼシムルニ在リ。故ニ、在塾ノ者、百人ニ過グルト雖モ、忿争畔乱ノ患ヘ少ク、淫逸邪侈ノ害多カラズ。才モ不才モ、皆ナ少シク成ヌ所アリ。・・・是レ、門下ノ人多キ所以ナルベシ」（14）と、謹厳を極めたためその成果の大きかったことを語っている。この「教える前に治める」という教育方針こそ、それまでの先行する私塾にないユニークな徹底した方針であった。塾における教育の外は自由放任の私塾がほとんどであった時期に、塾生の生活の面まで配慮して正しく教え導こうと工夫したのである。

淡窓の私塾経営の巧みさについて、井上義巳は淡窓を「優れた教育組織者」と評し、「門人たちを一人一人大切にしながら、咸宜園という私塾を経営し、塾生が何人に殖えようが、これを一つの組織と統轄の中に入れ、咸宜園を維持し、経営し続けた、いわば教育組織者であった」（15）と述べている。淡窓の日記に詳細に記されている塾生の入退塾の記録及び毎月の日旦評での在塾状況（在塾生・外塾生・居家生・帰省生に分類して記載）の記録で分かるように、淡窓が塾生の

動向を正確に把握し掌握していたことを「門生の正確な把握を常に実施し、すべての門生が確実に淡窓に掌握されたことは、塾発展、門生の教育徹底の決定的要因となった。淡窓における他にその類を見ない塾勢の発展の基礎がここにあった。淡窓の教育組織力の見事さというのは、この門生の見事な掌握にあったといつてよいであろう。」としている。

また、衣笠安喜は「私塾経営にプロ意識」が徹底していたとし、「こうした施設やシステムよりも、決定的な意味をもったのはやはり塾主の学問と人格である。公的な教育機関と違って、門人が多いといつても私塾であるからとくにそうである。この点に関して、わたしがまず感心するのは、淡窓の私塾経営者ないし教育者としての徹底したプロ意識である。淡窓は文政一三年（一八三〇）末弟の旭荘にいったん咸宜園の経営を譲ったが、その時旭荘に申聞書を手交して塾経営の心得を伝えた。そのなかには、「儒家の門人は僧家の檀越同様に候」以下の一条がある。檀家の帰依なしに寺が成り立たないように、門人の帰依なしには師家は成り立たない。しかも寺の場合と違って儒家門人は出入自由であるからなお難しい。儒家にとつては「門人の帰依第一の心掛に候」であるという。そして要するに、世間には名儒は多いけれども、いづれも面倒な事を嫌い、門人の世話が行き届かず、それゆえ門下も繁盛しないことになる。それですませられるのは「官禄アル人」のことであつて、「我等其方は門人の力を以て妻子を養ひ候得ば、第一の天職なり」、門人の世話をゆめゆめ粗略に思つてはならない、と淡窓は説いている。研究者と教育者を兼ねる今日の大学教師にとつて、いささか耳の痛いことばである」(16)と述べている。

#### ④塾生との触れ合い

一方では、「扱テ、禁ヲ嚴ニスルカラニハ、禁外ノ事ハ如何様ニ致シ候テモ一切差許シ置キ候。是ハ一張一弛ノ道理ナリ。・・・礼儀ヲ詳ニシテ法律ヲ略シ、教化ヲ先ニシテ賞罰ヲ後ニシ、口ヲ以テ教ヘズ身ヲ以テ教ヘ、月日ヲ経テ自然ト人ノ化スル様ニ致ス可ク候。・・・兎ニ角、忠アリテモ恕ナクテハ人ハ帰服セヌモノナリ」(17)と述べ、教師には、ただ厳しいだけでなく思いやりや寛容の心得も必要だとしている。

勉学面では淡窓はあくまで威厳のある教師であつたが、勉学以外での淡窓の門

人への思いやりや温かさを示す例として、塾生を招いての談話（夜話）を好んで行つていたことが挙げられよう。塾生との接触を何よりも大切にしていたのである。「古人ハ琴瑟ヲ以テ憂ヲ解ク。我ハ則チ吟詩、談話ヲ以テ憂ヲ解ク」(18)と、漢詩の吟詠とともに談話をもつて憂愁を解消する楽しみとしていたことを言い、さらに自身の亀井塾での修学の回想として「其ノ益ヲ得シモノハ、聴講ニ在ラズシテ談話ニ在リ。一生ノ識見、其ノ話中ヨリ来ルモノ多シ。当時或ハ漫然トシテ之ヲ聴キシモ、後ニシテ之ヲ思ヘバ、其ノ語ノ皆確力ナルヲ覚ユ」(19)と談話の効用を強調している。門人の思い出でも「和肅堂（秋風庵）に於て夜話と云ふ小会が催されて、雑談即ち四方八方の話の裡に、塾生それ自身の国風や古人の俤を偲ぶとりどりの話や、さては詩歌文章の話も聞きもし、又述べもして、知らず識らずの間に師弟の情誼が結ばれたり、一面淡窓に在りては又塾生の性格を知るべき機会をつくられたものである」(20)との追想が語られており、各地方から来た塾生からは故郷の国の話や悩みなどを聞き、淡窓からは学問や詩文に対する質問に答えて、お互いに人柄を親しく知り合う機会であつたことが分かる。

淡窓の塾生に対する温かい応対が逸話として残されている(21)ので紹介する。一つの逸話は、塾生の一人が夜に乗じて園の中にあつた柿の木に登つてのを見た淡窓は、黙つて樹下で読書を始めた。そのため、その塾生は逃げられず己むを得ずに木を降りて柿を盗つた罪を謝したが、淡窓は一言も云わず徐に樹の下を去つた。これ以降、柿を盗むものは全くいなくなったことである。また一つの逸話は、ある塾生がたびたび夜間に近くの実家に帰り菓子類を買つて来て食う癖があつたのを知つた淡窓は、夜に呼んで肩を叩かせながら教訓談を聞かせるようにしたが、毎晩肩を叩かせるので、その塾生は堪え切れず、強く叩けばそのうち苦痛に耐えずに止めることになるだろうと段々と拳に力を入れて叩いていったが、淡窓は平然としていた。入浴時に当番の塾生が、先生の肩が真っ赤に腫れ上がつているのを発見し、その訳を聞いてその塾生に告げたので、恐懼してにわかに悔悟の念を起こし、それから後は大いに学に励むことになつたということである。淡窓は、直接に厳しく叱つたりせずに、身をもつて教え諭して、自然と悟つて改まつていくように教化していたことが分かる。

また、淡窓の詩集『遠思樓詩鈔』の中には、塾生の生活や気持ちを詠んだ漢詩が少なからずあつて、淡窓の塾生への思いやりの気持ちも伝わつて来る。

さらに、塾の規約では定まった休日のほかは春秋の山行（レクリエーション）があり、塾生は「春秋兩回、山行ト称シ山或ハ社寺等ニ遊行」(22)し、心身をリフレッシュさせていた。淡窓の日記にも、山行の日や放学（休講）の日などに、塾生らとともに一緒に近隣の山野や寺院仏閣を遊山し、周辺の景色を楽しみ弁当を開き、興によって詩作をしたことがたびたび記されている。

### ⑤ 情操教育としての漢詩教育

江戸時代の後期、淡窓は有名な漢詩人としても知られており、菅茶山、頼山陽とともに江戸後期の三大漢詩人とも呼ばれ、淡窓の詩集『遠思樓詩鈔』は天保八年に大坂で出版されるが、菅茶山、頼山陽を凌ぐ人気があつて大いに流行したと報告されている。その漢詩人の魅力に引かれて入門しようとした者も多かったと思われる。

淡窓は漢詩について通曉していたので、漢詩文による教育を情操教育として行っている。それは「詩は人の情を詠うもの」という考えのもと、詩によって塾生の情操を育み、豊かな人間性を創っていく教育であつた。淡窓は詩作の意義と効用について「詩ハ情ヨリ出ルモノナリ。詩ヲ好マザルハ其ノ人、天性ニ情ナキガ故ナリ。若シコレヲシテ詩ヲ学バシメバ、自然ト情ヲ生ズ」と述べ、「詩ヲ作ル人ト詩ヲ好マザル人ト異ナル所ヲ見ルベシ。詩ヲ作ル人ハ温潤ナリ、詩ヲ好マザル人ハ刻薄ナリ。詩ヲ作ル者ハ通達ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ偏僻ナリ。詩ヲ作ル者ハ文雅ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ野鄙ナリ」とし、「詩文ノ道、文ハ意ヲ述ブルコトヲ主リ、詩ハ情ヲ述ブルコトヲ主ル。故ニ、無情ノ人ハ必ず詩ヲ作ルコト能ハズ。作リテモ詩ニナラズ。カクノ如キノ人ハ方正端嚴ノ君子ナリト雖モ、其ノ行事必ズ人情ヲ尽サザル所アリ。孔子曰ク、溫柔敦厚ハ詩ノ教ヘナリト。此ノ四字、唯一ツノ情ノ字ヲ形容スルノミ。是レ、予ガ弟子ヲシテ詩ヲ学バシムル所以ナリ」(23)と述べて、詩を作ることは塾生の人間としての情を涵養し温厚な人格を形成するのに資するものであるため、塾生に詩を学ばせるのだとしている。

淡窓は塾生には吟詠を許していたようで、塾生の塾生活の記録には「午後七ツ時、夜四ツ時ノ間ハ、吟詩読書、高声ヲ許シ可ス。其ノ余ハ沈黙、誼嘩ナルヲ禁ズ」(24)とある。吟詠について、別の塾生の回想には「塾の規律は随分厳肅であつたが、しかし一方には英気を養う為として寛裕なところもあつた。晩食後、点灯頃迄は散

歩も許され、また塾内に於いて朗々と互いに相唱和して詩を吟ずることなども最も盛んでありました。其の吟じ方は流暢淡雅、一種の宜園調と当時世人は評しました」(25)とあり、吟詠は塾生の中で盛んで「宜園調」と呼ばれる独特のものであつたという。

また、淡窓は塾生に詩作を奨励しただけではなく、その塾生の作った詩を編集して『宜園百家詩』として出版している。初編・二編・三編の合計二〇巻、五一八名の門人の詩を載せたものである。当時は木版印刷の時代であり、出版の困難な時に二〇巻の詩集を刊行したことは、詩を学ぶ塾生を励ますとともに咸宜園教育の成果を世間に知らしめるものでもあつた。

### ⑥ 偏らない教育方針

淡窓の学問的態度は、一つの学派や学説に拘らない学風であつて、その教育方針も広く学ばせて特定の学説にこだわらないものであつた。福岡の亀井塾では、徂徠学を学んだが、病氣のためやむなく一九歳で退塾した後は、療養しながら独学で朱子学などを学び、とくに諸子学である老子の思想に惹かれ傾倒しており、また仏教思想にも興味をもつたと述べている。淡窓自身は自ら撰した墓誌銘に、自分の学問を「其ノ学ハ大觀ヲ主トシ、人ト同異ヲ争ハズ、旁ヲ佛老ヲ喜ブ。世、称シテ通儒ト曰フ」(26)と総括している。「通儒」とは全般に通じた儒学者という意味であり、儒学だけでなく老荘学などの諸子学・歴史学・漢詩文および仏教思想など広く通じた漢学者ということを語っているものである。学説の細かい違いにはこだわらず、その優劣を争わず、「大觀」、つまり大局から物事を観る立場で学問を行うということを述べているもので、一方において、儒学だけでなく仏教思想も老子思想も好んだと述べる。そのため、儒学の朱子学と古学（徂徠学・仁齋学）との異なる学説については「予ハ二説共ニヨルナリ」(27)と拘らないことを述べており、「世ノ所謂折中學者ト相似タルモ、其ノ実ハ則チ非ザルナリ」(28)と、自分の学は、各学説を取捨選択し良いところを採って折衷的見解を説く折衷学ではなく中立の立場であると明言している。

当時は、高名な塾の主宰者（学者）は、自分の学説を門人に講義し他の学説との異同と優劣を論じて、その説を門人が受け継いで発展させるという型の塾が多かつたので、淡窓の咸宜園の教育は思想的に自由でユニークなものであつたと言

えよう。

門人の武谷祐之の記録によると「(淡窓)翁ノ学、敬天ヲ主トシ、処義、制数ヲ用トス。経ヲ解ク、新古ニ拘泥セズ、唯本文ニ折衷シ、書ヲ読ム、内外和漢古今ヲ問ハズ、唯其ノ適用ヲ採ル。生徒ヲ教育スル、偏固狹隘ニ陥ラズ、務テ其ノ材ヲ達スルヲ主トス」(29)と記しているように、淡窓先生の經典の学は、新註とか古註といった註釈などにとらわれない態度で、古典本文のみを解釈するもので、古今和漢の様々な書物を広く読んで、真に実用に適したところを採る立場であり、塾の教育では狭く偏らない態度で、主としてのびのびと塾生の個性や才能を伸ばすような教育指導をしたと語っている。このように広く自由に学問を教授する咸宜園の学風は、塾生を魅きつけたものと思われる。

この淡窓の学問的態度は、実は、病弱であった淡窓の生涯と実体験から来ている。それは、淡窓には若い頃より眼疾があり、二八歳の時に専門の眼科医を訪ねて診察を受けた結果、このまま読書が続け損生をしなければ将来失明すると診断されたため、悩んだ末、あえて細字の註釈等を読むことを避け、ただ太字の本文だけを読むこととしたのである。そのため「予、経ヲ説クニ、唯ダ本文アルコトヲ知りテ、註釈アルコトヲ知ラズ。諸家ノ説知ラザルコトナレバ、是非ヲ折衷スベキ様ナシ」(30)と、細かい註釈は考慮しないことを述べている。しかしその結果、「是(眼科医の診察)ヨリ後、再ビ註解ヲ見ルコト無ク、マタ雜書ヲ博覽スルコト無ク、唯ダ本文ヲ熟読シ、其ノ他ハ瞑目静坐ノ中ニ工夫ヲ用ヒ、書ヲ檢閲スルコトナシ。然セシヨリ今日ニ至ルマデ殆ド四〇年、眼モ追々衰ヘタレドモ失明ニハ至ラズ。(中略)是、敢テ諸説ノ得失可否ヲ論セザル所以ナリ。(中略)先ニ予ヲシテ眼疾ノ患ナカラシメバ、今少シハ疏解ヲモ究メ博覽ヲモ務ム可ケレドモ、必ズ誦詁考証ノ中ニ精力ヲ費シ、道ノ実用ヲ味フコト有ルマジ。予、固陋ナリト雖モ、瞑目静坐ノ中ニ於テ自ラ了悟ヲ得タリト思フコト多シ」(31)と、六五歳の時の回想録で述べているように、本文のみを熟読して瞑目し思索したために、かえって悟り得るところがあったことを述べているのである。

また、淡窓の学問観は、自分のために学ぶ自主的な学問、つまり自分の修養のための学問、あるいは自分の生き方や日常の行為に役立つ学問を学ぶという態度であった。そのことを、「我、学問ヲスルハ古人ニ奉公ノ為ニ非ズ。唯ダ己ガ身ノ為ニスルナリ。故ニ聖人ノ言ト雖モ己ガ身ニ切ナラザルコトハ之ヲ除キ、諸子

百家ノ言タリトモ己ニ益アル事ハ之ヲ取ル。其ノ弟子ヲ教フル、亦カクノ如シ」(32)というように、儒学の経書だけを尊ぶだけでなく諸子百家の学でも自己の修養のためになる言説は取り入れるという柔軟さがあり、塾生への教育のやり方もそのようであったと述べている。また、「書ヲ読ムハ、日用ノ為ナリ。古人ニ奉公ノタメニスルニ非ズト思ハバ、何ニテモ己ガ心ニ合ヒタル説ヲ取ルベシ。其ノ説ノ吾心ニ合ハザルハ、畢竟我ガ物ニナラヌ故ナリ。ソレヲ強テ行事ニ施スハ危シ」(33)と、あくまでも自分の心に納得のできる役に立つ実用的な学問をめざしていたのである。

このように、淡窓の塾がめざしたのは、それまでの私塾のような、自分の学風を弟子に及ぼし継承させる学派的な学者を育てる塾や、自分の思想を植え付けた同志的な活動家をつくる塾ではなく、広く学問の基礎や教養を教授して真に社会に有用な人材を育てる塾であったと言つてよいであろう。淡窓が「予ガ門ニ入ル者、前後数千人ニシテ、其ノ儒ヲ業トスル者、数十人ニ過ギズ。(中略)故ニ儒トナル者ニ至リテハ他門ニモ遊バセ、其ノ人ノ本志ニ從ツテ其ノ居ル処ヲ扱バシム。敢ヘテ予ガ学風ヲ以テ之ニ及バズ」(34)と、儒学者になろうとする者について述べているように、あえて自分の学風は教授せず、儒学の基礎や漢詩文の教養をマスターして卒業した後には、その人の個性や志望に応じてさらに専門的に学んで飛躍できるように指導したのである。儒学者であれば福岡の亀井塾などの他塾に進ませ、医師志望であればシーボルトの鳴滝塾や緒方洪庵の適塾などの蘭学塾または著名な漢方医の塾に進学させ、僧侶であれば浄土真宗の高倉学寮などの宗派本山の学寮に進ませたのである。もちろんそのまま咸宜園で最高の等級の八〜九級まで進級して高度な学問内容を学ぶことも可能であった。この偏らない教育の結果として、門下生の卒業後の活躍分野は非常にバラエティに富んでいるのである。政治家・官僚・財界人・儒学者・蘭学者・医者・僧侶・神官・画家・科学者・歌人・勤皇家など様々である。なかでも、とくに自分の郷里に帰り私塾等を開き教育者となった儒学者や僧侶は数多く輩出しており、庶民教育の裾野の拡大・普及に及ぼした影響は大きい。

#### ⑦全国的な評価

教育者としての淡窓は、晩年にはその名が広く知られ全国的な評価を得ていた。

天保一三年、淡窓六一歳の時、永年の教育の功績により「多年学業相励ミ、世上手広ク教授致シ候ニ付キ、苗字帯刀永々差免ス」(35)という、幕府からの永世苗字帯刀の恩命を受けた。これは幕府老中の水野忠邦より授けられたもので、淡窓の業績は幕府の中枢にも知られていたのである。この後、淡窓は大村藩に招聘され、続いて府内藩に招聘され、藩校での講義や藩校改革に当たっている。

これらのことで、淡窓の名はいっそう知られ、淡窓と咸宜園の評判は全国的にさらに高まり、塾生数も増えていったといえよう。

## 5. 咸宜園の独自の教育システム

咸宜園が、常時百人を超える多くの塾生を擁し、しかも永年にわたり変わらずに維持したのは、その整った教育システムを備えていたことに因る。私塾咸宜園教育の特色としてよく知られているのは、「三奪法」「月旦評」「職任制」等のしくみである。これらの制度は、その発想の基においてはけっして淡窓の独創のものとは言えないが、それを私塾教育の仕組みとして採り入れ、工夫に工夫を重ねて独自の制度に整えたのは淡窓の独力のものであってよいと思われる。この工夫改良についての努力について、淡窓は、四九歳の時に弟の謙吉二四歳に塾政を譲るために与えた申聞書で「教授の儀は二〇年来、心を砕き候に付き手覚へ候処もあり、門下も他方よりは繁盛に候。・・・人の心付きなき処に工夫を勞し候。凡そ席序の法、分職の法、試業の法、一切の規約等、何れも二〇年来の工夫を以て、或は増減し或は改革致し置き候」(36)と述べている。

この整った教育システムこそが、咸宜園が多くの塾生を受け入れて統御することを可能とし、淡窓没後も後継者が永く塾を運営しえた基盤であり、咸宜園が近世最大規模の私塾となった最大の理由である。この教育方式が高く評価され、しだいに全国的に広く知れわたっていったのである。

### ①三奪法

「三奪法」については「我が門ニ入ル者、三奪ノ法アリ。一二曰ク、其ノ父ノ付スル所ノ年齒ヲ奪ヒテ、之ヲ少者ノ下ニ置キ、入門ノ先後ヲ以テ長幼ト為ス。二二曰ク、其ノ師ノ与フル所ノ才学ヲ奪ヒテ、不肖ナル者ト伍ヲ同ジクシ、課程ノ多少ヲ以テ優劣ト為ス。(三三曰ク)、其ノ君ノ授クル所ノ階級ヲ奪ヒテ、之ヲ

卑賤ノ中ニ混ジ、月旦ノ高下ヲ以テ尊卑ト為ス。是レ三奪ノ法ナリ」(37)と淡窓が述べるものであるが、要するに入門時に年齢・学歴・身分の三つを奪ってすべての者を無級に位置づけるもので、当時の身分制社会に在って、学ぶ意欲のあるすべての者に、とくに一般の庶民に広く開放された塾であったことを意味するものである。これは、入門に際し、その人がそれまでに持っていた他人との格差となるものを全て奪い取って、スタートラインを平等に揃えるということである。塾生を人間として平等に扱い、それぞれの個性を尊重する淡窓の教育の原点であると言えよう。この発想の基はたぶん、前時代から中心を占めてきた寺院における教育が、佛の前では衆生は平等であるとの教えによって、あらゆる階級の子どもを受け入れていたことの連想によるのではないかと思われる。

咸宜園の実態では、入門簿による入門者の身分別による統計によると、武士はわずか六・四%で、僧侶が三三・八%、その他が五九・八%であり、ほとんどが庶民階級の子弟であった。年齢別では、一四歳から二三歳までが多く、平均年齢は一九歳であり、ほぼ現代の高校生と大学生の年齢の者が混在して学んでいたことになる(38)。学歴別については不明であるが、他塾などで学んでいた者もかなり入門して来ていたものと思われる、その場合は入門した後に「超遷」いわゆる飛び級が行われていたことで分かる。

この「三奪法」は、結果的に、当時の封建的身分制度とくに世襲制に対する挑戦でもあったと評されているものである。

### ②月旦評

「月旦評」は「月旦(月のついたち)の評価」という意味で、中国の『後漢書』の「許劭伝」にある、許劭が従兄の許靖と毎月の朔日に郷里の人物の批評をしあったという、もともと「人物批評」という意味の故事からきている。これを塾生の成績評価のことに使用したもので、毎月末に塾生一人ひとりの学業成績を評価し、翌月初めに発表する制度である。

おそらく先行の私塾や藩校でも行われていたものを参考にしたものと思われるが、淡窓はそれらに存した身分などによる一切の差別を払拭して、純粹に成績のみで評価するようにさらに厳密なものに整備し、開塾当初の四級制から六級制、さらに九級制に拡大整備していったものである。そして、さらに厳密に評価する

ため、試験の得点数のみでは仮進級とし、その級で決められた課程を満たしているかを検閲する「消権法」をも追加改良している。

この「月旦評」での評価が厳正公平であったことは、淡窓が数カ月を要する旅行中でもわざわざ咸宜園から資料を送り届けさせて自ら月旦評を作成し送り返していたことなど、他人に任せずに常に淡窓が自ら作成したことに表われている。また、いわゆる「官府の難」で郡代から月旦評改変の干渉を受けて変更を余儀なくされた際も、秘かに別に正当な成績評価のものを作成していたことから分かる。この「月旦評」の厳正さは、とくに塾生が上級である七級・八級・九級に進級したような優秀な人物であれば、卒塾して社会に出たばあい、その人物の学力や人格を示す指標として社会的な評価を受けて信用されたものと思われる。それは、多くの門下生が、国に帰り藩校の教授などに登用されていることを見ても分かる。なお、後に内閣総理大臣となる清浦圭吾も政府の官僚として抜擢されるときに、咸宜園の都講を務めたという評価で高官たちに信用されたと伝わっている。

この「月旦評」の制度は、当時の何事も家柄・身分によって評価される身分制社会で、自分の学問の実力のみによって公平正当に評価されるものであり、塾生たちの学習意欲と競争心を刺激し真剣に勉学に励まさせる画期的なシステムであったと言える。なによりも、塾生自身にとって自分の学力レベルがはっきり自覚できる、眼に見える制度であり、さらに自信をもって勉学に励むことを促がすものであった。勉学に燃える若者たちを惹きつける教育のシステムであったと言える。当然その前提として、公平な評価がなされているという咸宜園教育すなわち淡窓先生への信頼があり、その信頼を裏切らない運用がなされていたのである。月旦評については、淡窓も「月旦評ヲ設ケテ、其ノ勤惰ヲ明ニシ、勤ル者ハ上ニ擢ンデ、惰ル者ハ下ニ抑ヘ、栄辱ヲ分チテ、惰夫ト雖モ一度我ガ門ニ入レバ勉勵ノ心ヲ生ゼシム」(39)と、勉学に大いに効果があったことを述べている。

なお、九級制の場合、無級を下等、一級から四級までを中等、五級から九級までを上等としたが、七級から九級に至るには少なくとも大抵五〜六年は要しており、ほとんど数人程しか達するものではなく、多くは四級から六級程度で卒塾している。上等である五・六級にも至れば充分に漢学の基礎と漢詩文の教養を修得した相当の学力の程度であって、入塾・退塾自由のいわば出入り自由が建前の私塾であるので、自分自身がこれで満足と思われる程度の等級で卒塾していくのは当

然であったのである。

「月旦評」こそ咸宜園教育の最大の特色であっていわば近代学校の先駆的システムであり、以降の多くの塾に普及していった制度であった。もちろん、「月旦評」については、点数で評価される競争の世界であるので、塾生の学習が点数獲得のための勉学に終始する傾向が現れてくるのは避けがたく、淡窓も「月旦評」システムのその弊害はよく理解しており、「消権法」など様々な工夫を加えて改良していったのである。弊害については、淡窓自身も五四歳の時に「月旦評ヲ作リテ門人ヲ誘掖ス。是レ門下ノ盛ナル所以ナリ。然レドモ、亦タ其ノ弊少ナカラズ。諸生ノ課程、外ヲ務メテ内ヲ廢シ、名ヲ取りテ実ヲ捨ツ。今、之ヲ矯メント欲スルモ、三十年ノ旧習速ヤカニ変ズベカラズ。須ラク善巧ナル方便ニテ之ヲ誘ヒ、以テ虚名ノ地ヲ離レテ実践ノ域ニ入ラシムベシ。此ノ工夫、亦タ容易ニ非ズ」(40)と反省を述べ、またその普及状況については、六五歳の時に「当時ハ余ガ門人帷ヲ垂レテ業ヲ講ズル者、諸国ニアマネシ。皆ナ月旦ヲ作ラザルハナシ。余ガ門人ニアラザル者モ亦タ其ノ風ヲ聞キテ之ニ倣フ者多シ。或ハ文学ニ与ラヌ他芸ヲナス者迄モ往々此ノ風ニ倣ヘリ。教フル者モ此ヲ以テ教ヘ、学ブ者モ此ヲ以テ学ブ。因ツテ当時ノ学風大ニ古昔ト変ジ、殆ド漢人ノ科擧ノ業ヲ習フガ如シ。抑モ百事皆ナ一得有レバ一失有リ、一利アレバ一害アリ。後人此事ヲ論ゼンニ、余ヲ以テ功首トセンカ、将タ罪魁トセンカ」(41)と述べており、淡窓は、以後広く諸塾に普及した「月旦評」のシステムについて、それが自分の功績として認められるのか、それとも大きな罪過を流した張本人として非難されるのかは、後世の判断に委ねるとして、その弊害も謙虚に認めていたのである。もちろん、淡窓はその欠陥も工夫と努力によって克服できると考えていたと思われる。

ところで「月旦評」の普及については、淡窓も語っているように広く緒塾に行われ芸事にまでも及んだとされるが、漢学塾ばかりでなく蘭学塾でも採用されていることは、緒方洪庵の「適塾」の月毎の等級評価に影響していることで分かる。緒方洪庵は、咸宜園の第二代塾主を務めた後に大坂で漢学塾を開塾していた廣瀬旭荘と、年齢も近くまた塾の場所も近いことから、非常に懇意に交際していたことが旭荘の日記『日間瑣事備忘録』の記述で知られるが、互いに共通の門人もいるなど、塾の運営に関してはお互いに影響したことが考えられるのである。なお、緒方洪庵の師である坪井信道は、若い頃日田で三松斎寿の家に寄宿して医術を学

んでおり、その際に若き教育者であつた廣瀨淡窓と交友があつたことが淡窓の『懐旧樓筆記』に記されている。

なお、月旦評システムのように学問に競争原理を持ち込むのは、礼儀道徳を教えるべき教育に反するとの批判については、中国の宋の程伊川が「学校ハ礼儀ヲ先ズルノ地ナリ、然ルニ、之ヲシテ争ハシムルハ教養ノ道ニ非ズ、以後試ヲ改メテ課トナシ、高下ヲ考定セザラン」と述べていることに関連して、中国には科挙の制度があつてそれに及第するための学問がなされていて名利を競う社会となつていたので、程伊川の言葉はそれを思えたことによる競争を否定する発言であり、それに反して日本は世襲制の封建社会であつて「士大夫皆世官世祿、賢モ進ム二道ナク、愚モ退クニ縁ナシ。人心皆傲惰優蹇ニシテ学業ニ趣カズ」という状態であり、そのため「此レヲ以テ月旦評ヲ設ケ、之ニ示スニ榮辱ヲ以テシテ、之ヲ鼓舞スルナリ。……凡ソ学問ノ道、和漢古今、体勢ノ異ナル所ヲ察スルヲ以テ要務トス」(42)と論じている。つまり、中国のような高級官吏登用試験である科挙制度の無い世襲制の日本では、学問をしても立身出世には繋がらないので、学問に競争を持ち込んで鼓舞しないと人々は学業に励まず、文化や社会は活性化しないと認識していたのである。

このようにして、「月旦評」を中核とした咸宜園の教育は、教育の原点ともいえる「公平と競争」の原理の貫徹する場であつたといえよう。

### ③ 職任制

咸宜園には全国六六カ国から入門者があり、故郷を遠く離れた塾生たちは寮生活を送っていた。「職任制」は、寮生活を送る塾生を中心としてすべての塾生に何らかの役職を与えるもので、これを重要な教育の一環ととらえて重視していたものである。規約には「上は九級、下は無級に至る迄、耆人たりとも無職の者有るべからざる事」(43)とあつて、塾生は全員が何らかの職務に就くこととなつていた。都講(塾頭・総括責任者)から副監(都講補佐)・舎長(塾舎の長)・主簿(会計担当)・典薬(医療保健衛生担当)や威儀監(礼儀指導担当)・経営監(塾舎管理担当)・蔵書監(蔵書管理担当)などから定侍史(師の心接係)・書記(筆写記録係)・洒掃(清掃係)・給仕(雑用係)まで様々な職があり、いわば塾を自治的に塾生に運営させていた。「規約」では、職任は必ずしも「月旦評」の等級

にはこだわらず「時宜ニ随ヒ」適材適所とされているが、それはあくまで原則であつて、都講・副監・舎長などの主要ポストは、在塾年数が長い月旦評の上位の者で人格的にも確かな人物から任命された。さらに、「規約」や「告諭」などの厳格な規則類を制定し、塾生活の指針としていた。

これらの制度は、塾の運営や寮の管理を塾生の自治組織に任せて、塾の統制を図るとともに、自づから社会性・協調性や助け合いの精神を育てようとしたものである。当時、先行の私塾では、塾内での勉学については塾生をよく指導しても、その外は何をしても許される、いわば自由放任の姿勢の塾がごく当たり前であつた。塾外で放蕩や不道徳な行為があつても関知しないのであり、淡窓も若いころ学んだ亀井塾で、優秀な先輩が道を誤り身を持ち崩すのを目撃した経験から、この点について反省したものであろう。

淡窓は、日常の生活態度・生活習慣が確立していなければいくら学問をしても立派な人間の形成とはならないと考えていた。とくに、まだ一五歳から二〇歳前後の未熟な若者を教育するには、きちんとした生活態度の確立が先だと考えたのである。淡窓は「数百傑驚ノ少年ヲ一室ニ聚メ、タダ経義ノミヲ伝ヘ、規約賞罰ヲ施サズバ、是レ之ヲ驅ツテ放逸ニ赴カシムルナリ。故ニ余ガ人ヲ教フルハ、先ヅ治メテ而ル後之ヲ教フルナリ。余ガ長所、此ノ外ニアルコトナシ」(44)と述べ、血気盛んな青少年を正しく教え導いて放逸を防ぐには「教える」だけでなく、その前に「治める」ことが重要であることを強調している。

咸宜園では、塾生は「規約」などの塾の規則に則り行動が規制され、塾生は決まつた日課によつて規則正しく生活した。午前五時に起床・清掃し、六時に早朝講義、七時に朝食・清掃、八時から一二時までには聴講・会読・素読・輪読などの授業があり、一二時に昼食・散歩、午後一時に輪講、午後二時から六時までで試業(試験)の時間があつたのち、六時に夕食・散歩、七時から一〇時までが自学自習の夜学、午後一〇時に就寝というのが、ほぼ一日の日課であつた。もちろん決まつた休日や休講日(放学)もあつた。規約では、休日は毎月二七日、五節句(人日・上巳・端午・七夕・重陽)、六月一五日(祇園祭)、八月一五日(中秋)、盆二日、冬至、臘月二九日、春秋山行、井戸浚、となつているほか、送別会のための休日や先生の病気などの都合での休講の日もあつた。このほか納涼のための夜行や神社参拝なども許可している(45)。「職任制」は、咸宜園教育を支える重要な制度

であった。

この「三奪法」「月旦評」「職任制」による咸宜園の教育システムによって、多数の塾生に対する継続・一貫した平等な教育が可能となり、寮などが完備された行き届いた生活指導もなされたため、その人材育成の成果が広く評価されたのである。一般の評判は、咸宜園で学べば確実に相当の学力が付き、しかも社会的にも人格的にも立派な人物になるということで、その評判を聞いて入門を志した若者も多かったと思われるが、なによりも多額の学費を負担してはるばる遠方から大事な子弟を送り出す父兄にとっても安心して任せられる私塾として評価されたものと思われる。このことが入門者が次第に増加していった一番大きな理由であろう。井上義巳も、「三奪法」「月旦評」及び「職任制」による教育制度によって塾の見事な運営がなされていたことを「すべて零からの発起で自学研修の成果が確実にあらわれていく咸宜園の制度は、門戸をすべて開け放った世界として、すべてに身分がつきまとい自身の実力のためしようもなかった当時の世界にあっては、若い門生たちを魅きつける最も大切な咸宜園の仕組みであった」（46）と述べている。

## 6. 日田の自然的環境

日田は、北部九州のちょうど真ん中に位置し、古代から河川や道路によって各都市へ八方に通じている交通の要衝であった。周囲を山々に囲まれた盆地であるため、日田に至るにはどの方面からも山の間の峠を越えて来ることになるが、それを越えると小さな盆地、いわば小さな別天地が開け、そこに代官所のある小さな城下町が現れるのである。

当時の日田は、九州の政治の中心であった布政所（西国筋郡代役所）があり、日田商人の活躍する九州の経済金融の中心地でもあって、また俳諧文芸なども盛んで文人墨客が訪れる文化的雰囲気のある都市であった。江戸や大坂・京都などには到底及ばない小さなこじんまりとした規模の都市であるが、まったくの田舎の農村でもなく適度に賑やかな商人町でもあり、都会に比べて却って静かな勉強に適した都市であったと言えるであろう。さらに、周囲には自然豊かな丘陵や河川や田園が連なり、緑豊かで落ち着いた環境の中にあつたのである。実際に、咸宜園から半径2kmの周辺部に小高い丘が連なり、頂上付近には観音堂など多くの

神社仏閣が存在しており、咸宜園の塾生が、春と秋の山行（リクリエーション）の場として、また詩作などの遊山の場として、心身のリフレッシュを行っていたのである。

このように見てくると、日田の地は当時としては、遠方から遊学して寮生活をしながら、じっくりと落ち着いて勉強するには、都市の規模も、また自然環境も最適の地であつたと言えるのではないかと思われる。さらには、近隣の豆田町には、商人などの住民の理解や援助もあつて学園都市的な雰囲気があり、生活もしやすかつたものと思われる。こうした日田の地を取り巻く環境や雰囲気、塾生が長く在塾して勉強に励むことのできた要因でもあつたと言えるであろう。

ここで、日田を訪れた作家の司馬遼太郎の紀行記『街道をゆく』の中での日田の印象について紹介すると「日田の町は、典型的な盆地といつていい。四囲ことごとく山で、山々から運ばれてくる水は玖珠川や三隈川にそそぎ、それぞれの水流がたがいに枝をなしたり迂回路をなしたりして、なるほど水郷であつた。しかも四囲の山々は、迫って威圧することなく、人の心を和らげるように遠山をなして、藍色にかすんでいる」と、山々に囲まれた盆地で、しかも水流の豊かな水郷であることを記し、江戸時代の天領の地であつたことについては「豊後日田は、江戸期では三万二千石、堂々たる天領の地であつた」「天領は元々豊かな土地が選ばれていた」「天領であつたために代々の生産の余剰が生活文化のかたちで蓄積されてゆき、やがては町も人も雅びてくるということであろうか」「日田代官以来の町の風情を色濃くのこしている」などと天領であつた日田の豊さについて記している。また咸宜園については「江戸末期の日田が全国に有名であつたのは、広瀬淡窓の塾あることによってであつた。・・・入門簿によれば三〇八一人という多数の青年がこの塾で学んだ。それらの出身地は奥州のはしから対馬まで及び、六〇余カ国のうち隠岐国と下野国の二ヶ国が欠けているだけであつた」「江戸期における慶応、早稲田といった私学の雄は、江戸よりもむしろこういう土地にあつたということが、江戸体制を考える上で興味がある」と記して、咸宜園が江戸期の私学の雄であつたことを述べている。（47）

なお経済面では、日田が江戸や大坂などの都会ではない小都市であつたため、比較的物価が安く生活がしやすかつたことも塾生にとっては望ましい環境であつたと言えるであろう。ちなみに、米価で見ると江戸に比べて七〜八割程度であつ

たと言われている(48)。

## 7. 廣瀨家の物心両面の支援

淡窓は豆田魚町の商家博多屋廣瀨家の長男として生まれた。本来ならば嫡男として家督を継ぐべき境遇にあったが、身体が生来病弱であり、学問がよく出来たので、父三郎右衛門の子供の進路は必ずしも慣習に囚われずに本人の性格や才能によって決めさせるとする考えによって、淡窓には学問の道を進ませ、八歳下の弟の久兵衛が廣瀨家の家督を継ぐこととなった。淡窓がすでに桂林園で開塾していた二九歳の時、文化七年に二一歳の久兵衛に家督が譲られたが、正式には、淡窓三四歳の文化一二年に二六歳の久兵衛の家督が官府から許されている。家督は放棄したとは言うものの、淡窓はまだ廣瀨家の南家に居住しており、長兄として廣瀨家の中では重きをなしていたものと思われる。日記には、久兵衛が遠方に行き家を空けた場合は、その間、主屋の北家に居を移している記事も見られる。そして、三六歳で咸宜園に移った後も、日記に見られるとおり、官府に詣った帰りに立ち寄りたり、法事などの冠婚葬祭や宴会に招かれたり、盆正月などの挨拶、祇園会などの祭り見物、病氣・出産などの見舞いなどに、廣瀨家にほとんど毎月足繁く通っている。さらに、廣瀨家及び咸宜園運営の相談事にもたびたび訪れている。とくに、天保八年、塩谷郡代の更迭のあと、郡代の片腕として多くの公共事業に関与していた弟の久兵衛が収賄疑惑で訴えられかけた、いわゆる廣瀨家の「家難」の際には、廣瀨家のためにさまざまに奔走し真剣に対応している姿が日記に述べられている。このことから淡窓の廣瀨家に対する責任感のようなものを感じる事ができるし、親子兄弟の間の助け合いや信頼関係も窺うことができる。

塾経営に関して見ると、おそらく、淡窓が長福寺学寮で塾を開いたときから桂林園時代までは束脩・謝儀などの収入だけでは経営は維持できず、廣瀨家の援助によって維持していたものと思われる。「懐旧楼筆記」には、文化一二年二月、三四歳の時、淡窓は廣瀨家の南家に転居し「今朝、妻ヲシテ飯ヲ炊カシム。予生来父母ノ養ヲ受クル事、昨年マデ三三年ナリ。此ニ至ツテ始メテ衣食ヨリ雜費ニ至ルマデ、己ガ手ヨリ具シ、父母ヲ累ハスコトヲ免カレタリ」(49)と述べて、始めて独立した生計を営むようになったと記している。おそらく、塾経営が独立して順調に運営できるようになったのは、三六歳で咸宜園に移転開塾して以降の

事であろうと思われる。

その後も、日記等によれば、咸宜園の経営や塾舎の建築については弟の久兵衛や三右衛門が常に相談などに与っており、とくに資金調達や運用などの財政的な面については二人に頼っていたことが分かる。

このように廣瀨家の物心両面の支援がなければ、早い時期に運営が行き詰まったであろうし、順調に規模を拡大して行くこともできなかったものと思われる。廣瀨家のバックアップがなければ、なによりも淡窓自身が安心して教育に専念できなかつたことと思われる。

こうして考えると、廣瀨家は咸宜園を裏から支えた存在で、廣瀨家と咸宜園は一体のものであつたと言えよう。つまり、咸宜園は実質は廣瀨一族の経営による淡窓の運営する私塾であつたと言えるもので、現代風に譬えてみれば、「咸宜園」は「学校法人廣瀨学園」の経営する「学校」であり「理事長及び学長」が廣瀨淡窓であつたとも言えるのではなからうか。

## 8. 塾生紹介の全国的ネットワーク

咸宜園の入門に際しては、本人又は紹介者に「入門簿」への記載を求めた。桂林園の開塾時から作成するようになったもので、入門年月日、出身地、氏名、紹介者を記入するものだが、のちに年齢、父兄の名前・続柄も記入するようになっていた。入門簿は、次第に増える多くの塾生の管理上で作成が必要となつたものであるが、他面では、他国者を受け入れる地としての代官所の取り締まりにも対応するものでもあつた。なかでも、紹介者を必要としたのは、身元不詳の者の旅行や滞在を制限していた当時にあつては、入門者の確実な身元保証人・身元引受人を必要としたためである。これは、入門制限のように思われるが、逆に見ると、私塾として紹介者が確実であれば原則として誰でも入門を受け入れたのであつて、家柄等を厳しく問われた封建時代にあつてはむしろ自由な出入りを保証するものであつたと言えよう。

咸宜園の場合、紹介者は、はじめは広瀨家の関係者や淡窓の知人や友人が中心であつたが、次第に卒塾生や在塾生が紹介者になつていく。入門者が次第に増加して行つた背景には、卒塾生・在塾生が自分の兄弟や親戚の者、さらに出身地の友人知人等を次々に紹介していったことが大きいと思われる。とりわけ、全国的

に紹介網が拡がったのは、咸宜園の塾生の三分の一が僧侶の身分であったことと、それに次ぐのが医師だったと推定されることと関連があるように考えられる。それは、宗派を同じくする僧侶同士や医師同士には全国的なネットワークがあるので、卒業生・在塾生の僧侶が同じ宗派の寺院の僧侶を紹介したり、医師が同じ医師仲間の人を紹介したりして、紹介が出身地域を越えた遠方の地の知人に及び、次々と全国に拡がっていった結果であろうと思われる。

教育史学者の海原徹が、長門・周防二国（現在の山口県）の出身者全員の紹介ルートを詳細に調査した結果から、在塾生・卒業生らが紹介者として次々と知人を紹介していったその実態が明らかにされている（50）。その調査によると、紹介ルートはいくつかにグループ分けができ、いずれの場合もいちばん最初の紹介者は日田在住の人物であり、その紹介で入塾した人物が数名を紹介し、次にその紹介で入塾した者がまた数名を紹介し、こうして次々と入塾者が増えるといった人的系譜ルートとなるものである。その紹介した人数は、まったく紹介していない者もいるが、一人当たり一名から多いもので一〇名となっている。具体的な例でみると、日田在住の医師三松齊寿が紹介した周防熊毛郡の医師岡研介が四名を紹介したが、それは医師の弟と甥、熊毛郡の僧侶と隣の大島郡の僧侶である。この二人の僧侶は、一人は七名の僧侶（周防五名、長門一名、隣国の安芸一名）と二名の医師（長門）を紹介、また他の一人は三名の僧侶（周防二名、長門一名）と四名の医師（周防二名、隣国の安芸二名）を紹介したが、その僧侶たちは何れも浄土真宗本願寺派の寺の者であった。そして、それらの僧侶がまた同じく浄土真宗本願寺派の僧侶を紹介し、医師はまた同郷の医師を紹介している。このようにして僧侶が同じ宗派の僧侶や近隣の医師を、医師が医師仲間や近隣の寺の僧侶を紹介していったことが分かる人的系譜ルートとなっている。このように主に僧侶や医師の紹介ネットワークが重要な機能を果たしたことが理解できるのである。なお、僧侶同士の紹介や医師同士の紹介に依らない紹介の例では、国が異なる場合にあっても、個人的な交遊関係で紹介者になったケースが多く見られている。

この長門・周防の例のような、国を越えた、また同じ国の内でも郡を越えた紹介は、同じ宗派の僧侶同士の紹介ルートや医師仲間の紹介ルートによって、同じように全国各地でも行われたものと思われる。このような紹介システムのしくみが、咸宜園の入門者が全国に拡がっていった大きな要素であったと言つてよいで

あろう。

ただ、このようにして咸宜園の名が全国に拡がり入門者が増えていったのであるが、その根底には、咸宜園のすぐれた私塾教育の評判と広瀬淡窓の教育者としての高い評価があつたことは当然のことであつたといえよう。

## 9. まとめ

以上をまとめると、「咸宜園」の開塾した江戸時代後期は教育熱の高まつていた時代で、初等教育が普及し中高等の私塾の教育が期待される背景と教育文化環境があつた。さらに咸宜園のある日田の地は、当時、九州の政治・経済・文化の中心の地で、幕府の直轄地「天領」として比較的自由的な雰囲気にあつて人的交流の盛んな人の集まりやすい地であつた。そして、江戸や大坂・京都の大きな都市と違い、こじんまりとした静かな都市で、豊かな自然環境に囲まれた勉学の地として最適な地であつた。ここに、学者としても漢詩人としても一流の広瀬淡窓という儒学者の主宰する私塾があつて、教育者として情熱を傾けて塾経営をしており、当時としては画期的でユニークな教育システムが整備されて、塾生の勉学の努力が正当に評価され満足のいく成果が得られる内容で、また寮も完備し安心して塾生活を送れるものであつた。さらに、特定の学派などにはこだわらずに広く学ばせる教育を行つており、漢学の基礎と漢詩文の教養を身につけ、将来の自分の進路の希望をかなえるにはもっとも望ましい私塾であつた。しかも、咸宜園のバックには、有力な商家である廣瀬家の支えがあり、経営的にも確固としていた。そして、近隣の豆田町についても、商家など住民の理解や援助もあつて学園都市的な雰囲気があり、塾生活もしやすかつたのである。このような「咸宜園」の評判は、全国から来た在塾生と、全国へ拡がっていった卒業生による、国や地域を越えたネットワークによりますます拡がっていったのである。

以上のような様々な要因が働いて、「咸宜園」が近世日本最大規模の私塾となり得たのである。

【註】

- 1 辻本雅史「寺子屋から国民教育へ」(岩波講座『日本の思想』第二卷) 岩波書店
- 2 青木美智男『日本文化の原型』第三章(『日本の歴史』別巻) 小学館  
同前書 第五章
- 3 海原徹『日本史小百科 学校』92～95頁「寺子屋」 東京堂出版
- 4 同前書 70～71頁「私塾」
- 5 大石学『江戸の教育力』101～103頁 東京学芸大学出版会
- 6 青木美智男『日本文化の原型』第三章(『日本の歴史』別巻) 小学館
- 7 大石学『江戸の教育力』134～145頁 東京学芸大学出版会
- 8 大内初夫『天領日田の俳諧と俳人たち』日田市  
「再新録」3頁 『淡窓全集 上巻』
- 9 武谷澧蘭「南柯一夢抄録」2頁 『淡窓全集 中巻』
- 10 「謙吉へ申聞候事」4頁 『淡窓全集 中巻』
- 11 「告諭」9～10頁 『淡窓全集 中巻』
- 12 「夜雨寮筆記 卷二」19～20頁 『淡窓全集 上巻』
- 13 「夜雨寮筆記 卷二」19頁 『淡窓全集 上巻』
- 14 井上義巳『広瀬淡窓』162～163頁 吉川弘文館
- 15 衣笠安喜『思想史と文化史の間』304頁 ぺりかん社
- 16 「謙吉へ申聞候事」4頁 『淡窓全集 中巻』
- 17 「六橋記聞 卷四」40頁 『淡窓全集 上巻』
- 18 「燈下記聞 卷一」1頁 『淡窓全集 上巻』
- 19 清浦奎吾『奎吾夜話』47頁 今日の問題社
- 20 中島市三郎『教聖 廣瀬淡窓の研究』295頁「先生の逸話」第一出版協会
- 21 武谷澧蘭「南柯一夢抄録」9頁 『淡窓全集 中巻』
- 22 「夜雨寮筆記 卷二」39～40頁 『淡窓全集 上巻』
- 23 武谷澧蘭「南柯一夢抄録」9頁 『淡窓全集 中巻』
- 24 中島市三郎『教聖 廣瀬淡窓の研究』321頁「清浦伯爵漢詩朗吟に就いてのお話」第一出版協会
- 25 「文玄先生之碑」「淡窓先生小伝」9～10頁 『淡窓全集 上巻』
- 26 「夜雨寮筆記 卷一」8頁 『淡窓全集 上巻』
- 27 「六橋記聞 卷十」112頁 『淡窓全集 上巻』
- 28 武谷澧蘭「南柯一夢抄録」2頁 『淡窓全集 中巻』
- 29 「夜雨寮筆記 卷二」15頁 『淡窓全集 上巻』
- 30 「夜雨寮筆記 卷二」16～17頁 『淡窓全集 上巻』
- 31 「夜雨寮筆記 卷三」41頁 『淡窓全集 上巻』
- 32 「夜雨寮筆記 卷二」20頁 『淡窓全集 上巻』
- 33 「夜雨寮筆記 卷三」41～42頁 『淡窓全集 上巻』
- 34 「恩命文書」公益財団法人廣瀬資料館
- 35 「謙吉へ申聞候事」4頁 『淡窓全集 中巻』
- 36 「燈下記聞 卷二」14頁 『淡窓全集 上巻』
- 37 井上義巳『広瀬淡窓』216頁 吉川弘文館
- 38 「夜雨寮筆記 卷二」19頁 『淡窓全集 上巻』
- 39 「再新録」3～4頁 『淡窓全集 上巻』
- 40 「懐旧楼筆記 卷十一」138頁 『淡窓全集 上巻』
- 41 「夜雨寮筆記 卷三」40～41頁 『淡窓全集 上巻』
- 42 「癸卯改正規約」1頁 『淡窓全集 中巻』
- 43 「夜雨寮筆記 卷二」20頁 『淡窓全集 上巻』
- 44 「都講勸学都検心得方」24頁 『淡窓全集 中巻』
- 45 井上義巳『広瀬淡窓』166頁 吉川弘文館
- 46 司馬遼太郎『街道をゆく8』「豊後日田街道」朝日新聞社
- 47 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園』129～130頁 ミネルヴァ書房
- 48 「懐旧楼筆記 卷十六」197～198頁 『淡窓全集 上巻』
- 49 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園』131～151頁 ミネルヴァ書房
- 50

## 京都府の学校と咸宜園教育——とくに廣瀬青邨について

咸宜園教育研究センター研究員 深町 浩一郎

はじめに

京都府は、明治初年から全国の他府県に先駆けて、新しい時代の教育改革を積極的に推し進め、日本の近代教育の先駆的役割を果たした。

早くも明治二年には、全国初めての小学校である「番組小学校」六四校が開設され、翌明治三年一二月には、東京府に次いで全国二番目の中学校が開設されている。

この京都府の教育制度創設の時期に、京都府の行政の内部には、咸宜園出身者の京都府大参事であった松田道之、及び京都府典事・督学であった廣瀬範治（青邨）が在職していたことから、これらの京都府の先駆的教育改革の内容に、咸宜園教育の影響があったのではないかと考えられる。たとえば、明治四年に作成された五等級のカリキュラムである「小学課業表」、続いて明治七年に改正された八等級の「改正小学課業表」に、咸宜園の「月旦評」の階級区分の影響があった可能性などが考えられる。

ここでは、京都府の教育を総括する役職である京都府督学であった廣瀬青邨に注目し、彼が京都府の学校教育制度の創設等に大きく関与していたと思われることについて考察したい。

### 1. 京都府の学校

明治元年に、京都府では寺子屋に代わる新しい教育施設として小学校を設立することを提示したが、町民側においても各町組に一つの会議所（町会所）を設けそれに小学校を併設する構想が持ち上がり、京都府はその方針によって明治二年一月にまず大小様々な規模の町組の編成替えを行って三条通りを境として上京三三、下京三三の六六の町組にし、官民協力により明治二年五月に最初の上京二七番組小学校（柳池小学校）が開設、続いて七月に下京一四番組小学校（修徳小学校）が開設され、以後続々と開設が続き、一二月までに六四（二つの町組で

一校設置が二箇所）の「番組小学校」が誕生した。これは我が国の最初の学区制小学校である。なお、開設のいきさつから、この小学校の施設は教育施設だけのものではなく、自治会の徴税、戸籍、消防、治安などの役所や集会所を兼ねる機能をもったものであった。当時の写真を見ると、建物自体に、火の見櫓である望火楼や時刻を知らせる太鼓樓を備えていた学校が多く見られる。（『京都学校物語』などより）

なお、福沢諭吉が、明治五年五月に中津に赴く途中に京都を訪れ、小学校・中学校を視察し『京都学校の記』という記録を残している。それによると、小学校・中学校の数、生徒数、教員の状況、課業・試業の内容、運営費用、教員の給料など詳しく記述しているが、そのうち「小学課業表」の内容については「科業は：：習字・算術・句読・暗誦、各々等を分かち、毎月吟味の法を行ひ・・・小学の科を五等に分ち吟味を経て等を登り、五等の科を終る者は中学校に入るの法なれど」などと紹介している。そして最後に感想として「民間に学校を設て人民を教育せんとするは余輩積年の宿志なりしに、今京都に來り始めて其の實際を見るを得たるは、其の悦び恰も故郷に歸て知己朋友に逢ふが如し。大凡、世間の人、この学校を見て感ぜざる者は、報国の心なき人といふべきなり」と非常に感心したことを記している。

明治二年五月から十二月までに創られた六十四の「番組小学校」は、京都市中の町組と呼ばれる町内組織ごとに一つの学区として設立されたもので京都市内のみであったが、明治四年七月の廢藩置県により山城国一円と丹波国の一部が京都府となったため、これらの郡部にも「郡中小学校」を建設することとなった。明治五年二月に、最初に宇治郡の小学校が開業し、各郡に次々と小学校が開業された。このようにして小学校の建設は順調に進み、明治八年までには京都全府下に郡部百九十八校ができ、市内六十四校、伏見町四校を合計して二百六十六校とされた記録されている。

中学校も、明治二年に設置計画を立てたが実現を見ず、明治三年十月に漢学所・皇学所の後身である大学校が京都府に移管され、それを府学校とし、さらに十二月に中学校と改称して設立されている。これも東京府の中学校に次いで我が国で最初期の開設であった。なお、中学校は京都府学務課を兼ねるものであり、教官とともに事務吏員も置かれ、規則を作り小学校の教師を監督するなど教育事務を

統括する機能を持つものでもあった。

## 2. 「小学課業表」について

明治二年に全国に先駆けて開設された京都の「番組小学校」のカリキュラムである「小学課業表」は、明治四年八月に京都府が独自に作成したものである。科目は「句読、暗誦、習字、算術」の四科目があり、それぞれ「第一等」第五等の五等級になっており、試験によって上がっていく仕組みのものである。教育内容は「読み・書き・算盤」といった商売など生活に直接役立つ内容のもので、江戸時代の寺子屋の延長にあるものと思われるが、西洋の学問の知識も組み合わせられているものとなっている。しかし、かなりレベルの高い内容のもので、最上級の第一等は、「暗誦」では外国里程（外国地理）や英語・ドイツ語基礎単語五百語があり、「算術」では求積・開平方（平方根）・開立方（三乗根）などを学ぶこととなっており、第一等以上がる者は稀であったといわれている。

この「小学課業表」は、等級を五等級に分けている点、「句読」の科目の第五等に「孝経」、第四等に「学庸、論語」、第三等に「孟子、小学」、第二等に「五經」第一等に「易知録」がある点などから、咸宜園の漢学教育の内容を思わせるものがある。

京都市学校歴史博物館などに照会した結果では、この「小学課業表」の制定の経過や関与者などは不明とのことであったが、制定時期が開業して二年後の明治四年八月であるのは、対象児童が一般庶民階級の子弟から、華族・社寺や武士階級の子弟に拡大された時期と関係しているであろうと推定しているとのことであった。

その後、明治七年一月に、文部省公布改正小学校則により京都府も小学校則を改正したが、それに併せて「課業表」をさらに細かく改正している。

「上等課業表」と「下等課業表」に分けて、科目が「句読、暗誦、習字、算術」の四科目から、上等は「書牘、読本、輪講、習字、算術、修身及養生口授、余科」の七科目、下等は「会话、単語、読本、習字、算術、修身及養生口授、余科」の七科目になり、等級が五等級から上等・下等ともに八等級（名称は「第一等」第五等）を「一級」八級に変更）に増えている。また、同年二月に、小学課業表を終えた者のために「読講、習字、算術」の三科目、八等級（一級）八級の「超

等課業表」を作っている。

この「改正課業表」は、八等級（一級）八級）になっている点や、「余科」の内容で小学下等の四級以上と小学上等では、大学・論語・孟子・十八史略など漢学の科目があることなどから、咸宜園教育の影響を思わせる。しかし、京都府立京都学・歴史館で調査した結果でも、これらの八等級の「改正課業表」が作成された経過やその関与者については、「改正課業表」を載せている『京都小学三〇年史』『京都府史 政治部学政類第二』などにもとくに記載がなく不明であった。

なお、京都市学校歴史博物館の『京都学校物語』では、「明治政府は（番組小学校開設の）三年後の明治五（一八七二）年に太政官布告によって教育の目的を示し、この年から各地に公立学校を創設し始めます。このときに国の示したカリキュラムは、京都の課業表の五段階を八段階に細かくしたものであることから、京都の課業表を参考にして作ったことがわかります。」（『京都学校物語』51頁）としている。

## 3. 松田道之について

咸宜園門下生の松田道之は、明治元年閏四月から明治四年十一月まで京都府に京都府大参事などとして在職していたことから、京都府の教育制度の創設などに関与したことが考えられる。

松田道之は、天保一〇年五月、鳥取藩の家老の家臣の家に生まれ、安政三年一〇月三日に一六歳「木下俊蔵」の名で咸宜園に入門し四年間学んでいる。その後、文久二年に家老に従って養父とともに京都に滞り、尊王攘夷の志士として活躍し、その功により本藩士籍に列した。

明治元年閏四月に京都で徴士・内国事務局権判事に任命される。その後、京都府権判事、京都府判事、明治二年七月に京都府大参事を歴任し、明治四年一月に大津県令に転任し、翌五年正月に改称されて滋賀県令になった。滋賀県では県の近代化に尽くした。その後、明治八年三月に内務卿大久保利通に抜擢されて内務大丞になり、とくに沖繩県の設置を行う琉球処分任に当たりこれを断行した。明治一二年一二月に東京府知事に任命され、在職中の明治一五年七月に四四歳で病死した。

京都府では教育行政にも関与していると思われるため、その記載などが行政文

書などに残されていないかを京都府立京都学・歴史館で調査したが、『京都小学三〇年史』に、小学校視察や春秋二度の大試業（試験）の際に出席した記事は見られるものの、京都府大参事としてすべての府行政に關与する立場からか、教育制度への具体的な關与の記載は見出されなかった。

#### 4. 広瀬範治（青邨）について

咸宜園門下生で第三代塾主を務めた廣瀬範治（青邨）が明治二年八月に京都に往き、明治三年九月から明治八年四月まで京都府に典事・督学として在職していたことから、京都府の教育制度の創設などに關与したことが考えられる。

廣瀬範治は、文政二年八月下毛郡土田村の矢野家の次男に生れ、天保五年九月、一六歳の時「矢野卯三郎」の名で咸宜園に入門し、天保一〇年二歳で九級に進み都講となり、天保一二年、二三歳の時、塾を去つて肥後の深水玄門に医学を学ぶが、弘化元年、二六歳の時に請われて淡窓の義子となり「廣瀬範治」と改名する。安政二年三月、三七歳で咸宜園第三代塾主となるが、翌安政三年一月に淡窓が歿し、文久二年、四四歳で、廣瀬林外二七歳に塾を譲るまで塾主を務めた後、文久三年六月に府内藩校遊馬館に賓師として招かれ明治二年六月まで務める。

明治二年八月に、五一歳で京都に往き、九月に漢学所御用掛、一二月に大学校御用掛となるが、明治三年九月に招かれて京都府に出仕し、京都府典事となり、明治四年一〇月に兼ねて京都府督学、明治六年八月に京都府大属に任ぜられ、明治八年、五七歳のとき、四月に岩手県令島惟精に招かれて京都を離れ岩手県に赴任した。

その後、東京に還り修史局に出仕したが、廢局となつたので私塾・東宜園を主宰した。華族学校（学習院）でも教鞭を執り、宮内省文学御用掛も務めたが、明治一七年二月に六六歳で病没した。

廣瀬範治の京都府の教育への關与については、現在わずかに残っている『小学校一件』（明治五年のみ）など当時の京都府の行政文書等には關与のはっきりとした記述は見られないが、戦前の昭和一五年に京都府教育会が刊行した『京都府教育史上』の記述に、廣瀬範治に關した箇所が数か所見られる。

この『京都府教育史上』は、凡例に記しているように、その編纂・執筆に当たつて「厳密な選択的態度を以て採蒐した史料、就中筆写したそれだけでも約

八千点、四万数千枚に及び、而もその大部分は京都府所蔵の公文書に拠つた正確なものであるが、尚お府下各学校に及び、有志者の報告、著述、旧教科書、追憶談より一般書籍・新聞・雑誌に至るまで広く集め加えて遺漏なからんことを期した」とされている書である。このように「京都府所蔵の公文書に拠つた正確なものである」とあるので、その記載内容は十分に信用するに足るものであるといえる。

なお、『日本教育史文献集成』の解題によると、『京都府教育史上』は、明治初年から明治二四年までの記事を載せる第三篇から第五編の執筆者は、編集主任であつた大谷大学教授の徳重浅吉であつたとされている。京都府京都学・歴史館には、徳重が執筆に當つて蒐集参照した行政文書をそのまま書写した膨大な「徳重文書」が残されており、その原典を確認することができるが、その中には現在は失われた行政文書も多くあるもようである。この『京都府教育史』は明治二四年まで記述の上巻のみしか刊行されず、明治二五年以下の下巻は戦争開始のために未刊で終わっている。

以下、『京都府教育史上』の記述箇所を整理して内容等を検討してみる。

#### ① 廣瀬範治が京都府典事となつた経緯について

『京都府教育史上』によると、明治三年八月、榎村京都府権大参事が、太政官による京都大学校を廢止して府へ引き継ぎするとの命令等を確かめ、かつ京都府の教育方向を定めようとするため、東上して太政官に願ひ出た際に、「府学では、皇典神典を以て基本となし漢籍を以て補翼となすの（太政官の）大趣意は元より遵奉するけれども、之は道の本体であつて、その學術に至つては皇漢は勿論広く海外の事にも互り折衷実用遂に皇朝の大道に帰着するを主とし、生徒の學業の進む事を急務となすべき」として広く人材教育をしたい旨を伺ひ出て、「次には、即今仮に學則を建てて開校致し度く、それには差当り廣瀬範治を府学專務の者に採用したいから、之を当府典事に任命致されたいと願ひ出て居る。廣瀬は豊後の人本姓矢野氏であるが、夙に咸宜園に学び淡窓先生に愛せられて都講となり、遂に子養せられて沢山の門弟を教育してゐたが、明治元年漢学所の教官に召されて出仕してゐたから、これを簡拔任用せんとしたのであつて、爾來京都府典事或は督学といふ役で七年一二月まで府の學政教育に尽力した」（326頁）と記されてい

る。原文である明治三年八月二十九日の上申書の後半部分を見ると「追テ学則仰セ出ダサレ候迄先ズ即今右辺之処ヲ以テ仮ニ学則ヲ立テ開校イタシ度候条、右大主意之処前以テ一応御届イタシ置候、付テハ規則出来之上ハ追々相伺フ可ク候得トモ、差当リ府学専務之者一員ヲ相置キ度キ処、廣瀬範治儀則其ノ人ニ之有ル可キト存ジ候間、至急ニ当府典事ハ御任ジ下サレ候得バ同人ヲ以テ督学ト致シ、専ラ府学之規則相立チ度、此ノ段至急ニ相伺ヒ候也」となっている。

これによると、政府直轄の京都大学校を廃止して京都府学を設置するように命ぜられたため、京都府は広く諸学を学ばせる学校の開設を目指し、その規則類を整備するため、咸宜園塾主を務め当時は漢学所御用掛であった廣瀬範治を抜擢し、府学に専任する典事・督学としたことが分かる。

廣瀬範治を登用し京都府の学校行政の指導監督に当たさせたのは、当時は権大参事であり後に京都府知事になる榎村正直であったとされている。榎村については、京都府に一四年間在職し京都府の教育の功労者とされている人物であり、海原徹『日本史小百科 学校』にも「とりわけ注目されるのは、この頃府当局の中枢に榎村正直（のち府知事）のような、長州藩閥の一員で、中央政府の顯官グループ、それも西欧スタイルの近代的学校教育制度の創設に熱心な木戸や伊藤らと緊密な関係にある人物がいたということである。事実、木戸孝允の榎村宛て書簡に、明治新政の何たるかを教育によって理解させ小学校の普及によって開化を促し人民の方向を定めるなどであり、京都府の小学校が中央政府の教育構想を下敷きにしていて、いわばその趣旨を忠実に体现する一種の実験教育であったことがわかる」（118頁）と述べられている。ただ、廣瀬範治の抜擢には、榎村だけでなく、それに加え、当時、榎村の上司に当る京都府大参事であった咸宜園出身者の松田道之の推挙などの関与があったものと思われる。

## ② 「学体」及び「小学課業表」の制定について

京都府では、明治三年一〇月に漢学所・皇学所の後身である大学校が京都府に移管されて、それを府学とし、さらに一二月に中学校と改称した。中学校は、東京府の中学校に次いでの開設であった。一月七日の中学校の開校式は、府知事の長谷信篤が御誓文を読み、次いで督学の廣瀬範治が「学体」を読み、このあと国書を出雲路桂蔭、漢書を廣瀬典事、洋学をリユートル・クレマンが講じて終

わつたと記録されている。

『京都府教育史上』には、明治三年一月の京都府中小学規則にあわせて、府民に諭すための教育全般に亘る綱領である「学体」を定め、一月七日の中学校の開業式で読まれたが、それは「趣意は政府が前に定めた学規と殆ど同じであるが、唯だ文字や仮名遣いなどを法格に適ふ様に改めたところがあると云ふ位の相違を見る。多分廣瀬典事の如き能文家がしたことであらう。（中略）まことに文簡にして意広く、教学の旨要を尽くしたものである。だから、学校で挙行する儀式には、常に之を宣読して、児童のみならず一般にも之を遵奉せしめんと期して学制頒布の時に至った。」（279～280頁）と記されている。京都府の教育綱領である「学体」の制定に廣瀬範治が深く関わったであろうことが推定されている。

「学体」の本文は、行政文書である『小学校一件（明治五年）』の中に見出されたので、引用すると「學體」道ノ体タル、物トシテ在ラサルナク、時トシテ存セサルナシ。真理ハ則、綱常、真事ハ則、政刑、学校ハ斯道ヲ講シ、実用ヲ天下国家ニ施ス所以ノモノナリ。然ハ則、孝悌彝倫ノ教、治国平天下ノ道、格物窮理日新ノ学、是皆宜シク究覈スヘキ所ニシテ、内外相兼テ、彼是相資ケ、所謂天地ノ公道ニ基キ、智識ヲ世界ニ求ムルノ聖旨ニ副ハンヲ要ス。勉メサル可ン哉。」というものである。

また『京都府教育史上』には、明治四年八月の「小学課業表」の制定について、「四年八月には小学課業表といふ整ふたものが制定發布されて、四科五等の制度を稠密に規定した。（中略）之を見ると、旧来の行はれ来たりしものと、新時代の学問の思潮とを組合せて、国民にとしての常識を与ふる教育を施さんために、苦心して作つたことがよく察せられるが、恐らく榎村参事や廣瀬督学が考へたものであらう。それにしても当時すべてが草創時代で、参考とすべきものは殆ど皆無、（中略）高尚過ぎる嫌ありとは云へ、かく整備した詳細なるものが出来たことは、大に多とせねばならぬ。殊に和漢洋に亙りてよく取捨し組合せてあるところなど博識者ならではの出来ぬことである。その点からどうも福沢諭吉の意見が加つてゐるらしく思はしむる色が濃い。それは翌五年六月福沢が大分県の委嘱により作つた小学課業表と余りに之が似てゐることも推せられるが、それも福沢が全く模倣したと見ればそれまでである。」（282～283頁）と記されている。

以上の記述をみると、「小学課業表」の制定に典事であった廣瀬範治がかなり

関与したものと考えられている。

しかし、福沢諭吉の関与についてはどう考えても考えられない。福沢諭吉は、明治五年五月に中津に赴く途中に京都を訪れ、小学校・中学校を視察し『京都学校の記』という記録を残しており、それによると、「(小学校の)科業は……習字・算術・句読・暗誦、各々等を分かち、毎月吟味の法を行ひ……小学の科を五等に分かち吟味を経て等を登り、五等の科を終る者は中学校に入るの法なれども、学校の起立未だ久しからざれば中学に入る者も多からず。」などとその「小学課業表」の内容を紹介しているし、「民間に学校を設て人民を教育せんとするは余輩積年の宿志なりしに、今京都に來り始めて其の實際を見るを得たるは、其の悦び恰も故郷に歸て知己朋友に逢ふが如し。」と、京都で始めて民間学校である「番組小学校」を實際に見たことに感激しており、この文面から見て、福沢諭吉が前年の明治四年に出來た「小学課業表」に関与したとは考えられない。

### ③「郡中小学校」の開設について

明治二年五月から一二月までに創られた六十四の「番組小学校」は、京都市中の町組と呼ばれる町内組織ごとに一つの学区として設立されたもので、京都市内のみであったが、明治四年七月の廢藩置縣により山城国一円と丹波国の一部が京都府となったため、これらの府下一二郡の郡部にも「郡中小学校」を建設することとした。

『京都府教育史上』によると、明治五年二月に最初に宇治郡の小学校が開業したが、その模様について「五年二月五日には、宇治郡第二区醍醐・日野・南小栗栖・石田四ヶ村の小学校が新建開業の式を挙げるに至った。式は午前一〇時に始まり、府から督学広瀬範治、小監察藤原省吾と同郡出張庁付属官員沢野敬二郎及び中学教官等が礼服着用で出席し、村よりは大庄屋、庄屋、年寄、勸農方並に三道教師奥野精一以下生徒九六人中七五人出席し、総人員二七〇人を以て盛大な式典を挙げたのである。即ち総員着席後、督学より大庄屋初め生徒一同に干鮑と熨斗とを下され、終つて督学より京都府下人民告諭大意、小学規則、同課業表を授け、学体を朗読し、次に教師奥野精一が孝経宗明義之章を講じて郡中制法懇和之章に説き及んだ。其の次に、督学より学校の大意を説諭し、終つて午後一時に式を閉ち三時退校したのである。」(300頁)と記されている。この原本である府庁文

書『郡中小学校記』の「醍醐村外三カ村組合の小学校開業の次第」を見ると配席図の一番上段に廣瀬典事の席があり、記載のように式典の主な役割は廣瀬典事が務めていることが分かる。

また、この後、各郡の小学校が次々と開業されるが、それについても『京都府教育史上』では、「これより順次各郡村の学校が開業されたが、それはみな同様な儀式で、非常に盛大なものであった。例へば同年(五年)七月五日の亀岡校開業式には、廣瀬典事、今村権典事が臨席し、学校建設に因みて出席者に典事より褒詞を与へ、次に村内高年の者に真綿を遣はし、且つ学校尽力の者へ別段の褒詞を与へたる後、熨斗と鮑を下げ遣した。其の次には、教師、士族間長惣代、戸長、といふ順序でこれ亦典事より各熨斗鮑を授けたが、之は旧藩学を改造して士庶民の学校にしたからのことである。次に生徒中へ亀岡出張庁員より熨斗鮑を与へ、終つて学体を読み、句読師が郡中制法を講じた。そして最後に典事が孝経と告諭大意の講義をなし、且つ府県名一部を学校に下げて式を閉ぢたのである。」(301頁)と記されている。なお、旧藩での学校開設については、士族は藩校で学び平民は私塾・寺子屋で学んでいたのを士族平民の別なく同様の教育をすることとなったので、旧藩校の建物の使用など注意すべきことがあったとし、旧園部藩では庁外の長屋を改築したが、その開業式について「この開業式には廣瀬典事が学体を読んだ後、句読師上野佐寿が郡中制法を読み且つ孝経を講じ、更に筆道師浄教寺覚了が学校掟則を読み上げた後に、典事が学校の大意について説諭した。そして、之が終ると、次には士族劉須の姉ふみ(一五歳)といふ生徒が、左伝莊公八年の条を講義したが、その流麗なるに皆が驚いたとある。」(303頁)と特に記している。

なお、府庁文書の『郡中小学校記』をみると、以上の小学校の開業式の外にも各郡の小学校開業式へ廣瀬典事の出席の記録が多く見られた。

この後、小学校の建設は順調に進み、明治八年までには京都全府下に郡部一九八校ができ、京都市内六四校、伏見町四校を合計して二六六校となったと記している。

以上の記述を見てみると、廣瀬範治は京都府典事・督学として多くの開業式に臨席して、褒詞を与え、熨斗を授け、学体を読み上げ、告諭大意や孝経の講義をし、また学校の大意を説諭するなど式典で重要な役割を果たしており、郡中小学校の開業については中心となつて大きく関与していたことが分かる。つまり、明

治五年からの京都府郡部の小学校の設立の総責任者は、典事・督学である廣瀨範治であつたものと思われる。

#### ④京都府中学校について

京都府は明治二年に独自の中学校の設置計画を立てたが表現を見ず、明治三年一〇月、漢学所・皇学所の後身である大学校が京都府に移管され、それを府学校とし、さらに一二月に中学校と改称して設立されている。明治三年一二月七日に二条城北旧所司代邸に開校し、明治四年一月一日に開業式を挙げています。

『京都府教育史上』によると、この中学校の性質については「初め之は京都大学校を移したものである故に、維新前の学習院の伝統があり、公卿堂上の学問所、それも漢学講義を聴く場所としての性質が中心をなし、次に維新草創期の大学寮代としての国学を中心とする皇学所の匂いが濃厚に伝へられ、加ふるに尊王攘夷の精神に動いて頓にその社会的地位を上げた士族・神官社会にも入学を許す中央教育機関といふやうな意味も加つてゐたのである。だから、京都府が受継いだ後、経費は政府から出るし、東京大学と対立するやうな気分は失せず、また府が先に創めた小学校に対しては、矢張り、堂上と地下役人・神官・僧侶及び官員、士族の子弟のための学校たる性質を多分に存してゐるので、自然その中に初等教育機関も設置しなければならぬといふ風であつた。それが中学内に小学舎が出来た理由である。(中略)その後幾何もなく、この小学舎は廃止して、華士族の子弟も皆な市中小学校に入学すべき事になつたから、自然中学は立成舎と称する国漢合併の中等教育機関のみとなり、その性質が一変することになつた。」(329頁)と記されている。

この中学校開設については、「(明治三年)閏一〇月には、府より当府学校を中学と唱へ、上は華族より下庶人に至る迄、広く入学差許され度き旨の願を出した。之は先月、太政官より東京府に中学校を取建て、華族始め士庶人に至る迄、入学を許すと言ふ御沙汰があつたので、之に倣はん事も一つの理由であつたのであるが、一つには、榎村(権大参事)の相談相手であつた廣瀨(典事)の意見に依る事でもあつた。即ち宜園の三奪の法と名付くる有名な教育方針を知る者は、直ちに「入学生は門閥貴賤の分を問はず都て府学門内に於て府学の規律を相ひ守り候様、且つ学業の深淺に依て等級を相ひ立て身分上下に拘らざる様いたし度云々」

といふ言葉の出づる所を知り得るのである。」(326頁)と記されている。

これによると、華族や庶民の身分の上下に拘わらずすべての者が入学できるとする京都府中学校の設立方針に、典事・督学の廣瀨範治の意見によつて咸宜園の三奪法の精神や月旦評の等級制度が活かされていたことが分かるのである。

中学校の規則については「中学は半面、京都府学務課であつたから、廣瀨以下はその掛員でもあつた。」(335頁)また「中学校は府知事の直轄であるが事実上の校長は学務分担の榎村参事で、その下に典事廣瀨青村以下の吏員が教官事務官として色々な規則を作つた。」(331頁)と記され、その内容は「此時の規則は未だ充分に定らないで大体かの学則に依つた様であるが、舎中常規なる特定の十ヶ条の規則が定まつて居る。それには、生徒学内に於いては長幼尊卑を論ぜず学業の等級を以て序とする事、朝八時より四時迄を正科の時とする。尤も一二時より二時迄歩行運動を許す。事故に依り欠席する時は舎長へ届出で舎長より教官に申し達する。門限は毎日六時、外出は一・六・九の日に限る。下宿は諸官より証憑を以て願出づる事。拝借の書籍は書籍出納上の定則に依る。舎中にて酒を禁ずるといふ様なものであつて、寮内に宿泊し且つ書籍は学校より貸与するが主であつた。」(328頁)と記されている。

この中学校の規則内容を見ると、咸宜園の規約・塾約類を思わしめるものがあり、廣瀨範治が京都府学務課の事務官として中学校規則の制定等に関わつたものと思われる。

中学校の制度は、小学校に八歳で入学し普通学を修め終えた者が、一六歳以降入学して専門の学を修めるもので、俊秀な者は二二歳で大学に推薦する制度となつていた。ただし、在官の者或は年長者でも修業のため中学校で学びたい者は申し出て許すものであつた。

中学校の責任者や事務官・教官については、『京都府教育史上』では、「中学校の官制も定つて、督学一人、之は中学諸教師を督し生徒の黜陟を知り都て校内大小の事務を聴き、兼ねて小学校の諸教師を督するものなり。その下に大属一人、小属二人、之は校内の会計用途図書等の出納を分掌する。司生一人、校内総ての筆記を司る。……他に教官として教授従六位、大助教正七位、中助教従七位、小助教正八位等の職制も決つた。そして又、学科は、小学は句読、習字、算術、語学、地理等、中学は教科、法科、理科、医科、文科という風にして五科に分れ

る方針であつた様である。」(327〜328頁)とあり、また「教授には廣瀨青村を筆頭とし、南摩綱紀、菊池三溪、出雲路定信(桂陰)、植松有経、吉田秀毅、坪井玄龍、渡忠秋、中山繁樹、上野惟喬といふやうな有名な学者が揃つてゐて、その月俸は廣瀨の四五両を最高とし、三五両、二五両、二〇両まであつた。授業は毎日八時より一〇時迄句読、一〇時より一二時迄講義、一二時から二時迄質問となつて居り、その他輪読、復講、回読が毎月各々三度宛ある。」そして毎月五日小検査を行ひ、春秋二季に大検査をしてゐた。此の検査は毎月五日、廿日の二度ある筈であつたのが、余り数が多いといふので、四年二月から五日一度にしてゐる。」(335頁)とある。この後には、中学の一分科として、外国人教師を雇ひ洋学も教えることとなり「欧学舎」というものが出来ている。

これらの記述を見ると、廣瀨範治(青村)は督学として、中学校の総括的な責任者(中学諸教師を督し、生徒の黜陟を知り、すべて校内大小の事務を聴き、兼ねて小学校の諸教師を督するもの)で、管理事務において重要な役割を担うかわら、中学校の筆頭の教授を勤めていたことが分かるのである。

なお、中学校はこの他にも小学校の指導機関や市民への啓発機関の役割も果たして「また市中小学校を巡り、市民を導くための巡講師といふものもあつて、(中略)又ここには毎月一日に、市内小学校の三道教師(句読師・筆道師・算術師)が集まるのが例となつて居り、殊に各科の教師は余暇を以てそれぞれ専門の講義を聴くべしと命令されてあつたから殆ど毎日来てゐたのである。(中略)がとにかく中学は小学校の指導機関として、中等教育の施行所としての体裁を少しづつ整へて行つた。その一面に小学教師志願者の試験所でもあり、それには榎村参事自ら臨むのが常であつた。」(335〜336頁)と記されている。

『京都府教育史上』には、中学校の創設により、このように「榎村(権大参事)を中心として、その華々しき産業政策と併行して出来上つた京都府の教育は、殆ど欧米學術の吸収文明開化の爲の急先鋒とも云ふべき非常な進歩したものであつて、それだけ又活発な意気を持ち改新日本の進歩に対応し、明治政府の開化方針によく合致してその先鋒を承るものであつた。」(329頁)と結論づけている。

### ⑤まとめ

以上をまとめると、廣瀨範治は、明治二年九月に漢学所御用掛として京都に來

て、一二月にその後身である大学校御用掛となり、その廃止後、明治三年九月に京都府に京都府典事として出仕することとなるが、その経緯については、京都府の教育行政を中心になつて担当していた榎村正直権大参事が、廣瀨範治の経歴を待んで教育制度を整備するための協力者として京都府典事に登用したもので、当然に咸宜園出身者の大参事の松田道之の推挙もあつたものと思われる。

京都府の教育行政では、府の教育綱領である「学体」の制定に関わり、明治三年一二月に開校の京都府中学校の創設に係り、その教育方針の内容に関与し、また中学校の筆頭教授になつて教育に当たるとともに、事務官として規則の制定等の制度整備にも当たつた。中学校は京都府学務課を兼ねるもので、明治四年一〇月には督学に任命され、京都府教育行政の中心にあつて事務を総括し中及び小学校の教師を監督している。

小学校行政については、明治二年に創設された「番組小学校」の制度整備について、明治四年八月の「小学課業表」の作成に関与し、明治七年一月の、上と下等に分かれそれぞれ八等級に拡大された「改正 小学上等(下等) 課業表」の改正にも関与したと思われる。

廃藩置県後に京都府に編入された郡部に、明治五年二月から順次開設された「郡中小学校」の開業には、典事・督学として大きく関与したものと思われ、その多くの小学校の開業式の記録では京都府の総括責任者として式典での重要な役目を勤めている。小学校の規則類の制定など小学校の整備にも深く関わつたものと思われる。

このように廣瀨範治は、京都府で、明治三年九月から、府の教育綱領や中学校の教育方針や規則、小学校の課業表などの教育内容、郡部の小学校の開設事業など、教育行政の中枢の制度の創設整備に重要な役割を果たしたものと思われる。

廣瀨範治について述べた『京都府教育史上』の表現でみると、「廣瀨範治を府学専務の者に採用したいから、之を当府典事に任命されたい……廣瀨は豊後の人本姓矢野氏であるが、夙に咸宜園に学び淡窓先生に愛せられて都講となり、遂に子養せられて沢山の門弟を教育してゐたが、明治元年漢学所の教官に召されて出仕してゐたから、これを簡拔任用せんとした」「学体」なるものを定めて、府民に諭す所があつた。……趣意は、政府が前に定めた学規と殆ど同じであるが、唯だ文字や仮名遣などを法格に適ふ様に改めたところがあると云ふ位の相違

を見る。多分、廣瀨典事の如き能文家がした事であらう。「小学課業表という整理されたものが制定發布されて、四科五等の制度を稠密に規定した。・・・苦心して作ったことがよく察せられるが、恐らく榎村参事や廣瀨督学が考へたものであらう。・・・殊に和漢洋に亙りてよく取捨し組合せてあるところなど博識者ならでは出来ぬことである。」「府より当府学校を中学と唱へ上は華族より下庶人に至る迄広く入学差許され度き旨の願を出した。之は・・・一つには榎村の相談相手であつた廣瀨の意見に依る事でもあつた。即ち宜園の三奪の法と名付くる有名な教育方針を知る者は、直ちに「入学生は門閥貴賤の分を問はず都而府学門内に於て府学の規律を相守候様且学業之深淺に依て等級を相立身分上下に不拘様いたし度云々」といふ言葉の出づる所を知り得るのである。」「中学校は府知事の直轄であるが事実上の校長は学務分担の榎村参事で、その下に典事廣瀨青村以下の吏員が教官事務官として色々な規則を作つた。」「(中学の)教授には廣瀨青村を筆頭とし・・・有名な学者が揃つてゐて、その月俸は廣瀨の四五両を最高とし、・・・二〇両まであつた。」などと学識の高い人物であつたことが記されている。

このことから見ると、幕末から明治維新にかけて、京都府の教育関係者には、私塾「咸宜園」の三奪法などの教育内容、及び「咸宜園」の塾主を務めた漢学者「廣瀨範治(青邨)」のことはかなり有名で、しかも評価も非常に高かつたことを知ることができるのである。

#### ⑥「立命館」との関係

参考までに、廣瀨範治は、私塾「立命館」とも関係している。

私塾「立命館」は、西園寺公望が明治二年九月に京都御所御苑内にあつた西園寺邸内に開設した私塾であるが、翌明治三年四月には閉塾している。

明治三年二月から、当時大学の御用掛であつた廣瀨範治は、私塾「立命館」に賓師として招かれ、大学校に勤務の傍ら、出講して講義している。「詩経」を講じたことなど、その内容はわずかながら『青邨公手沢日記』に見えている。しかし明治三年四月には、西園寺公がフランス留学の準備のため長崎に遊学したため、京都留守長官から立命館の差し留めが命じられて閉塾している。西園寺公は、しばらくの間、閉塾するものとしていたが再開されず、その後、西園寺公は明治三年二月からフランスに留学し、明治一三年に帰国して、その後政界で活躍を

することとなる。

なお「立命館大学」は、明治三年に西園寺文部大臣の秘書官などを務めた中川小十郎が京都法政学校(のち京都法政大学)を創設し、明治三八年に西園寺公から「立命館」の名称の襲用を許され、大正二年に立命館大学と改称して現在に至つていゝものである。

#### 5. 結論

明治二年から明治八年の京都府の教育制度創設の時期に、京都府の行政の内には、明治元年閏四月から明治四年一月まで京都府大参事であつた松田道之、明治三年九月から明治八年四月まで京都府典事・督学であつた廣瀨範治(青邨)が在職していた。したがつて、これらの京都府の先駆的教育改革の内容に、咸宜園出身者を通じて咸宜園教育の影響があつたのではないかと考察してきた。

その結果、大参事であつた松田道之については、府行政の全般に関与していたためか、教育行政だけに関与した記録は見当たらなかつた。しかし、当然ながら教育行政にも決定権者の一人として関わつていたものと思われる。

京都府典事・督学であつた廣瀨範治(青邨)については、当初から京都府の教育改革を中心になつて推進した後に京都府知事になる榎村正直権大参事が、廣瀨範治の教育者としての経歴を恃んで抜擢登用して、京都府の教育行政の改革や創設に当らせたことが確認できた。京都府中学校の創設に関わり、教育綱領である「学体」の制定や規則制度の整備に関わるとともに、中学校の筆頭教授として教育に当り、学務課の責任者として教育事務も総括し、教師の監督にも当たつていゝ。小学校では、すでに開校していた番組小学校の五等級のカリキュラム「小学課業表」、続いて改正された八等級の「改正小学課業表」の作成に関与したことが推定されている。また、その後、京都府の郡部に順次開設された郡中小学校の創設には、ほとんどの開業式で式典の重要な役目を果たしていることから、開設の総括責任者であつたことが確認できた。

以上から、京都府の教育の総括的な役職の京都府督学であつた廣瀨範治(青邨)は、京都府の学校教育制度の創設等に大きく関与していたことが判明した。そして彼を通じて咸宜園教育の影響が少なからずあつたことは否定できないものであると思われ。



## 咸宜園と慶應義塾の関係について

溝田 直己

はじめに

平成三〇年（二〇一八）は、明治維新から一五〇年を迎え、全国各地で幕末から明治に関する様々な行事や展示が執り行われた。

当センターにおいても幕末から明治にかけて活躍した多くの人物が咸宜園から輩出されたことから、『咸宜園と明治維新』と題して、企画展や公開講座を実施したところである。その中で、咸宜園と慶應義塾に学び、近代の日本で活躍した門下生らについて、展示を行った。

慶應義塾を開いた福澤諭吉は、天保五年（一八三四）に中津藩の福澤百助の次男として大坂で生まれた。父の死去に伴い、中津へ帰郷した福澤は、中津の儒学者である白石照山に漢学を、長崎や大坂の適塾において蘭学を学んだ。適塾の緒方洪庵は、廣瀬淡窓の末弟である旭荘と深い親交があり、旭荘の日記をみても、その関係がよくわかる。また日田の咸宜園で学んだ門下生らがその後、緒方洪庵の適塾で学ぶ者がいるなど、福澤諭吉は人づてに咸宜園のことを聞いていた者と思われるが、管見の限り、福澤が咸宜園について述べたことは、『福翁自伝』の中の次の一節のみである（1）。

〔前略〕一体の学流は亀井風で、私の先生は亀井が大信心で、余り詩を作ることなどは教えずにむしろ冷笑していた。広瀬淡窓などの事は、「発句師、俳諧師で、詩の題さえ出来ない、書くことになると漢文が書けぬ、何でもない奴だ」といつておられました。先生がそういうえば門弟子もまたそういう気になるのが不思議だ。淡窓ばかりでない、頼山陽などもはなはだ信じない、誠に目下に見下して、何だ粗末な文章、山陽などの書いたものが文章といわれるなら誰でも文章の出来ぬ者はあるまい。たとい舌足らずで吃つたところが意味は通ずるといふようなものだ」なんてたいそうな剣幕で、先生からそう教え込まれたから、私も山陽外史の事をば軽く見ていました。（後略）（福澤諭吉『福翁自伝』講談社学術文庫、二〇一〇より一部引用）

この『福翁自伝』によれば、福澤の漢学の師匠である白石照山の廣瀬淡窓への評価が低かったため、福澤自身も自然とそう思うようになったと書かれており、少年期の福澤にとつて、廣瀬淡窓・咸宜園、頼山陽などは、取るに足らない存在であったのかも知れない。

しかし、その後、福澤が学んだ大坂の緒方洪庵の適塾には、多くの咸宜園出身者が学び、淡窓の末弟である廣瀬旭荘は緒方洪庵の親友でもあり、適塾のすぐそばに居を構え、漢学塾を開いていた。

また福澤が大坂の適塾で学んでいた安政二年（一八五五）三月から江戸の中津藩邸に呼ばれる安政五年（一八五八）の間にも咸宜園出身者が適塾に学んでいる。中でものちに洪庵の娘婿となり、洪庵が亡くなった後に適塾を継いだ緒方拙斎（吉雄卓爾Ⅱ西鶴太郎）などがおり、福澤の周りには否応なく、咸宜園出身者がいたことは間違いない。

本稿では、大分県にルーツを持つ江戸時代後期を代表する私塾である「咸宜園」と幕末に開塾し、現在にまで至る「慶應義塾」との関わりについて、両方の私塾に学んだ門下生について、現時点で把握している門下生について紹介するものである。今回、幕末から明治時代に活躍した咸宜園門下生を調査する中で、咸宜園で学んだのちに慶應義塾に入社した門下生らについて若干の知見を得たため、数人の門下生であるが紹介したいと思う。

## 一、咸宜園と慶應義塾に学んだ門下たち

慶應義塾とは

まず初めに慶應義塾の成り立ちについて、『慶應義塾史事典』（慶應義塾一五〇年史資料集別巻二）を参考に確認したい（2）。

安政五年（一八五八）一〇月中旬、江戸築地鉄砲洲（現東京都中央区明石町）にあった中津藩中屋敷に開いた蘭学塾がその起源である。幕末の中津藩では、蘭学研究が大変盛んで、蘭学教育の振興を図るため、大坂の適塾で、塾頭を務めていた福澤を江戸に呼び寄せて開塾したものがその起源であり、福澤塾・蘭学塾と呼ばれたという。

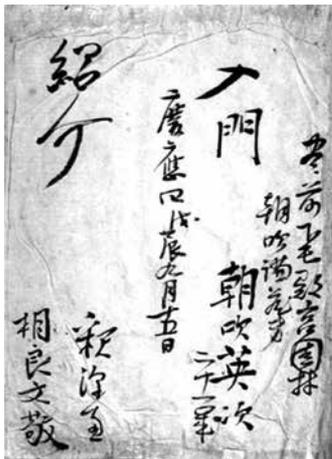
開塾の翌年の安政六年、開港したばかりの横浜を訪れた福澤は、オランダ語が全く通じなかったことから、英学への転向を決意。独学研究するとともにアメリカ

カやヨーロッパ諸国を歴遊し、慶應四年（一八六八）、イギリスでみたパブリックスクールなどを参考に、福澤は洋学研究を志す同士である「社中」の協力による学塾経営を目指し、中津藩からも独立、また当時の年号の「慶應」をとって、塾名を『慶應義塾』と命名したという。その後、慶應義塾は洋学教育を中心としながら、幼稚舎から大学までの一貫教育制を整備・発展し、現在に至っている。

#### 慶應義塾に学んだ咸宜園出身者

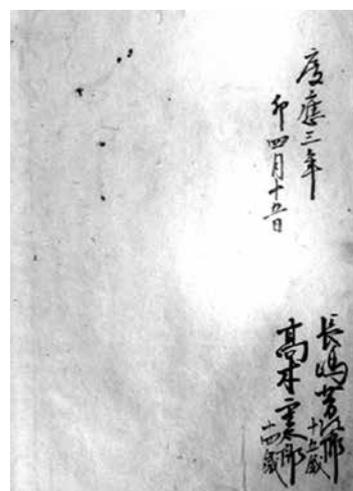
慶應義塾には、咸宜園における入門簿と同様に入学者の氏名、年齢、出身地、父兄・保証人氏名などを記録した帳簿である「入社帳」が残っている。明治四年（一八七二）四月の「慶應義塾社中之約束」によれば、初期には新たに義塾の社中となることを「入社」、寄宿舎に入ることを「入塾」と呼んでいたようであるが、本稿では「入社」で統一する。

日田の咸宜園に学んだのちに慶應義塾に入社した人物について、管見の限り六名の人物を把握している。その中で最も早く入社したのが、豊前国下毛郡宮園村（現大分県中津市耶馬溪町大字宮園）出身で明治三年（一八七〇）一二月に入社した朝吹英二（実業家）である（3）。朝吹は、廣瀬林外が第四代塾主を務めていた際の咸宜園に慶應四年（一八六八）九月一日に二二歳で入塾している。朝吹は幼少の頃、廣瀬淡窓の高弟であった村上姑南（のちに咸宜園第七代塾主も務める）の私塾「養翼園」で学んでおり、実兄の謙三も咸宜園に学んでいた。



朝吹英二写真・入門簿

続いて同五年二月八日には、豊後国日田郡豆田町（現大分県日田市豆田町）の長嶋芳次郎（日本銀行等）が入社している。長嶋の入社帳「入社證人ノ姓名」（保証人）には福澤諭吉の名前が見える（4）。咸宜園の入門簿には、慶應三年四月一日に一五歳で入門している記録が残っている。



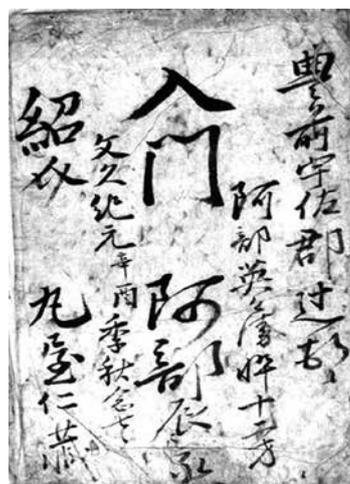
長嶋芳次郎入門簿

同年八月八日には、横田國臣（大審院長）（5）・廣瀬敬四郎（地方官吏）（6）・田代丈吉（判事）（7）の三人が同時に慶應義塾に入社しており、保証人欄にはいずれも咸宜園塾主の廣瀬林外が署名している。林外は明治四年末に洋学研究のため、咸宜園の経営を門弟の唐川即定に託して、東京へ上京しており、横田らが慶應義塾に入社する際には太政官正院歴史課（東京大学史料編纂所の前身）に務めていた。しかし、林外は明治七年、病にかかり三九歳の若さでこの世を去っている。

横田國臣は、豊前国宇佐郡辻村（現大分県宇佐市安心院）の阿部辰之丞の名前で文久元年（一八六一）に咸宜園に入門している。廣瀬敬四郎は、淡窓の末弟で咸宜園第二代塾主も務めた廣瀬旭莊の四男である。咸宜園の入門簿は確認できないが、林外の日記から文久四年（一八六四）頃に入社したと考えられる。田代丈吉は、筑後国生葉郡大石村（現福岡県うきは市）の人で廣瀬林外・長三洲（文部大丞）と並んで咸宜園の三才子と称された田代潤卿の息子である。咸宜園には、明治元年（一八六八）に入門している。

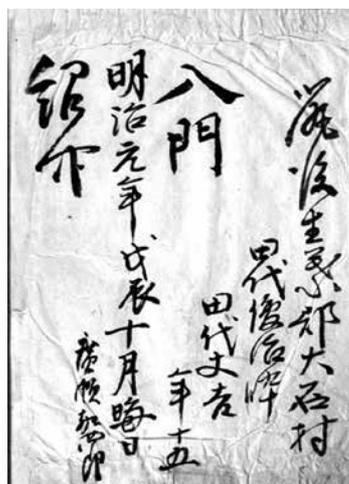
この三人の後に確認できるのは、明治八年（一八七五）一〇月、咸宜園の第三代塾主を務めた廣瀬青邨の長男で、のちに咸宜園第八代塾主や日田町長を務めた廣瀬貞文（濠田）である。この時、「楨蔵」の名で入社している（8）。この時す

でに林外が亡くなっていったためか、保証人の欄には朝吹英二の名前が見える。  
このほかに咸宜園入塾の記録は確認できないが、咸宜園門下生の親類で入社した人物を数えると、慶應義塾に入社した人物は、五名ほど確認できる。



本人姓名	横田國臣
府藩縣	小倉縣
身分	高
宿所	父横田守澄
父或兄弟若親類姓名	父横田守澄
年齢	二十三歳
社中入名月日	八月二日
入社證人姓名	廣瀨敬四郎

横田國臣入門簿・入社帳



本人姓名	田代丈吉
府藩縣	三浦縣
身分	士族
宿所	父田代修二
父或兄弟若親類姓名	父田代修二
年齢	二十歳
社中入名月日	八月八日
入社證人姓名	廣瀨敬四郎

田代丈吉入門簿・入社帳

本人姓名	廣瀨敬四郎
府藩縣	大分縣
身分	農
宿所	父廣瀨孝
父或兄弟若親類姓名	父廣瀨孝
年齢	二十一歳
社中入名月日	八月二日
入社證人姓名	廣瀨敬四郎

廣瀨敬四郎入社帳

本人姓名	廣瀨貞文
府藩縣	大分縣
身分	村士
宿所	父廣瀨敬四郎
父或兄弟若親類姓名	父廣瀨敬四郎
年齢	二十一歳
社中入名月日	明治三年十月十日
入社證人姓名	朝吹英二

廣瀨貞文（楨蔵）入社帳

※入社帳はいずれも、福澤研究センター編・慶應義塾発行の『慶應義塾入社帳』より転載した。

## 二、慶應義塾退塾後の進路

咸宜園と慶應義塾の両方で学んだ門下生の内、明治五年（一八七二）に同時に咸宜園から慶應義塾に学んだ横田國臣・廣瀨敬四郎・田代丈吉ら三人は、いずれも慶應義塾から埼玉県へ入庁していることが、埼玉県に残る公文書から判明する（9）。この三人に先行して埼玉県には、咸宜園で同窓であり、のちに内閣総理大臣にまでなった清浦奎吾（釈普寂）が明治五年に採用されていた。そこへ明治六年には横田が、その翌年である同七年には廣瀨・田代らが埼玉県に採用されており、横田らの埼玉県入庁には、清浦の斡旋があったものと考えられる。ここでは、慶應義塾卒業後の足取りを追うことができる横田國臣と廣瀨敬四郎の動きを見ていきたい。

### 横田國臣（一八五〇～一九二三）

横田は前述したとおり、豊前国宇佐郡辻村の出身で、安政六年（一八五九）に咸宜園の孫塾にあたる涵養学舎に学び、文久元年に咸宜園入門。慶應二年（一八六六）に退塾し、長崎へ遊学した。明治四年（一八七一）に再び咸宜園に入塾し、その翌年である明治五年には慶應義塾に入社した（10）。

明治六年五月、埼玉県へ入庁して、埼玉県学校改正局一等教授・埼玉県学校視察兼大掌教・埼玉県権少属・少属へと昇任している様子が窺えるが、同八年には埼玉県を辞して慶應義塾に復学。同九年に司法省へ出仕して以後は、検事・司法書記・司法省民刑局長・司法次官・検事総長と昇進し、最終的には大審院長を務めている。大正二年（一九一三）二月、七三歳で亡くなっている（11）。



横田國臣肖像写真  
（『咸宜園写真帖』より転載）

履歷

小倉縣

埼玉縣權少屬

横田國臣

嘉永三年八月九日生

安政六年ヨリ萬延元年マテ豊後鶴海退藏

ニ從ヒ文久元年ヨリ慶應元年マテ豊後

廣瀬範治ニ從ヒ漢学研究

慶應二年ヨリ明治二年マテ豊後物集

高世ニ從ヒ皇学研究

明治三年ヨリ同四年マテ豊後廣瀬孝ニ

從ヒ漢学研究

明治四年ヨリ長崎縣中學ニ入り同五年

ヨリ同六年四月マテ東京福沢諭吉ニ從ヒ

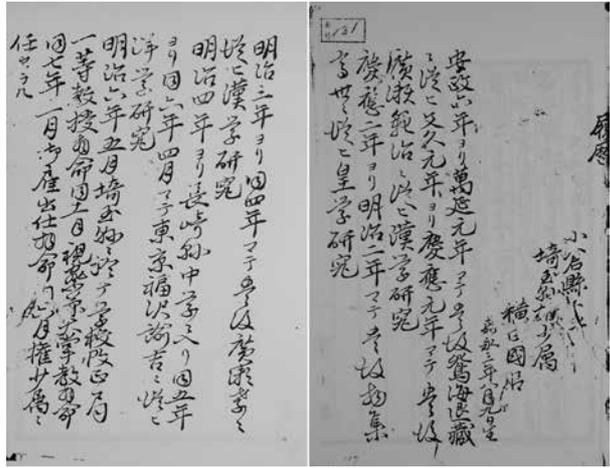
洋学研究

明治六年五月埼玉縣ニ於テ學校改正局

一等教授拜命同十一月視察兼大掌教拜命

同七年一月御雇出仕拜命同六月權少屬ニ

任セラル



横田國臣 履歷書 (埼玉県立文書館所蔵)

廣瀬敬四郎 (一八五一〜一八九四)

撰津国西成郡淡路町 (現大阪市中央区) の出身。淡窓の末弟である廣瀬旭莊の

四男。父・旭莊の死後、大阪から日田へ引き上げ、文久四年 (一八六四) 頃に咸

宜園に入門した。明治五年 (一八七二) には慶應義塾に入社、同七年には埼玉県

改正局へ入庁している。

埼玉県では、学務課及び教師職務を兼任し、少師範兼小教諭・権中教諭と昇任

するも同九年に埼玉県を退職し、再び慶應義塾で洋学を学んだ。この時に取得し

たものと思われる福澤の著述『分権論』(明治一〇年一月刊行)の写本が廣瀬

家に伝わっている。刊行前に敬四郎は慶應義塾を退塾しており、原稿に近いもの

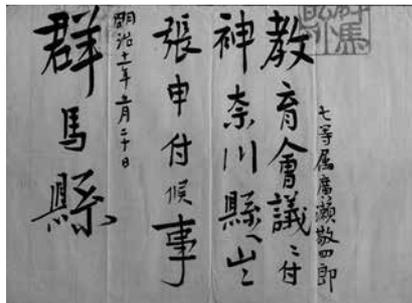
を写したと思われる。同十年二月に群馬県へ入庁し、学務課等で勤務してい

る。その後、大蔵省租税局 (主税局) に向向し、静岡・宮城で勤務し、愛媛・熊本・

神奈川では収税長を務めたが、明治二十七年、四十三歳の若さで亡くなった (12)。



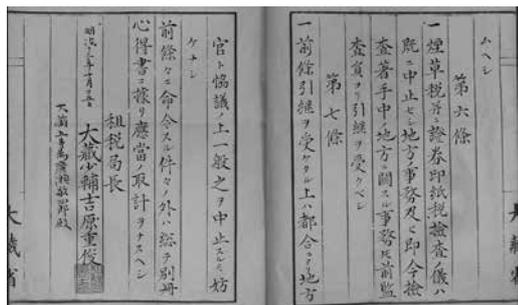
廣瀬敬四郎肖像写真



群馬県出張命令書 (個人蔵)



廣瀬敬四郎 辭職願 (埼玉県立文書館所蔵)



大蔵省命令状 (個人蔵)

辭職願

私義

明治七年六月旧改正局在勤被仰付其後

縣立學校少教諭之寵命ヲ蒙リ涓滴ダモ

其鴻恩ニ報セント欲シ精々注意仕候固ヨリ

短才浅學ニシテ力及ハス慙靦之至リニ奉存上候

然ル處積年洋學之宿志ニ付近頃其資

本之一途之出来候故速ニ就学仕度就てハ

職務御解申被下候様伏て奉願上候也

明治九年二月十五日 権中教諭

廣瀬敬四郎 (印)

埼玉縣令白根多助殿

埼玉縣参事岸良俊介殿

おわりに

以上、簡単ではあるが咸宜園ののちに慶應義塾で学んだ咸宜園門下生について紹介した。本稿を執筆中にも咸宜園から慶應義塾に学んだ人物についての新たな情報が得られるなど、まだ十分に把握することができていない。

慶應義塾の「入社帳」と咸宜園の「入門簿」に記載されている情報の比較・検討・精査によりまだまだ門下生の数は増えると思われる、今後も咸宜園と慶應義塾の関わりについて調査を進めていく予定である。

### 【註】

- (1) 福沢諭吉著／土橋俊一校訂・校注『福翁自伝』講談社二〇一〇年 一八頁
- (2) 『慶應義塾史事典』慶應義塾一五〇年資料集別巻一  
慶應義塾史事典編集委員会二〇〇八年
- (3) 『慶應義塾一五〇年史資料集一』基礎資料編塾員塾生資料集成二〇一二年 二二三頁
- (4) 前掲(3) 四七〇頁
- (5) 前掲(3) 七〇一～七〇二頁
- (6) 前掲(3) 五四五頁
- (7) 前掲(3) 三六六頁
- (8) 前掲(3) 五四六頁
- (9) 手塚豊「大審院長横田国臣」『福澤諭吉年鑑』三(社団法人福沢諭吉協会、一九七六年)によると横田は、在塾九ヶ月で学資に欠乏して慶應義塾を退学して、埼玉県学生改正局一等教授に就任している。「学生改正局」は、埼玉県庁内に設けられた新しい師範学校で、その主任は横田と同年で咸宜園でも同窓であった清浦奎吾が大教授心得を務めていたことが指摘されている。廣瀬や田代の埼玉県入庁も学資に欠乏したため、清浦・横田を頼ったものと思われる、明治初期の埼玉県の教育行政に咸宜園出身者が多く関わっていたことがわかる。また埼玉県立文書館には、清浦や横田、廣瀬、田代らに関する履歴書や昇任、辞職に関する公文書が保管・公開されている。
- (10) 横田国臣履歴(明治七年庶務部職制(県官履歴))埼玉県立文書館所蔵
- (11) 前掲(9)の手塚豊「大審院長横田国臣」や七戸克彦「主査委員④一横田

国臣・高木豊三」現行民法典を創った人々7『法学セミナー』、小貫芳信「最高不倒距離」の人横田国臣『法曹』No.七三二号を参考にした。

(12) 廣瀬敬四郎の子孫の家に伝わった資料の中には、敬四郎の写真や慶應義塾で使っていたと思われる教科書の一部、福澤諭吉著の『分権論』の写本など多くの資料が残されており、その中には群馬県勤務以降の履歴書があり、敬四郎の経歴がよくわかる。

### 参考文献

- 福沢諭吉著／土橋俊一校訂・校注『福翁自伝』講談社二〇一〇年
- 『慶應義塾史事典』慶應義塾一五〇年資料集別巻一  
慶應義塾史事典編集委員会二〇〇八年
- 『慶應義塾入社帳復刻版』慶應義塾一九八六年
- 『慶應義塾一五〇年史資料集一』基礎資料編塾員塾生資料集成二〇一二年
- 『慶應義塾一五〇年史資料集二』  
基礎資料編教職員・教育体制資料集成二〇一六年
- 七戸克彦「主査委員④一横田国臣・高木豊三」現行民法典を創った人々7  
『法学セミナー』日本評論社二〇〇九年
- 小貫芳信「最高不倒距離」の人横田国臣  
『法曹』No.七三二号財団法人法曹二〇一一年
- 手塚豊「大審院長 横田国臣」『福澤諭吉年鑑』三  
社団法人福沢諭吉協会一九七六年
- 咸宜園教育研究センター春季企画展「廣瀬旭莊・敬四郎文庫」二〇一七年

咸宜園門下生略伝(六)

井上知愚(いのうえ・ちぐ)

名 前 井上直次郎 字は希忠、諱は申勝、通称は直次郎、号は知愚  
生没年 文化三年(一八〇六)〜万延元年(一八六〇)三月一日  
出生地 筑後国御井郡大城村日比生

◆入門簿 あり

◆入門簿情報

入門名 井上直次郎

入門年月日 文政三年(一八二〇)庚辰七月二日

住所 筑後御井郡大城村

年齢 一五歳

紹介者 鹿毛逸記

◆師事者 廣瀬淡窓

◆月旦評 不明

◆職任制 塾長(文政八年五月一〇日就任)

◆大婦日 不明(文政八年七月から九年頃)

◆職業 久留米藩士・儒者・柳園塾主宰

◆井上知愚(直次郎)の略年譜(1)

文化三年(一八〇六)

井上要左衛門勝寛の次男として御井郡日比生村に生まれる

文化九年(一八一二)

新以心流居合剣術の免許を得る

文政三年(一八二〇)

七月二日 咸宜園に入門(一五歳)

七月二五日 月旦評上で「入席」

八月二六日 月旦評で「一級下」に昇級

九月四日 帰郷

九月一六日 帰塾(塾に戻る)

九月二六日 月旦評で「一級上」に昇級

十一月五日 帰郷

十一月四日 帰塾

十二月二五日 月旦評で「二級下」に昇級

十二月三日 帰郷

二月一九日 帰塾

五月二六日 月旦評で「二級上」に昇級

六月二八日 帰郷

一〇月七日 帰塾

十一月二六日 月旦評で「三級下」に昇級

十二月二三日 帰郷

一月二七日 帰塾

二月三日 帰郷

四月三日 帰塾

五月二六日 月旦評で「三級上」に昇級

六月八日 帰郷

七月一七日 帰塾

一〇月二日 月旦評で「四級下」に昇級

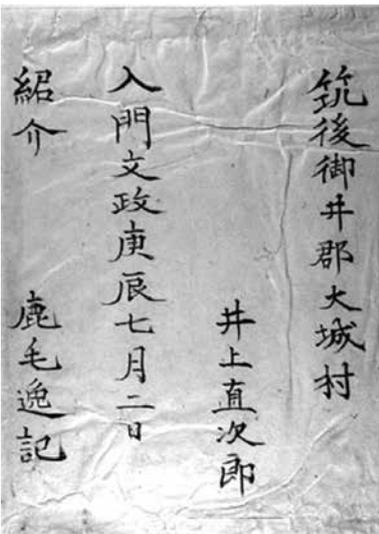
三月二六日 月旦評で「四級上」に昇級

五月一日 帰郷

文政六年(一八二三)

文政五年(一八二二)

文政四年(一八二一)



咸宜園入門簿

五月二五日 歸塾

八月二六日 歸郷

十一月一日 淡窓の代理で日田代官所に行く  
(この後も度々代理で使いをする)

十一月七日 月旦評で「五級下」に昇級

四月七日 歸郷

五月二一日 歸塾

六月二六日 月旦評で「五級上」に昇級

閏八月一九日 歸郷

一〇月二四日 歸塾

文政八年(一八二五) 三月二五日 直次郎の父・井上要左衛門が淡窓のもとを訪れる

三月二六日 月旦評で「六級下」に昇級

同日 淡窓が歸郷する井上要左衛門を見送る

三月二七日 歸塾

四月一日 歸郷

五月七日 歸塾

五月一〇日 直次郎が永祐に代わり塾長となる

七月二七日 歸郷

同日 直次郎に代わり直衛が権塾長となる  
大歸(退塾)か?(2)

文政九年(一八二六) 春頃 淡窓の許しを得て、故郷で塾を開く

一〇月 井上直次郎の長子・栄が生まれる

文政一二年(一八二八) 久留米藩の浪人格となり、月に数回藩士に居合術を指導する

二月二四日 直次郎の門人が咸宜園で学ぶ(3)

二月二四日 淡窓は直次郎の父が先月死去したとの報せを受け、弔いの手紙を出した

六月一三日 肥前田代に滞在中の淡窓のもとを訪れて宿泊した

文政一二年(一八二九)

文政一二年(一八二九)

六月一四日 歸郷

六月二〇日 日田に歸る途中の淡窓と逢う

九月四日 淡窓のもとを来訪して宿泊する(自撰した父の碑文について淡窓の意見を求めるために咸宜園を訪問した)

九月六日 歸郷

文政一三年(天保元年 一八三〇)

一月三〇日 直次郎の門人が淡窓のもとを訪れる

天保四年(一八三三) 一月七日 淡窓を訪ねて東塾に宿泊する

一月八日 淡窓から食事に招かれる

天保七年(一八三六) 一月九日 辞去

八月一三日 直次郎の使いが淡窓のもとを訪れる

八月二八日 直次郎の門人が淡窓のもとを訪れる

六月二四日 直次郎の使いが淡窓のもとを訪れる

九月五日 直次郎の長子・栄が咸宜園に入門する

七月二三日 淡窓の旧門人で山田主一郎と□□文都が直次郎の書を淡窓に持参して咸宜園への再入塾をお願いした

八月一六日 淡窓の旧門人で林修文が直次郎の書を持参して咸宜園への再入塾をお願いした

嘉永三年(一八五〇) 八月二四日 直次郎の使いが淡窓のもとを訪れる

嘉永五年(一八五二) 二月一九日 直次郎は寵命を賜ったことを淡窓に報告する(七人扶持を賜つて右筆格となり久留米藩主に謁見した)(4)

万延元年(一八六〇) 閏三月一日 死去(享年五五歳)

## ◇井上知愚の事績

井上知愚(直次郎)は文化三年(一八〇六)、御井郡日比生村(現久留米市北野町)にて、久留米藩士井上要左衛門勝寛の次男として生まれた。父・勝寛と同じく、新以心流居合剣術を小倉の渡邊有眼斎綱昌に学び、文化九年七歳の時に、新以心流居合剣術の免許を得る。また、柔術、槍術などにも秀でていた。

知愚は文政三年(一八二〇)七月二日、咸宜園に一五歳で「入門」し、廣瀬淡窓に師事する。紹介者は淡窓の旧門人で鹿毛逸記(旧名俊介)である。

知愚は、同年七月二五日、月旦評上で「入席」し、八月二六日、月旦評で「一級下」に昇級している。その後、帰郷と帰塾をしており、同年九月二六日、月旦評で「一級上」に昇級する。また、その後も帰郷と帰塾を繰り返すも、帰塾をした際には順調に昇級を続けた。

また、文政六年一月一日、淡窓の代理で日田代官所に行き、その後も度々代理で使いに行っている。このことから淡窓が知愚に対して、信頼を寄せていたことがうかがえる。その後、知愚は文政八年三月の月旦評で「六級下」に昇級し、同年五月一〇日、永祐の大婦(退塾)に伴い塾長となった。

知愚は、文政九年に大婦(退塾)とみられるが、文政八年八月から一二月までは淡窓の日記で該当する記載がなく、また、文政九年と一〇年の二年間は淡窓の日記自体が存在しないため、正確な大婦日を特定するのは難しい。帰郷した知愚は、文政一〇年春頃に筑後から淡窓を訪ねている。以前から知愚のもとに入門を希望する子弟が少なくなかったが、知愚は自らの不才浅学をもって弟子を取ることを断ってきた。しかし、父から淡窓に相談することを勧められ、その後、淡窓と相談して許可が出たため「柳園塾」という漢学塾を開くに至っている。(5)

淡窓は『懐旧楼筆記』の中で、知愚が郷里で塾を開いた経緯などを次のように記している。

井上直次郎筑後ヨリ来訪ヒ、余ニ請ウテ言ヒケルハ、郷里ノ子弟、某ニ教ヲ受ケンコトヲ請フ者多シ。某不才浅学ヲ以テ辞ストイヘトモ、猶請ウテ止マス。父命シテ曰ハク、日田ニ行イテ先生ニ問ヒ、先生以テ可トセハ之ヲ始メ、不可トセハヤムヘシト。願ハクハ先生ノ一言ヲ以テ之ヲ決セント。余乃之ヲ許セリ。直次郎是ニ於テ塾ヲ開キ、四方ノ生徒ヲ誘引ス。ソノ後門客年ヲ追ウテ盛ニナリ、終ニ恒遠重富ノ二生ト、鼎足ノ勢ヲナセリ。(6)

## ◇柳園塾の概要

柳園塾は、筑後国御井郡大城村日比生の地で井上知愚と長子の昆江により、父子二代に亘り、運営された漢学塾である。塾名は昆江の時代に付いたとされている。塾は文政一〇年(一八二七)から明治一八年(一八八五)まで約六〇年間つづき、門人一〇〇〇人ほどを輩出したという。柳園塾出身者には、衆議院議員や県会議員、村会議員などの政治家、村長、学校長などの役人が多数存在する。なかには、吉富復軒や石井眞太郎のように咸宜園教育を継承することで時代を牽引する人材も多く育っていた。

現在、柳園塾の教育内容については、知愚の後を継いだ昆江が塾主を務めた時代のことが知られるのみで知愚が開塾した当時のことについての詳細は不明である。その後、開塾した翌年の文政一一年、亡父勝寛の跡を継ぎ、久留米藩の浪人格として召し抱えられ、月に幾回城下に出仕し、藩士に居合術を指南した。

また、同年二月一四日、知愚の門人が咸宜園に入塾し、二月二四日には、知愚の父が先月死去した報せを受け、淡窓が弔いの手紙を出している。

翌年六月一三日には、知愚が淡窓のもとに来訪しており、田代にて宿泊している。翌日には、帰郷しているが、六月二〇日、淡窓が日田に帰る途中で知愚と会っており、このことは『懐旧楼筆記』にも記されている。

その後も、知愚の使いが度々淡窓の元を訪れていることや天保一四年(一八四三)昆江が入門していることから、大帰後も淡窓と積極的な関係性を築いていたことが読み取れる。

また、知愚は嘉永五年(一八五二)、久留米藩での働きが認められ右筆格となり七人扶持となる。この時、師の淡窓から次の祝いの漢詩をうける。

文武良才草莽雄 朝鳴玉入城中  
弱毫舒去如流水 長劍揮來是疾風 (『昆江井上先生』より)

また、知愚は常に自分を論ずため、次のように記している。

「我未熟ナガラ御上ヨリ格扶持ヲ賜フハ、先考勝寛我ヲ忠考文武ニ導キ給フ餘慶ナリ、汝等相徳ヲ忘レズ、文武忠孝ヲ励ムベシ」(『昆江井上先生』一五七頁)

【後記】

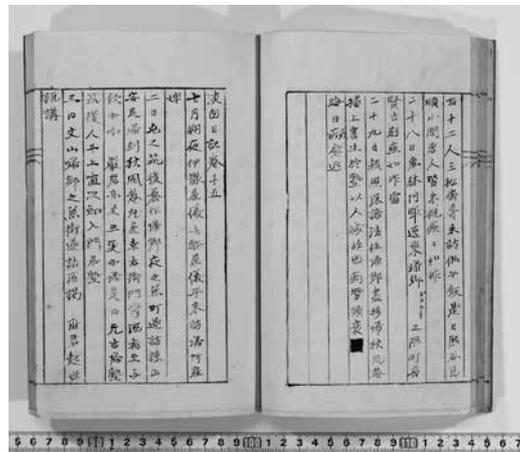
本稿の作成にあたっては筑紫女学園大学教授 時里奉明氏に資料の提供ならびにご指導いただきました。また、井上昆江子孫の中島昭代氏や、永野健康氏にご協力をいただき、久留米市文化財保護課 本田岳秋氏にも貴重な情報をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

【註】

- (1) この年譜については、主に『淡窓日記』を参考として作成をおこない、必要に応じて『懐旧樓筆記』や『昆江井上先生』で補完した。
- (2) 知愚に関して、文政八年八月から一二月までは淡窓日記に記載がなく、文政九年と一〇年の二年間は、淡窓の日記が存在しない。よって、文政八年七月二十七日の帰郷と文政一〇年春頃の故郷での開塾の間をとり、文政九年頃に大帰したものと考えられる。
- (3) 知愚(直次郎)の門人たちが柳園塾に席をおいた状態で咸宜園に入塾したため、入門簿への記載がない。
- (4) 右筆とは、武家の秘書役で文官のこと。江戸幕府や諸藩では、右筆(格)と呼ばれる役をおいた。
- (5) 「柳園塾」という名称をつけた正確な年代については不明。
- (6) 『増補淡窓全集』上巻、三三二頁にも記載あり。

【参考文献】

- 廣瀬淡窓「淡窓日記」『増補淡窓全集』上巻(思文閣、一九二五)
- 倉富一『昆江井上先生』(秋松活版所、一九三七)
- 『大城村郷土読本』(大城村教育委員会、一九五四)
- 平野彦次郎『福岡縣三井郡方言私考』(野口二郎、一九七二)
- 井上義巳『福岡県教育史』(思文閣、一九八四)
- 『北野町史誌』(北野町史誌編纂委員会、一九九一)
- 『ふるさと大城』久留米市立大城小学校創立一〇〇周年記念誌(別巻史料集)(大城小学校創立一〇〇周年記念事業実行委員会、二〇一四)
- 時里奉明「筑後国『三井郡』の明治維新―柳園塾の遺産―」筑後地区研究集会
- 二『地方史ふくおか』一六五号(福岡県地方史連絡協議会、二〇一九)



井上知愚(直次郎)の入門記事(『淡窓日記』より)



井上知愚墓



井上知愚・シゲの夫妻墓

咸宜園門下生略伝(六)

井上昆江(いのうえ・こんこう)

名 前 井上栄 名は節、字は大中、通称は栄、号は昆江

生没年 文政一〇年(一八二七)一〇月〜明治二年(一八八八)八月二六日

出生地 筑後国御井郡日比生村(大城村)

◆入門簿 あり

◆入門簿情報

入門名 井上栄

入門年月日 天保一四年(一八四三)癸卯九月五日

住所 筑後久留米日比生村

年齢 一七歳

紹介者 築山文斎

◆師事者 廣瀬淡窓

◆月旦評 九級下

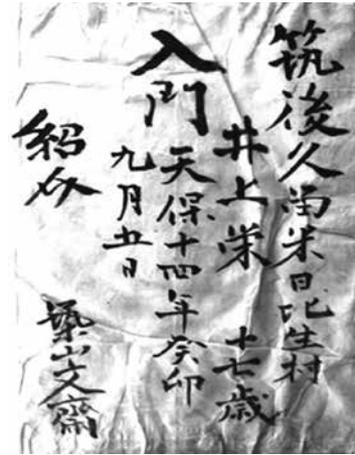
◆職任制 都講(弘化四年一月二五日就任)

◆大婦日 弘化四年(一八四七)

◆職業 儒者・柳園塾主宰・久留米師範学校教諭



井上昆江肖像写真  
(大城小学校蔵)



咸宜園入門簿

◆井上昆江(栄)の略年譜(1)

文政一〇年(一八二七) 一〇月 井上直次郎の長男として御井郡日比生村に生まれる

天保一四年(一八四三) 九月五日 咸宜園に入門(一七歳)

九月二六日 月旦評で「入席」

閏月二五日 超遷にて「真一級上」に昇級(2)

一〇月二六日 三超にて「権三級下」に昇級

一一月二六日 超遷にて「権四級下」に昇級

一二月二二日 超遷にて「二権五級下」に昇級

天保一五年(弘化元年、一八四四) 二月二二日 月旦評で「三権五級上」に昇級

二月二五日 月旦評で「三権六級下」に昇級

三月二五日 月旦評で「四権六級上」に昇級

六月二六日 月旦評で「五権七級下」に昇級

八月二五日 月旦評で「六権七級上」に昇級

一一月二五日 月旦評で「六権八級下」に昇級

天保一六年(弘化二年、一八四五) 一〇月二五日 月旦評で「六権八級上」に昇級

二月二七日 新例により栄を含め「八級上」にあった四名が権舎長の職に任じられる(3)

弘化三年(一八四六) 一〇月二五日 月旦評で「三権九級下」に昇級

一二月二六日 舎長に任命される

弘化四年(一八四七) 一月八日 大婦するため淡窓から夕食に招かれる

一月九日 咸宜園を去って大婦する

一月二五日 大婦した栄が都講に追任される(4)

九月二三日 咸宜園を訪問(以降、淡窓の日記に記載なし)

嘉永四年(一八五二) 九月二三日 淡窓翁の三回忌に「戊午十一月朔文玄先生第三回忌有感」と題した詩をつくる

安政五年(一八五八)

万延元年（一八六〇） 閏三月一日 父・知愚の死去（享年五五歳）後、栄

が知愚の跡を継いで塾主となる

奥州戦役に従軍

明治二年（一八六九）頃

久留米師範学校の教誨となる

明治九年（一八七六）頃

「柳園塾」は四年制の私立中学校「柳園学校」となる（5）

明治一八年（一八八五）

咸宜園再興のため日田に寓居する

この時「柳園学校」が閉校（6）

明治一九年（一八八六）

咸宜園の都講を辞職する（7）

明治二二年（一八八八）

死去（享年六二歳）

明治二三年（一八八九）

五月 栄の門下生により墓碑が建立される

大正二四年（一九二五）

一月二六日 門弟が主催する追悼会が筑後の善導寺

恵照院で執行される

昭和二二年（一九三七）

六月五日 『昆江井上先生』刊行

八月一六日

末女の宮原サメが五〇年忌法要を行う

### ◇井上昆江と咸宜園の関係

井上昆江（栄）は文政一〇年（一八二七）一〇月、御井郡日比生村（現久留米市北野町）にて、井上知愚の長子として生まれた。

昆江は天保一四年（一八四三）九月五日、咸宜園に一七歳で「入門」し、廣瀬淡窓に師事する。紹介者は、淡窓や弟の旭荘のもとで学んだ築山文斎である。

同年九月二六日、月旦評で「入席」とすると、直ちに超遷にて「真一級上」に昇級している。その後はひと月ごとに順調に昇級し、同年二月二二日には、月旦評で「三権五級上」に昇級した。咸宜園では五級以上を「上等生」と位置付けている。その後も昆江は学問を進めて着実に昇級を続けた。

弘化三年（一八四六）二月二七日には、月旦評の八級上にある昆江を含めた四名を権舎長に就任したことについて、淡窓は先例のないことで「新例」であると日記に記しているが詳細は分からない。

また、同年一〇月二五日の月旦評では「三権九級下」に昇級し、同年一月二六日には舎長となったが、淡窓は塾内の最高職である都講に準じるものとして

日記に記した。さらに『淡窓日記』の「二歳要事」（8）には、この年の九級に五名が在籍したことを特記しており、その内の一人に昆江の名が含まれる。（9）弘化四年一月八日、淡窓は大帰（退塾）する昆江を夕食に招いている。翌日、昆江は大帰し、咸宜園を去った。このとき、昆江は月旦評で「二権九級下」にまで到達し、舎長および準都講の職に就いていた。淡窓は大帰する昆江のことを日記の中で「優秀で得難い人物である」と評している。

昆江は大帰後の弘化四年一月二五日、「都講」に追任された。大帰後に在籍者以外の者が都講に指名されるのは前例のないことで、淡窓も「新例」と記している。都講に任じた理由については明らかにし得ないが、おそらくは塾政に貢献した名誉の意味があったのではないかと考えられ、このことから淡窓が昆江のことを高く評価していたことがうかがえる。

また、大帰後も咸宜園とは交流を続けており、同年八月一日に来訪し、翌日は淡窓が設けた酒席に村上慎治や春甫とともに参加した記事が見えるほか、嘉永元年（一八四八）五月五日にも再訪し、翌日の六日に淡窓と食事を供にした。

### ◇井上昆江と柳園塾

「柳園塾」は、昆江の父・知愚が開いた塾を継承して後に「柳園塾」と名付けたとされる。呼称した時期については不詳であるが、万延元（一八六〇）年の知愚の死後まもなくと考えられている。柳園塾の塾舎は簡素な瓦葺二階造があるほかは、講義は塾主家の一室を講堂として使用したと伝わる。

柳園塾の入門者については、九州以外では東京、横浜、滋賀、香川や遠く朝鮮柴山浦からも入塾している。中でも、代表的な門下生としては、衆議院議員に十回当選し、筑後川の治水に尽力した佐々木正蔵や大城村長をつとめ、当域の養蚕業の振興を行った福田芳太郎などが著名である。昆江の人となりについては、次のような記事が知られる。

先生は鍛錬又鍛錬、筋骨逞しき偉丈夫、背長の割には面太く、頭は斬髪のように長く、貫目充溢、一步忽かせにせざる底の堂々たる態度の所有者なりき。秋霜を以て自ら律し、春風を以て人に接し、威ありて猛からず、親むべくして褻るべからず。是故に人と争はれず、而して人は常に先生に服し

たり。その家族に臨まるるや厳厲ならず、随つて叱咤の聲の婢僕に至りしこと絶無なり。門人に於けるも亦然り（『昆江井上先生』一三頁）

明治維新後の昆江は、明治九年（一八七六）に久留米師範学校の教誨となるが、同時に「柳園塾」を維持するため、同一〇年には「柳園塾」を「柳園学校」と改称して私立中学校へと転換し、学校を維持した。しかし、同一八年、咸宜園塾主が廣瀬濠田（貞文）のとき、咸宜園再興のために咸宜園の都講として迎えられ、日田に移り住んで塾生を教授している。「柳園学校」はこの頃に閉校したと考えられているが、日田で教授したのは短期間で翌年には地元に戻っている。帰郷の理由については諸説あるが、帰郷は病のためとされる一方で、昆江の娘たちの証言では、「帰郷後、大病を患った。」との記述も伝わり判然としない。

#### ◇井上昆江の顕彰活動

昆江は明治二十一年、六二歳で死去した。翌年五月には、昆江の門下生によって故郷の御井郡日比生村に墓碑を建立するが、竿石正面には「昆江井上先生之墓」と刻まれる。書は咸宜園出身の長三洲によるもので、銘の側には「友人長茨書」と記してある。また左右裏の碑銘は同じく咸宜園出身で昆江の門人でもあった谷口藍田の撰文で、書したのは筑前の井上蕉園なる人物である。

大正一四年（一九二五）一〇月二六日には、昆江の門下生による追悼会が善導寺の恵照院で執り行われた。また、昭和一二年（一九三七）六月五日には『昆江井上先生』を刊行し、同年八月一六日には昆江の末女である宮原サメが五〇年忌法要を行っている。

#### 【井上昆江遺稿】

『塞責詩集』、『昆江漫稿』（一・三・四・五）、『昆江詩鈔』、『昆江遺玉』、『合一篇』、『民権論憶説』

#### 【後記】

本稿の作成にあたっては筑紫女学園大学教授 時里奉明氏に資料の提供ならびにご指導いただきました。また、井上昆江子孫の中島昭代氏や、永野健康氏にご

協力をいただき、久留米市文化財保護課 本田岳秋氏にも貴重な情報をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

#### 【註】

- (1) 年譜は作成にあたっては『淡窓日記』、『昆江井上先生』を参考にした。
- (2) 超遷とは月旦表における飛び級のことである。以下、二超、三超などの例があるが、二超は現在の等級から三等級先に進むことである。
- (3) 『淡窓日記』には、当時、八級上に在席する萊藏、麟兮、栄、益太郎の四名に対して、同時に権舎長の職に任じている。この事は新例であり、詳細は別録すると記事は続くが、史料が現存しないため詳細は不明である。
- (4) 『淡窓日記』ではこの記事に続いて「新例」とある。
- (5) 『北野町史誌』四八三〜四八四頁掲載。
- (6) 『北野町史誌』四八五頁掲載。ただし、『ふるさと大城』七九頁には閉塾は明治二十一年の昆江の死去に伴うと記されている。
- (7) 『昆江井上先生』一四七頁に咸宜園を去る前に詠んだ「留別宜園諸子 此日初雨夕晴 大会于西教寺 三十九名一首」がある。
- (8) 「二歳要事」とは淡窓が日記のなかで一年の出来事を振り返りまとめた記事のことである。
- (9) 『淡窓日記』には三郎、栄、麟兮、瀧治、顕藏の五名が記載されている。

#### 【参考文献】

- 廣瀬淡窓「淡窓日記」『増補淡窓全集』上巻（思文閣、一九二五）  
倉富了一『昆江井上先生』（秋松活版所、一九三七）  
『大城村郷土読本』（大城村教育委員会、一九五四）  
平野彦次郎『福岡縣三井郡方言私考』（野口一郎、一九七二）  
井上義巳『福岡県の教育史』（思文閣、一九八四）  
『北野町史誌』（北野町史誌編纂委員会、一九九一）  
『ふるさと大城』久留米市立大城小学校創立一〇〇周年記念誌（別巻史料集）（大城小学校創立一〇〇周年記念事業実行委員会、二〇一四）  
時里奉明「筑後国『三井郡』の明治維新―柳園塾の遺産― 筑後地区研究集会二『地方史ふくおか』一六五号（福岡県地方史連絡協議会、二〇一九）



井上家墓所（全景）



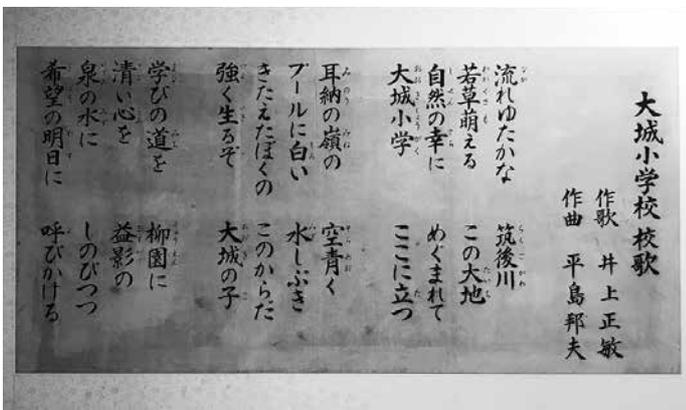
井上昆江（栄）の入門記事（『淡窓日記』より）



井上昆江墓 銘「友人長茨書」



井上昆江墓（背面には昆江の室と後室2名の墓がある）



大城小学校校歌には塾名の「柳園」がみえる（大城小学校蔵）



井上昆江宅跡・柳園塾推定地（墓所南側）

教育遺産を歩く(二)

### 3. 水哉園(すいさいえん)

「仏山塾跡」福岡県指定文化財(史跡)

#### 【はじめに】

福岡県行橋市には、江戸時代から明治時代にかけて儒者、漢詩人として活躍した村上仏山(一八一〇～一八七九)の私塾「水哉園(通称は仏山塾)」があった。天保六(一八三五)年、仏山は二六歳のときに地元の上稗田の地に私塾「水哉園」を開設し、漢学を教授した。全国から集まった塾生は三千人に及ぶとされるが、現在も二千名を超える門人たちの記録「入門姓名録」が残っている。塾名にある「水哉」とは『孟子』の中の孔子の言葉を引用したもので、「水の流れに源があるように、学問も根本が大切である」という意味が込められている。

仏山は明治一二(一八七九)年、享年七〇歳でこの世を去ったが、塾は養嗣子の静窓に引き継がれて同一七年まで五〇年間続いた。

「水哉園」は、咸宜園出身の恒遠醒窓が主宰した「蔵春園」と並んで、幕末維新期の豊前地域に存した北部九州を代表する私塾であった。

現在、塾跡は「仏山塾(水哉園)跡」として福岡県指定文化財(史跡)になっているほか、「入門姓名録」を始めとする関係資料は「仏山塾関連資料」として同じく有形の福岡県指定文化財(歴史資料)となっている。

#### 【沿革・概要】

仏山は、文化七(一八一〇)年一〇月二五日に豊前国京都郡上稗田村の郷土・村上盛之の三男として生まれた。幼名は健平。諱は剛。兄の義暁(彦九郎)は新津手永の大庄屋として、弟の貴之(半六)は稗田村の庄屋を務めている。父・盛之は仏山二一歳のときに死別し、仏山は母・お民を生涯にわたり支えた。仏山の学問の始めは九歳の頃、津積村大島八幡宮の定村直榮に師事し、その後は一五歳で筑前秋月の原古処の塾に入門した。また、その長子・白圭にも学んだほか、京師の貫名海屋や筑前の亀井昭陽などにも師事した。

「仏山」の号は、天保三年(二三歳)の頃から使用し始めたときされる。また私塾「水哉園」の開塾は還暦を迎えた母の薦めであったと伝わる。

水哉園出身で旧制の豊津中学校の教師(図画)を務めた山田季造が当時の塾の様子を「水哉園旧景図」として描いている。塾の前には長峽川が流れ、川沿いの通りに面して構えた門を入ると、菜園が広がる正面に鍵屋形式の仏山の居宅がある。門の二階は「金波楼」と呼ばれ仏山の高弟諸兄が居住した。また、門の右側に接続する建物は塾生らの食堂や寮舎として使用されたほか、敷地中央の右側には教場とされる草葺きの建物が二棟並列して建っていた。

敷地内に当時の建物は現存しないが、主屋は以前の鍵屋形式とその間取りを踏襲して建築されているほか、周囲の景観も絵図などに見られる景色を十分に留めている。現在は、仏山堂日記など貴重な史料を保管する「仏山堂文庫」が新たに建築されている。

仏山の代表作に『佛山堂詩鈔(全四編)』があるが、第一編には篠崎小竹の序や梁川星巖、廣瀬淡窓など当世の著名な詩人が文を寄せている。また、水哉園と咸宜園の関係について、仏山の詩鈔が一時咸宜園での教材として利用されたことや仏山の門弟が咸宜園に遊学したことなど、双方の塾には深い交流があった。

#### 【水哉園の教育】

水哉園の教育は廣瀬淡窓が主宰した咸宜園の影響を受けたとされているが、仏山は全寮制で厳しい塾則を整備し、試験による進級制度を取り入れていた。また、その教育内容は咸宜園と同様に詩文にその重きを置いていたことが佛山の日記などから明らかである。仏山は「水哉」の意義を「水哉園詩示門生」(『佛山堂詩鈔第二編風』所収)に詠んで勸学の精神としているが、淡窓の代表的な漢詩「桂林莊雜詠示諸生」と類似した題は興味深い。

水哉園の塾生は、毎月末に実施される詩文の解釈や数人で行う輪読などの試験によって進級し、その成績は「席序」表として毎月作成された。等級は上級・中級・下級に大別し、さらに級毎に上中下を設けるなど全九級制とした。表の中には塾内での役職(都講、塾長、塾監等)が名前の側に記載されるなど咸宜園の月旦評に倣ったものと考えられる。仏山の交友関係は広く、咸宜園の歴代塾主や豊前出身の咸宜園門下生などと親交があったことから咸宜園教育の影響を受けたのであろう。後に、友石孝之は水哉園の教育の特徴について、「水哉園では、知恵よりも先ず道義を教え、理屈よりも先ず実践を尊重させた。」と語っている。

水哉園では、毎月朔日に全生徒が仏山に拝礼すること、また一五日は全員で塾舎の大掃除をすることになっていた。その他、仏山の日記からは年中行事に関する記事が多く見られるが、特に神事・祭事・詩会・吟行などが多く、星会（観察会）や蛸を觀賞する会などもあった。仏山と塾生たちが生活を共にしながら学問に取り組む様子が具に感じられ、自由で開放的な塾風であったようだ。

### 【水哉園出身の門下生】

現在、水哉園には天保五年から明治一七年までの「入門姓名録」がある。記載される門下生の数は一二六三名に上り、その内、地元の水哉園出身者は九一九名で、次に長門国の九九名、筑前国からは九七名が学んでいた。一時的な通塾生も含めると約三千名の門下生が学んだとされ、明治初期に隆盛を極めた。

水哉園で学んだ出身者には、明治時代に政治家や官僚として活躍した末松謙澄や安広伴一郎、吉田増蔵（学軒）を始めとして、狭間畏三や守田蓑洲、杉山貞など地域で活躍した人材を数多く世に送り出している。

### ◆守田蓑洲（大庄屋・福岡県議會議員）一八二四～一九一〇

豊前仲津郡杵尾村の大庄屋に生まれた。水哉園では初代塾長を務め、新田開拓や村内の育英小学校への援助など地域振興に大きく寄与した人物であった。

現在、「守田蓑洲旧居」は行橋市指定文化財（史跡）となっている。

### ◆末松謙澄（ジャーナリスト・政治家）一八五五～一九二〇

豊前前田村の大庄屋に生まれる。仏山に学んだ後、上京して東京日日新聞に入社した。多才多能の巨人と評されたように、その後も通信大臣や内務大臣等を歴任。その他、維新資料「防長回天史」の編纂やケンブリッジ大学在学中に「源氏物語」を最初に英訳した人物でもあった。

### ◆安広伴一郎（官僚）一八五九～一九五一

行橋出身。山県有朋の知遇を得て、官営八幡製鉄所長官や法制局長官、枢密顧問官などを歴任。南満州鉄道社長（総裁）にも就任した。

### ◆吉田学軒（漢学者・官僚）一八六六～一九四一

学軒は仏山とその後継者である静窓の薫陶を受けた。その後は米國留学を経験し、咸宜園出身の堤正勝や谷口藍田にも学んだ。森鷗外とは親交があり、「鷗外日記」の代筆を行ったことがある。「昭和」の元号の創案者。

本稿を作成するにあたっては、村上良春様ならびに城戸淳一様にご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

### 【参考文献】

『福岡県の教育史』（思文閣出版一九八四）

行橋市歴史資料館編『平成二二年度特別展「生誕二百年記念 村上佛山」』展示図録（行橋市教育委員会二〇二〇）

咸宜園教育研究センター編『平成二二年度特別展（秋季企画展）「九州の私塾と教育」咸宜園とその周辺』展示解説書（咸宜園教育研究センター二〇二二）

友石孝之『村上佛山 ある偉人の生涯』（美夜古文化懇話会一九五五）

### 【関連図書】

古賀武夫『村上佛山を巡る人々 幕末豊前の農村社会』（一九九〇）

行橋市教育委員会『郷土に生きた偉人 村上佛山展』図録（一九九九）

行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社『企画展「第九回 行橋の先達の書画展」村上佛山を巡る人々』図録（二〇〇七）

伊東尾四郎『京都郡誌』（一九一九）

山崎有信『豊前人物志』（国書刊行会一九二四）

行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社『特別展「明治の元勲を感動させた男 守田蓑洲」』図録（二〇〇九）

行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社『特別展「明治の元勲を感動させた男 守田蓑洲」』図録（二〇〇九）

山崎有信『豊前人物志』（国書刊行会一九二四）

行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社『特別展「明治の元勲を感動させた男 守田蓑洲」』図録（二〇〇九）

### 【交通アクセス】

〒824-0055 福岡県行橋市上稗田553

電話 0930(25) 1111（行橋市教育委員会文化課）

駐車場 無

見学希望の場合は事前連絡が必要

JR行橋駅からバスで15分



水哉園旧景図 (山田季造作)



詩人邨之図 (『佛山堂詩鈔』第三編より)



「水哉園南画」帆足杏雨画  
(杏雨は咸宜園出身)



「水哉園南画」(水哉園部分)



水哉園遠景 (手前は長峡川)



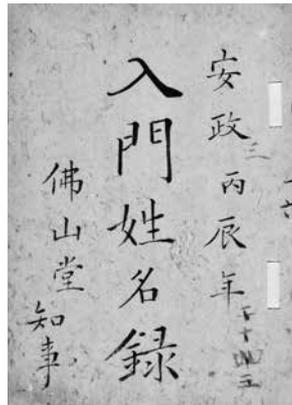
仏山堂文庫



水哉園旧宅



水哉園席序 (個人蔵)



入門姓名録



仏山先生木製坐像



扁額「佛山堂」(貫名海屋書)



拓影「佛山先生墓」



墓碑「佛山先生墓」(生前墓)

教育遺産を歩く(一)

#### 4. 青谿書院(せいけいしよいん)

兵庫県指定文化財(史跡)



池田草庵肖像画

##### 【はじめに】

兵庫県養父市には、江戸時代後期から明治期にかけて、儒学者の池田草庵が開いた漢学塾「青谿書院」があった。

池田草庵は「但馬聖人」と呼ばれた人物で、近代日本の基礎を築いた政治家や教育者など多くの人材を輩出した教育者でもあった。

天保一四(一八四三)年、三〇歳で帰郷した草庵は、初め但馬国八鹿村で「立誠舎」と名付けた塾を開いたが、その後、弘化四(一八四七)年には宿南村(現在地)に塾を移して「青谿書院」とした。明治二年、六六歳で亡くなるまでに草庵に学んだ門下生は全国三〇カ国から六七三人を数える。現在は宿舍と講堂を兼ねた木造茅葺二階建の主屋や納屋、便所など往時をしのぶ建物が良好に残る。

主屋の二階は生徒の宿舍に利用したとされ、一階の奥にある六畳間は草庵の居室として、また手前の八畳二間は客間と講堂を兼ねていた。

青谿書院は、草庵の死後、まもなく閉塾したとされるが、その精神を継いだ門弟らが中心となって八鹿の地に「山陰義塾」が開かれ、明治二八年まで継続している。その後も八鹿には明治三〇年に県立蚕業学校が設立され、現在の県立八鹿高等学校や同但馬農業高等学校へと継承されている。また、平成二二年に統合して新たに生まれた学校には「八鹿青谿中学校」と塾名を採用している。

青谿書院の所在地は養父市八鹿町宿南にあるが、市街地中心の八鹿駅から直線で約四kmの場所であり、豊岡方面に向かう山陰本線の西側で狭隘な谷部の閑かな農村部に位置する。昭和四十五年には、兵庫県指定文化財(記念物・史跡)となっている。

##### 【池田草庵と青谿書院】

池田草庵は、文化一〇(一八一三)年、宿南村の農家、七代池田孫左衛門の三男として生まれた。幼名は歌藏、通称は禎藏で名を緝、字は子敬、号を草庵とした。一〇歳のとき母親を、その二年後には父を亡くしたため、一二歳で広谷村の満福寺に出家した。その後、広谷村の大橋惣右衛門宅に寄寓していた京都の儒学者、相馬九方の講義を受けたことが後の草庵の人生に大きく影響した。草庵一八歳の時、帰京する相馬九方の後を追って、京都で本格的な学問の道を歩み始めている。京都では学問の修得だけでなく、生涯の友となる春日潜庵との出会いもあった。天保一一年八月、最初の塾を京都一条烏丸西で二七歳の時に開いている。

開塾から三年後の天保一四年、かねてより地元の郷党から開塾して欲しいと勧められていたが、帰郷を決意した草庵は八鹿村で私塾「立誠舎」を開いた。立誠舎は八鹿村の西村潜堂が心学を教えていた塾名のことであるが、草庵はその呼称を受け継ぎ塾名とした。青谿書院に移るまでの約四年間に六二名が入門している。現在、「立誠舎」は但馬地方では最も歴史ある学校建築として適切に保存され、地域の交流と学習の拠点施設としても活用されている。

立誠舎の開塾から四年が経過した弘化四年、草庵は地元の宿南村に塾を移して新たに「青谿書院」と名付けた。当時、諸国に遍く存在した私塾(学問所)の多くは漢学塾であったため、塾名は中国の漢籍を典故にしたものが多かった。ところが草庵は土地の名前から塾名を採用している。青谿書院は、宿南村の上流にある青山村から流れ出る青山川を堺にして、右岸は書院のある源氏山、反対側には夜気山と呼ぶ小高い山があった。そこで、狭隘な谷に流れる青山川の名称とその景観から「青谿」と名付けたのである。塾舎は源氏山の麓の斜面を切り出した平場に配置し、谷を挟んだ夜気山には草庵の墓所がある。

故郷で開塾した草庵は、地域に根ざした教育に主眼を置いていたが、諸国の文人との交流は盛んに行っていた。特に林良斎や近藤篤山、山田方谷などとは関係が深く、江戸では幕府儒官の佐藤一斎に学んだこともあった。また、塾の外では豊岡藩や出石藩、福知山藩などの藩校で講義をした。

草庵の著書は、『中庸略解』や『肄業餘稿』などが知られるが、生前に出版されたのは中国の『大学』を解釈した『古本大学略解』(明治五年刊)だけである。

## 【池田草庵の思想と教育】

草庵の人となりについては、「慎独」と「静坐」の二つをもって説明されることが多い。草庵の学問は、朱子学と陽明学を合一したもので、『大学』や『中庸』などに説かれている「慎独」の精神を重んじていた。これは、自分が独りでいるときでも、心を正しく持ち、自分に恥じない行動をすることと解釈されている。「慎独」は、中江藤樹や大塩平八郎なども大切にしていた言葉である。また、生活面や学習面においては「静坐」の実践を最も肝要なものとした。

草庵の著書『肄業餘稿』は、草庵が青谿書院で実践した講義や講話の記録である。序文には、その成り立ちについて触れているが、月に一、二度、自らが思いつくままに話した内容を課題として塾生に漢文で書かせ、文章の出来を指導したというのである。これは、万延元（一八六〇）年から草庵が没する一年前の明治一〇（一八七七）年までの内容を凡そ年代順にまとめたもので、全四九〇条からなる。中には、「理想は高く持ち、学問は身近に役立つ事を重んじる」（一九条）、「学問をする者は日常の営みや肉体労働をいやがってはいけない」（九三条）、「人間が草木と同じように朽ちてしまわないそのわけは、徳の備わったりつばな人間となり、そのりつばさが世にたたえられるようになる点である」（二二一条）など、徳行に関する内容も含まれ、草庵による教育実践が門下生だけに留まらず、地域領民に広く浸透していったさまを門下生の木築秀次などが後に語っている。

また、草庵の建学の理念は「青谿書院記」に示されている。「青谿の景勝を真に永遠ならしめたるためには、自らが古人に恥じないところの百世の師とならねばならぬ」との自戒が込められた内容である。明治一一年、草庵が六六歳で逝去すると、門弟を代表して斉藤哲太郎や池口右衛門らが「青谿書院記碑」の建立を企てた。草庵が作った「青谿書院記」を碑銘とするため、書を依頼した人物は豊後の私塾咸宜園出身の長三洲（豊後国日田の人）であった。三洲は、維新後に文部官僚となつて、「学制」創設の中心的役割を果たした人物である。漢学者や書家としても著名であったが、草庵と直接交流した記録はこれまで知られていない。幕末には長州藩に属して奇兵隊に参加していたこともあり、草庵門下の北垣国道や原六郎などと関係のあった可能性もある。あるいは青谿書院出身の久保田讓（旧豊岡藩士）とは文部省創設期からの同僚であり、これらの人物などを通じて依頼されたものと思われる。碑は明治一三年九月に建立された。

青谿書院に係る歴史資料は数多く残されているが、草庵三五歳から三二年間にわたり綴った日記『山窓功課』は、書院の歴史そのものとも言え、塾生たちと過ごした日々が記された貴重な史料の一つである。草庵の著作である『古本大略解』『肄業餘稿』『読易録』などの自筆本八〇冊を含む一三一冊や大橋訥庵や春日潜庵など、多くの学友と交わした書簡などの一五三点は「青谿書院蔵書」として兵庫県指定文化財（美術工芸品）になっている。

## 【青谿書院・池田草庵の門下生】

現在、青谿書院には立誠舎時代のものも含めて「門人簿」が残されているが、名簿上では立誠舎は六二名、青谿書院には六一名の記録がある。草庵に師事した門人は但馬地方を中心に全国に広がっていたが、その多くは地元農家の青少年であった。幕末には、志士として活躍したのも多く、維新後は政治家や教育者、実業家など多岐にわたり多くの人材を世に送り出している。

### ◆北垣国道（一八三六～一九一六）

京都府知事。男爵。養父市能座に生まれ、七歳で青谿書院に入門した。二七歳の時、「生野の変」（生野義挙）では草庵の反対をおしきって、門人の原六郎・西村哲二郎とともに参加した。その後、長州藩に逃げて、倒幕軍に加わって活躍した。坂本龍馬や勝海舟などと交流があった。明治元（一八六八）年に鳥取藩士となった後、同一四年京都府知事に就任した。業績としては、同二三年に完成を見た「琵琶湖疏水」である。同二五年には北海道庁長官に転じた。

### ◆原六郎（一八四二～一九三三）

日本金融界の基礎を築いた銀行家。朝来市佐囊佐中の生まれ。青谿書院では九年間学び、二一歳で退塾して「生野の変」に参加した。挙兵失敗の後も長州藩に属して倒幕を目指した。明治四年に鳥取藩士になると、藩を代表して米国へ派遣。その後も自費で留まってエール大学で勉強したほか、渡英して経済学や社会学を修めた。帰国後は鳥取に第百国立銀行を設立したほか、横浜正金銀行（東京銀行の前身）の再建に貢献した。山陽鉄道会社、播但鉄道会社、北海道鉄道会社、東武鉄道など鉄道事業にも尽力した。

### ◆浜尾新（一八四九～一九二五）

東京大学総長を務めた教育家、文部大臣。子爵。豊岡藩江戸屋敷の生まれ。

一三歳で豊岡藩校の稽古堂で池田草庵に学んだ。明治二年、藩費遊学生に選ばれて上京。同六年にはアメリカに留学。帰国後、東京開成学校の副校長となった。同一〇年には、校長の加藤弘之（出石藩出身）と協力して東京大学の開校に關わり、その後、総長を二度務め、その在任期間は二年四か月に及んだ。また、東宮太夫として昭和天皇の教育係や枢密院議長にも就任した。

◆河本重次郎（一八五九〜一九三八）

日本近代眼科の父、東京大学医学部教授。豊岡の生まれ。豊岡藩の藩校稽古堂で池田草庵に学んだ。ドイツ語を学んだ後、東京帝国大学医学部へと進み、同級生には北里柴三郎がいた。その後、同大医学部外科学教室の助手となり、明治一八年にドイツに留学した後、同大眼科学教室主任教授に任命された。日本の眼科を先進国の水準に近づけ、さらに発展させた。現在も「日本近代眼科の父」と賞賛されている。

草庵の没後、門人たちは「青谿書院」の精神を受け継ぎ、八鹿村に私塾「山陰義塾」を開いた。招聘された初代塾長の北村寛愨や二代目の塾長・斎藤哲太郎も草庵の門弟であるが、そのほか私塾「味道館」を開いた森周一郎や「自成軒」の主宰者・安積理一郎、また「宝林義塾」を主宰した久保田精一など、青谿書院からは近代の教育環境を整備した教育者を多く輩出した。

最後に、本稿を作成するにあたっては、養父市教育委員会より写真画像の提供を受けたほか、池田哲二様・千晶様を始めとする関係者の皆様にご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 米田啓祐『池田草庵先生のことば「肄業餘稿」を読む』（一九八九）
- 八鹿町ふるさとシリーズ第四集『八鹿の文化財』（八鹿町教育委員会一九九一）
- 鈴木正幸・布川清司・藤井讓治『兵庫県の教育史』（思文閣出版一九九四）
- 八鹿町教育委員会編『青谿書院ルネサンス』（八鹿町一九九五）
- 養父市教育委員会編『草庵先生と青谿書院』（養父市教育委員会二〇一一）
- 木南卓一『林良斎・池田草庵の往復書簡』（二〇一一）

米田啓祐『草庵百話 池田草庵「肄業餘稿」より』（二〇一三）

【関連図書】

- 『近世後期儒家集』日本思想大系四七（岩波書店一九七二）
- 木南卓一『池田草庵先生―生涯とその精神―』（池田草庵百年祭実行委員会一九七六）

八鹿町教育研究所編集『草庵先生』（池田草庵百年祭奉賛会一九七七）

池田草庵全集編集委員会『池田草庵先生の著作』（青谿書院保存会一九七七）

西村英一編『池田草庵先生日記、山窓功課』（青谿書院保存会一九七九）

『草庵先生著作集』（青谿書院保存会一九八一）

岡田武彦監修『池田草庵遺墨集』（青谿書院保存会一九八五）

木南卓一『池田草庵研究』（一九八七）

疋田啓祐ほか著『春日潜庵・池田草庵』叢書・日本の思想家四四（明德出版社一九八七）

上田平雄『但馬聖人池田草庵』（但馬文化協会一九九三）

『但馬人物ものがたり』上巻（但馬文化協会一九九八）

『肄業餘稿・但馬聖人・池田草庵』青谿書院開塾一五〇周年記念（青谿書院保存会一九九八）

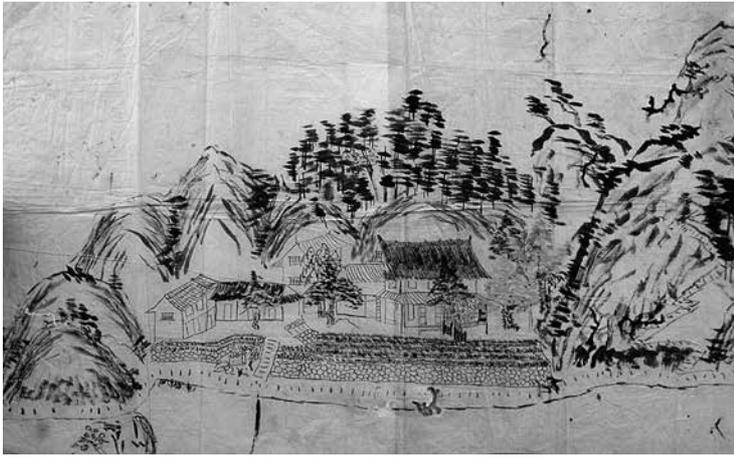
二松学舎大学陽明学研究所『陽明学』第一一号池田草庵特集号（明德出版社一九九九）

望月高明『池田草庵』シリーズ陽明学三〇（明德出版社二〇〇一）

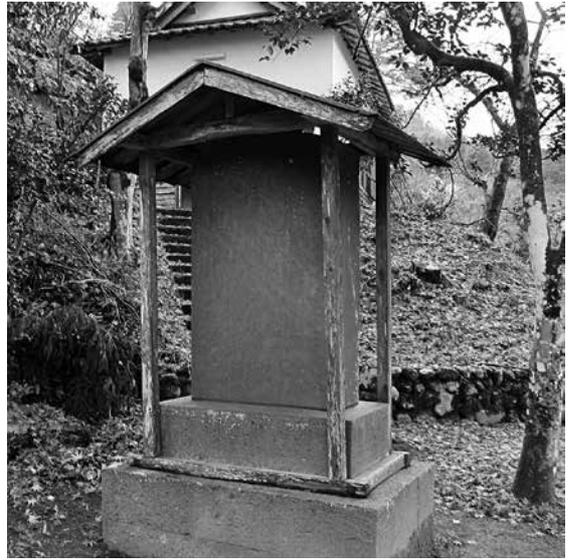
【交通アクセス】

〒667-0003 兵庫県養父市八鹿町宿南一七一 不定休 駐車場有  
電話 079-664-1628（養父市社会教育課）

「青谿書院」見学無料・「養父市立青谿書院記念館」開館10時〜15時 見学無料  
JR八鹿駅から全但バス日和山行き「宿南」下車 徒歩10分



青谿書院（江戸時代）



青谿書院記碑



青谿書院（大正時代）

**青谿書院記**

青谿書院池田誦讀書之處也。誦自弱冠去國而游幕師訪交以爲學。其間或寓於京或棲  
 遷於京西松尾之山中。既而又移於京年已過壯乃復負笈歸其歸也然所居止因借八底西  
 邦氏之山館者四五年而築此院弘化丁未六月實始徙焉。然後春終島之園泉曰青山川而  
 設又與山對兩山相距僅百餘步皆不甚高而嶺曰源氏所對曰夜氣間有流泉曰青山川而  
 谿之兩山對兩山相距僅百餘步皆不甚高而嶺曰源氏所對曰夜氣間有流泉曰青山川而  
 宛乎如仰仙區乎。諒涉之際矣。逕而過則廬巖巖球于其北進美赤崎之諸山橫于其東而  
 夏則迎其涼風秋而黃葉爛漫冬而冰雪皎潔春則朝露含雲吐烟閣落之花歲暮夕陽而先  
 滿潔清迥而又寒廓幽遠矣。而庭際雜植松竹櫻梅桃李海棠之類。不窮。暮馬夕陽而先  
 亦足以娛目怡心焉。而山禽溪響與吾讀書之聲日夕相應。不絕。山還者此佳客否。則非游  
 山之難得而佳客之誠不易也。昔者嚴子陵隱於富春而釣臺儼然不朽。龐德公栖於鹿門  
 而鶴迹至今猶存。乃今加此青谿之勝亦所謂自有宇宙以來已有之者而託迹於此以占其  
 形勝者實自吾始。向吾之不悅古人則涼風餘韻亦自歷久不絕。而青谿之勝必當與夫先世  
 高蹈之逸蹤千古相輝映以信其真致矣。不然則境不負其人而人負其境。乃我之有今日亦  
 足以爲山靈之汗辱矣。夫奉身入山者固無意於當世矣。然而不能無意於百世之後者亦有  
 志者之或可不廢也。歟。安政丁巳夏夏頌日記  
 從五位長安書

青谿書院記  
池田草庵作、長三洲（英）書



青谿書院（昭和 30（1995）年）



青谿書院（平成 26（2014）年）



池田家墓所  
（左から三番目が草庵、その右は妻の久子）

## I . 教育普及事業

### 1. 展示事業

#### (1) 常設展

会 期：平成29年 4月 1日（土）～

平成30年 2月6日（火）

内 容：廣瀬淡窓と咸宜園をテーマに日田市が所蔵する咸宜園関係史料を中心に展示した。

協 力：公益財団法人廣瀬資料館

#### (2) 企画展：咸宜園開塾200年記念事業

##### 「咸宜園門下生遺墨展」

会 期：平成29年 9月3日（日）～ 9月17日（日）

内 容：近世日本最大規模の私塾である咸宜園は、平成29年（2017）に開塾から200年を迎えた。日田市では開塾200年記念事業の一環として、これまで平野五岳や長三洲の遺墨集の刊行や展示会を開催して、日田の先人・先哲の普及啓発に取り組んでいる「日田先哲研究会」と共催で企画展を行った。

今回の企画展では、日田先哲研究会の会員が所蔵している咸宜園関係者の書幅や個人が所有しているもの、これまであまり公開されていなかったものを中心に展示を行った。また日田先哲研究会より『咸宜園門下生遺墨撰集』が刊行された。

会 場：日田市民文化会館（パトリア日田）ギャラリー

協 力：公益財団法人廣瀬資料館、廣瀬貞雄、伊藤恵之助、松永敦海、中島三夫、諫元幹夫、青柳吉宣、畑 秀樹、平野法好、山下潤一、高瀬重光、竹井信行、矢幡英明（順不同・敬称略）

主な展：廣瀬淡窓肖像画（日田市蔵 複製品）

示品 廣瀬淡窓書「桂林莊雜詠示諸生 四首のうち二首（休道之詩）」（個人蔵）

廣瀬淡窓書「彦山」（個人蔵）

廣瀬旭莊書「三行詩書」（個人蔵）

廣瀬旭莊書「一行双幅」（個人蔵）

廣瀬旭莊書「山水画賛」（個人蔵）

廣瀬青邨書「伊藤氏雅囑」（個人蔵）

廣瀬青邨書「三行詩書」（個人蔵）

廣瀬林外書「三行詩書」（個人蔵）

廣瀬林外書「五行詩書」（個人蔵）

園田鷹城書「船中值両詩書」（個人蔵）

村上姑南書画「水墨山水図」（個人蔵）

廣瀬濠田書「雨中下浴水川有作」（個人蔵）

諫山菽邨書画「梅花図」（個人蔵）

長 三洲書画「孟宗竹画賛」（個人蔵）

平野五岳書画「熊本城下画賛」（専念寺蔵）

千原夕田書画「太湖石枯木図」（個人蔵）

森 静古書画「桂菊図」（個人蔵）

杜 菱湖書画「淡彩花卉図」（個人蔵）

長 梅外書「三行詩書」（個人蔵）

長 古雪書画「野菊蘭図」（個人蔵）

手島二溪書画「淡彩花鳥図」（個人蔵）

帆足杏雨書画「青緑山水」（個人蔵）

吉嗣拝山書画「淡彩山水」（個人蔵）

清浦奎吾書「二行書」（個人蔵）

柴 秋邨書「四行詩書」（個人蔵）

劉 冷窓書「二行書」（個人蔵）

井上昆江書「六行書」（個人蔵）

高木豊水書画「放牛の図」（個人蔵）

藤井藍田書画「鍾馗図」（個人蔵）

秋月橋門書「四行詩書」（個人蔵）

西 秋谷書「六行書」（個人蔵）

秋月新太郎書「二行書」（個人蔵）

赤松連城書「二行書」（個人蔵）

劉 石秋書「三行詩書」（個人蔵）

小栗栖香頂書「三行詩書」（個人蔵）

堤 静斎書「三行詩書」（個人蔵）

小栗布学書「堪忍袋画賛」（個人蔵）

羽倉簡堂書「二行書」（個人蔵）

横田国臣書「二行書」（個人蔵）

楠本石水書「二行書」（個人蔵）

山田梅村書「四行書」（個人蔵）

松原盤龍書画「達磨大師図」（個人蔵）

雲英兒耀書画「羅漢図」（個人蔵）

谷口藹山書画「水墨山水」（個人蔵）

坪井信良書「消息」（個人蔵）

後藤東庵書「二行詩書」（個人蔵）

緒方拙斎書「三行書」（個人蔵）

中村陸舟書「水墨山水」（個人蔵）

行徳玉江画「玉堂富貴図」（個人蔵）

大賀賢励書「四行詩書」（個人蔵）

井上雲樵書画「太湖石・竹図」（個人蔵）

谷口藍田書「二行書」（個人蔵）

重富繩山書「二行詩書」（個人蔵）

鼎 金城書画「淡彩柳林山水」（個人蔵）

大隈言道書「二行詩書」（個人蔵）

孔 珠溪書「三行詩書」（個人蔵）

他多数

#### (3) 企画展：「咸宜園教育研究センター」新収蔵品展

会 期：平成30年2月10日（土）～ 3月31日（土）

内 容：平成29年度中に寄贈・寄託を受けた資料を中心に展示を行った。

日田市隈町の合原士郎氏（故人）が収集した廣瀬淡窓愛用と伝わる硯や咸宜園に関わる掛軸や漢籍類、また日田市夜明関町の行徳家の所縁の方から行徳家所用の薬箱や廣瀬淡窓の屏風をいただき、いずれも今回の展示で初公開した。

## 2. 講座・講演会・イベント等

### ■講座

①咸宜園教育研究センター公開講座（年8回）参加者数 延べ319名

講座	開催日	事業名など	場所	参加者
第1回	平成29年 6月20日（火）	「新たな日本遺産の認定について」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 スタジオ1	47名
第2回	6月27日（火）	「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、心一」 高岡市市長政策部文化創造課 流森 清悌 氏	パトリア日田 スタジオ1	34名
第3回	7月 4日（火）	「世界遺産のはなし①」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 スタジオ1	36名
第4回	7月16日（日）	公開シンポジウム「日本遺産と林業観光の振興」 パネリスト 奈良県代表：吉野町参与 田中 敏雄 氏 「森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしとところ～美林連なる造林発祥の地 吉野～」 長野県代表：池田木材社長 池田 聡寿 氏 「木曾路はすべて山の中～山を守り 山に生きる～」 コーディネーター 日田市観光協会 黒木 陽介 氏	パトリア日田 ギャラリー	豪雨災害のため中止
第5回	8月 3日（木）	「“日本最大の海賊”の本拠地」 今治市村上水軍博物館 学芸員 田中 謙 氏	パトリア日田 スタジオ1	39名
第6回	8月24日（木）	「四国遍路」 愛媛県教育委員会文化財保護課主幹 日和佐 宣正 氏	パトリア日田 スタジオ1	45名
第7回	9月28日（木）	「世界遺産のはなし②」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 スタジオ1	48名
第8回	10月 9日（月）	公開シンポジウム「日本遺産の活用について」 パネリスト 別府大学教授 飯沼 賢司 氏 「大分県内の日本遺産の取組みについて」 中津市教育委員会文化財室長 高崎 章子 氏 「やばけい遊覧～大地に描いた山水絵巻の道をゆく～」 コーディネーター 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 ギャラリー	70名

「日本遺産子どもガイド」



②咸宜園平成門下生講座 対象：咸宜園平成門下生之会（現在、会員数約 200 名）参加者数 延べ 432 名

講座	開催日	事業名など	場所	参加者
第 1 回	平成 29 年 6 月 20 日（火）	「新たな日本遺産の認定について」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 スタジオ 1	47 名
第 2 回	6 月 27 日（火）	「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、 心一」 高岡市市長政策部文化創造課 流森 清悌 氏	パトリア日田 スタジオ 1	34 名
第 3 回	7 月 4 日（火）	「世界遺産のはなし①」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 スタジオ 1	36 名
第 4 回	7 月 16 日（日）	公開シンポジウム「日本遺産と林業観光の振興」 パネリスト 奈良県代表：吉野町参与 田中 敏雄 氏 「森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしとところ～美林連 なる造林発祥の地 吉野～」 長野県代表：池田木材社長 池田 聡寿 氏 「木曾路はすべて山の中～山を守り 山に生きる～」 コーディネーター 日田市観光協会 黒木 陽介 氏	パトリア日田 ギャラリー	豪雨災害の ため中止
第 5 回	8 月 3 日（木）	「“日本最大の海賊”の本拠地」 今治市村上水軍博物館 学芸員 田中 謙 氏	パトリア日田 スタジオ 1	39 名
第 6 回	8 月 24 日（木）	「四国遍路」 愛媛県教育委員会文化財保護課主幹 日和佐 宣正 氏	パトリア日田 スタジオ 1	45 名
第 7 回	9 月 28 日（木）	「世界遺産のはなし②」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 スタジオ 1	48 名
第 8 回	10 月 9 日（月）	公開シンポジウム「日本遺産の活用について」 パネリスト 別府大学教授 飯沼 賢司 氏 「大分県内の日本遺産の取組みについて」 中津市教育委員会文化財室長 高崎 章子 氏 「やばけい遊覧～大地に描いた山水絵巻の道をゆく～」 コーディネーター 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊 氏	パトリア日田 ギャラリー	70 名
第 9 回	10 月 13 日（金）	日田市世界遺産登録推進講演会 演題 「世界遺産の現状」 講師 文化庁文化財部記念物課世界遺産室文化財調査官 鈴木 地平 氏	パトリア日田 小ホール	90 名
第 10 回	12 月 10 日（日）	大分県立図書館・大分県立先哲史料館・咸宜園教育研究 センター連携講座 「私塾としての咸宜園と松下村塾」市民参加	バス研修 （大分市）	23 名

その他

咸宜園平成門下生之会会員による「咸宜園交流事業サポーター」協力事業（登録者：27 名）

- ・ 5 月 24 日 「日田川開き観光祭」どんたくカーニバルへのパレード参加
- ・ 7 月 25 日 山鹿市主催「立志の道を歩こう」（日田市協力）事業への協力
- ・ 11 月 12 月及び平成 30 年 3 月 17・18 日 「日本遺産子どもガイド」への協力
- ・ 平成 30 年 2 月 「淡窓先生に学ぶ～学校の取組み～」(「咸宜園の日」記念事業)での展示作業協力

■ 交流・教育普及事業

① 東明館中学 1 年生「咸宜園研修」（新入学生を対象）

◇ 期 日：平成 29 年 4 月 14 日（金）41 名

② 第 17 回「立志の道を歩こう」

（熊本県山鹿市が主催する日田市との交流事業）

◇ 内 容：山鹿市（旧鹿本町）の小学生が地元出身の咸宜園門下生清浦奎吾（元内閣総理大臣）の歩いた道のりを辿る取組み

◇ 日 時：平成 29 年 7 月 25 日（火）⇒ 豪雨災害のため中止

午前 11 時～午後 1 時

※平成 29 年 8 月 18 日（金）には、参加予定であった山鹿市内の小学 6 年生児童代表と山鹿市教育委員会・清浦奎吾顕彰会の方が日田市を来訪し、千羽鶴・寄せ書き・義援金をいただいた。

③ 「咸宜園入門ぼっくす」移動教室

日田市内の小中学校や地域からの要望を受け、研修室の入門ぼっくすを貸し出し、廣瀬淡窓や咸宜園について興味関心を持ってもらうきっかけとした。

3. 刊行事業

(1) 咸宜園教育研究センター研究紀要第 7 号－咸宜園開塾 200 年記念号－

◇ 研究紀要

咸宜園開塾 200 年記念事業記念講演会講演録  
偉大なる教師－広瀬淡窓と吉田松陰 海原 徹

平成 28 年度咸宜園教育顕彰事業（教育文化部門）  
優秀賞 咸宜園関連書の点訳及び点訳書の寄贈 たんぼぼの会

咸宜園開塾 200 年記念事業の開催にあたって  
－これまでの顕彰事業の歩み－ 吉田 博 嗣

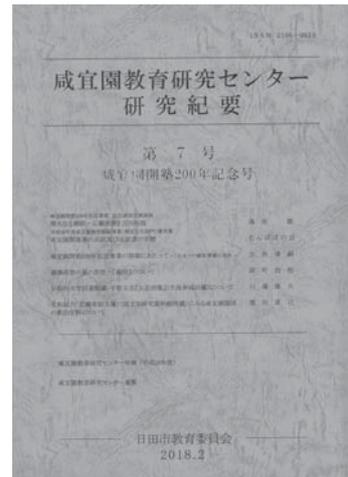
廣瀬淡窓の易の思想－『義府』について 深 町 浩一郎

早稲田大学図書館蔵・平野五岳『五岳詩集』  
（市島春城旧蔵）について 川 邊 雄 大

史料紹介「広瀬青邨文庫」（国文学研究資料館所蔵）  
にみる咸宜園関係の新出史料について 溝 田 直 己

◇ 咸宜園教育研究センター年報（平成 28 年度）

◇ 咸宜園教育研究センター要覧



(2) 廣瀬淡窓日記 続編一 弘化三年～嘉永二年

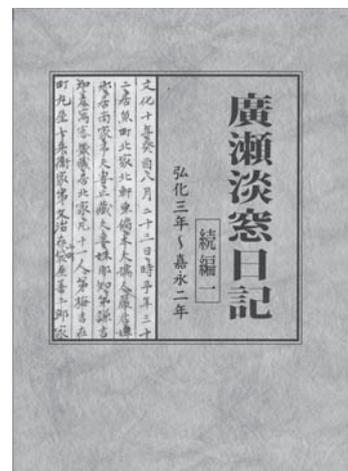
故井上源吾氏（長崎大学名誉教授）が訳注・出版をされていた『廣瀬淡窓日記』の続編として企画したもの。

廣瀬淡窓の「淡窓日記」を市民団体と協働で翻刻作業を行っており、平成 24 年度からの継続事業。今回は、続編一として弘化三年（1846）から嘉永二年（1849）までの 4 年間の範囲を収録した。

日 記 訳：漢文日記を読む会（代表：野田高巳氏）

編 集：咸宜園教育研究センター

発 行：日田市教育委員会



#### 4. ふれあい宅配講座（講師派遣実績）

日付	内容	申込団体	人数
平成29年 5月25日	「淡窓先生と咸宜園」	日隈公民館	20人
〃 6月21日	「咸宜園と村上姑南に関するもの」	姑南顕彰会	50人
〃 8月8日	「咸宜園が学校教育に伝えること」	日田市教育委員会	20人
〃 8月19日	「日本遺産シンポジウム」	大分県教育庁文化課	30人
〃 11月18日	咸宜園の教育について	大分県芸術文化スポーツ振興財団	25人
〃 11月28日	「人権・同和問題秋期講座」	八女地区企業内 同和問題研修推進協議会	20人
〃 12月14日	「廣瀬淡窓と咸宜園」	咸宜公民館	30人
平成30年 1月26日	先哲学習（廣瀬淡窓）	日田市立南部中学校	60人
〃 2月1日	廣瀬淡窓（咸宜園教育について）	筑紫女学園大学	20人
〃 3月16日	咸宜園教育センター 情報検索システムについて	関西大学	20人

※計10回 295名

#### 5. その他の取り組み

##### ・第21回 平成淡窓祭

淡窓先生の遺徳をしのぶ平成淡窓祭が第21回目を迎えた。主催の淡窓会は廣瀬淡窓を顕彰するため、昭和27年にその前身となる組織を発足。11月1日は淡窓先生の命日。

日時：平成29年11月1日（水）午前10時～正午

会場：史跡咸宜園跡（秋風庵にて）

講話：「老子の思想について」 深町 浩一郎（咸宜園教育研究センター研究員）

主催：淡窓会



平成淡窓祭(平成29年11月1日 秋風庵)

## Ⅱ．調査研究事業

### 調査研究について

咸宜園教育研究センターでは、咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集を行っている。以下にその概要を報告する。

#### (1) 廣瀬淡窓著述史料に基づく調査研究

故井上源吾氏（長崎大学名誉教授）が訳注・出版をされていた『廣瀬淡窓日記』の続編として企画したもの。

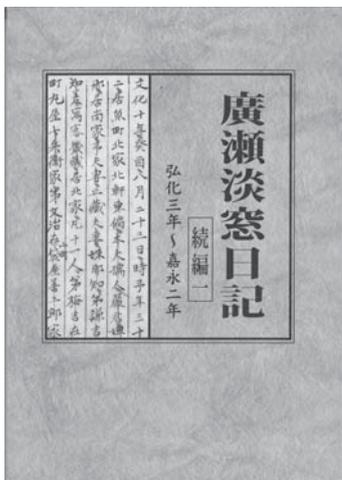
廣瀬淡窓の「淡窓日記」を市民団体と協働で翻刻作業を行っており、平成24年度からの継続事業。今回は、続編一として、弘化三年（1846）から嘉永二年（1849）までの4年間の範囲を収録した。

委託団体：漢文日記を読む会（代表：野田高巳氏）

担当職員：高村智恵美・深町浩一郎

編集：咸宜園教育研究センター

発行：日田市教育委員会



#### (2) 歴代塾主・門下生に関する情報の収集

##### 1. 資料調査（一部、研究会活動も含む）

場所：東京都千代田区（二松學舎大學）

東京都立川市（国文学研究資料館）

期日：平成29年6月3日（土）～6日（火）

調査者：溝田直己

内容：6月・12月の第一土曜日に東京において開催されている淡窓研究会の6月例会に出席し、日田市の近況及び咸宜園教育研究センターや世界遺産推進室の調査・研究の進捗状況等について報告した。

また継続調査をしている「廣瀬青郵文庫」の調査のため、国文学研究資料館を訪問。調査では、国文学研究資料館が所蔵する「廣瀬青郵文庫」の史料のうち、下記のとおり撮影を行った。

- ・「九桂草堂隨筆」
- ・「和肅堂詩鈔」
- ・「和肅堂日曆」
- ・「和肅堂詩稿第三編」

- ・「峡中雜詠」
- ・〔詩稿〕
- ・「和肅堂遺稿」
- ・「六橋記聞」
- ・「刑罰権ハ公益ト徳義トニ起因ス」
- ・「国権党大会手記」
- ・「和文集」
- ・「断簡」
- ・「古文尚書正文」
- ・「詩経古註」
- ・「詩経国風」
- ・「国語写本」

##### 2. 現地調査

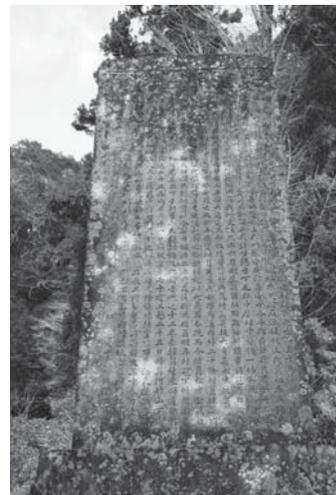
中津市出身の門下生 村上姑南

場所：中津市山国町（明円寺ほか）

期日：平成29年6月10日（土）

調査者：吉田博嗣

内容：村上姑南は豊前国下毛郡中摩村出身（現在の中津市山国町）で医者・教育者として活躍した咸宜園出身の門下生である。咸宜園には天保5（1834）年、17歳の時に「村上虎来」の名で入門した。淡窓の日記では、後に改名した「慎次」の名前でも登場する。咸宜園退塾後は筑後や筑前秋月などで医学修業をおこなったほか、佐賀藩では種痘術を修めている。郷里では医業の傍らで、私塾「養翼園」を開業し、子弟の教育をおこなっている。また、明治13年から同15年までの間は咸宜園の第7代塾主を務めた。今回は、毎年6月に「村上姑南顕彰会」によって姑南の年忌法要が行われる菩提寺「明円寺」を訪問し、関連史跡の有無や情報収集を行うとともに、姑南の居宅跡や墓所、顕彰碑（写真）などを現地で確認した。なお、明円寺も咸宜園門下生を輩出した浄土真宗寺院の一つである。



### 3. 現地調査（旭荘日記に関する調査）

場 所：金沢市（石川県立歴史博物館）・石川県輪島市（輪島市黒島地区伝統的建造物群保存地区・総持寺祖院・輪島塗会館）、富山県高岡市（高岡市立博物館・瑞龍寺・加賀藩主前田家墓所・勝興寺）・氷見市（氷見市立博物館・光西寺）

期 日：平成 29 年 10 月 25 日（水）～ 28 日（土）

調査者：吉田博嗣

内 容：廣瀬淡窓の末弟で、咸宜園塾主を務めた廣瀬旭荘は天保 4（1833）年から文久 3（1863）年までの日記『日間瑣事備忘』を後世に残している。内容は身の雑事に始まり、交友関係や門弟の動静、社会情勢と多岐にわたる。中でも、全国を旅した記録は詳細で、各地の風土や旧跡、景観に至るまで、地方の当時を物語る貴重な資料となっている。平成 24 年度から継続した調査を行っているが、今回は万延元（1860）年に旅した北陸地方の一部を対象とした。



輪島市黒島地区伝統的建造物群保存地区



総持寺祖院 表門（輪島市）



総持寺法堂（大祖堂）（輪島市）



重要文化財 勝興寺唐門（高岡市）



国宝 瑞龍寺回廊（高岡市）

### 4. 資料調査

場 所：千葉県松戸市（門下生子孫宅）

東京都立川市（国文学研究資料館）

期 日：平成 29 年 12 月 2 日（土）～ 5 日（火）

調査者：溝田直己

内 容：咸宜園第四代塾主である廣瀬林外期の咸宜園門下生である芳川笛邨の子孫が所蔵している資料の寄託受入のための調査及び国文学研究資料館所蔵の「広瀬青邨文庫」の史料撮影を行った。

芳川笛邨は、大和国笛堂村（現奈良県葛城市笛堂）の出身で咸宜園で学び、平野五岳や帆足杏雨と交流した。その後は長崎に赴き、鉄翁祖門に師事し、南宗画家として活躍した人物である。芳川笛邨に関わる資料が子孫宅に伝わっており、日田市に寄託いただけたことから、資料受入のために現地調査を行い、梱包及び日田市へ輸送を行った。

また国文学研究資料館では、引き続き「広瀬青邨文庫」の写真撮影を行った。今回の調査では下記の資料の撮影を行った。

- ・「月化文草」
- ・「箒木」
- ・「自新録・再新録」
- ・「遠思楼詩鈔」
- ・「遠思楼文集」
- ・「咸宜園蔵書目録」
- ・「咸宜園蔵書目録旭荘蔵書目録」
- ・「旭荘蔵書目録」

- ・「旭荘先生書籍目録」
- ・「旭荘所蔵書画目録」
- ・「青邨蔵書目録」
- ・「和肅堂蔵書目録」
- ・「和漢書備録」
- ・「東宜園蔵書目録」
- ・「平山楼蔵書目録」
- ・「〔読書目録〕」
- ・「五月三十日横井忠直氏方へ貸渡シ書籍目録」
- ・「荅陽先生細楷李太白絶句抄」
- ・「川路敬斎公日記」
- ・「献芹微志」
- ・「大原丸尾山敬神頌徳碑文并忠孝碑文」
- ・「針灸諸病治例」

## 5. 資料調査

場 所：東京都立川市（国文学研究資料館）

東京都千代田区（国会図書館・国立公文書館）

埼玉県和光市（租税大学校）

期 日：平成 30 年 3 月 12 日（月）～ 15 日（木）

調査者：溝田直己

内 容：平成 25 年にセンターに寄託された廣瀬敬四郎の調査のため、租税史料室を調査した。租税大学校和光校舎の税務情報センターにある租税史料室では、税に関する貴重な史料を収集・保存・展示を行っている。廣瀬敬四郎は、咸宜園・慶應義塾で学んだのち、埼玉県・群馬県に奉職した。その後、大蔵省に務め、租税局に出向して、近代日本の始まりの頃に徴税業務に携わり、のちには各地で収税長を務めたことがわかっている。

収蔵資料のデータベースでは、直接関係するものを確認することができなかったものの、研究員の方より「初代收税長の履歴について」という論考の中に廣瀬敬四郎が収税長の一人として紹介されていることをご教示いただいた。

また国文学研究資料館では、引き続き「廣瀬青邨文庫」の写真撮影を行った。今回の調査では下記の資料の撮影を行った。

- ・「迂言」
- ・「周会魁校正官板名儒四書大全」
- ・「四書集註（林家正本）」
- ・「廿二史纂畧」
- ・「詠詩大概聞書」
- ・「読書矩」
- ・「名家詩文」
- ・「名家雑著」
- ・「十七士丹忠編（水府浪士三月三日事畢り御届に罷出候節差出候書付）」
- ・「〔五事略抜粹〕」

国会図書館では、平成 30 年度企画展の準備のため、近代に活躍した咸宜園門下生に関する資料や図書の閲覧・複写を行った。国立公文書館では咸宜園関係の資料の調査を行い、下記の資料の撮影を行った。

- ・「咸宜園図」
- ・「古今雑鈔」（宜園抄本）
- ・「老子正文」
- ・「公文録」（内務省之部）
- ・「高青邱詩鈔」

## 6. 資料調査

場 所：東京都千代田区（国会図書館・国立公文書館）  
大阪府大阪市（大阪市立中央図書館）

期 日：平成 30 年 3 月 26 日（月）～ 29 日（木）

調査者：溝田直己

内 容：咸宜園第二代塾主を務め、のちに大坂に生活の拠点を置き、漢学塾を開いた廣瀬旭荘の調査のため、大阪府大阪市立中央図書館において調査を行った。

大阪市立中央図書館には、大阪コーナーが設置されており、江戸期の大阪に関する調査を行う上でも図書や資料が充実しており、廣瀬旭荘に関わる資料や図書の閲覧をし、下記の図書の複写を行った。

- ・北脇洋子『幕末泉州のサロンー里井浮丘と京坂文化人ー』（展望社、2016 年）
- ・松本順司『原老柳の生涯ー幕末大坂の名医』（創元社、2002 年）
- ・第 3 回郷土先賢史蹟顕彰「廣瀬旭荘顕彰講座 - 廣瀬旭荘の講學と尊皇思想」『大阪の先賢と史蹟』（大阪府文化課、1944 年）

国会図書館においては、近代最初の児童福祉施設とも言われ、その設立に多くの咸宜園関係者が関わった「日田養育館」に関する論考などを中心に下記の資料の複写を行った。

- ・古長敏明『大分県酪農史』（大分県農業振興運動会、1966 年）
- ・高橋梵仙「日田県知事松方正義の養育館」『大東文化大学紀要』（経済学部第 5 号 1966 年）
- ・川島真人「村上姑南と種痘」『日本醫事新報』No. 3835（日本醫事新報社、1997 年）
- ・「廣瀬四先生追遠會」『斯文』（斯文、1934 年）

国立公文書館では、平成 30 年度企画展の準備のため、下記の資料の撮影を行った。

- ・「公文録」
- ・「学制沿革考」
- ・「學制一覽」

### (3) 教育史・教育遺産に関する調査

#### 1. 教育史調査

場 所：京都府京都市（京都市学校歴史博物館・京都府立京都学 歴彩館）

期 日：平成30年3月26日（月）～28日（水）

調査者：深町浩一郎

内 容：京都府は明治2年に全国で初めての小学校「番組小学校」を開設し、翌3年には東京都について全国二番目の中学校を開設した。この京都府の先駆的な教育制度の創設時期に、京都府の行政の内部には咸宜園門下生である京都府大参事として松田道之、及び京都府典事・督学として廣瀬青邨が在職していることから、これらの教育改革の内容に咸宜園教育の影響があったのではないかと推察して調査を行った。当時の行政文書「京都府史・政治部学政類」「小学校一件」や、教育史関係資料「京都小学三十年史」「京都府教育史上」などを閲覧した結果、とくに廣瀬青邨が京都府の教育制度の整備に中心的な役割りを果たしていたと思われる記載が数ヶ所にわたり見られた。



国史跡「旧致道館」講堂



日本遺産「風間家住宅表門」

#### 2. 教育遺産調査（日本遺産の現地視察を含む）

場 所：山形県鶴岡市（日本遺産の構成文化財―旧致道館・風間家住宅表門・旧風間家住宅丙申堂・旧渋谷家住宅・旧西田川郡役所ほか）

期 日：平成30年3月26日（月）～29日（木）

調査者：吉田博嗣

内 容：国内の教育遺産の調査については、当センターの職員により継続して実施しているが、今回は国の史跡で、かつ日本遺産にも認定されている藩校「致道館」を実査した。致道館は、庄内藩主第9代の酒井忠徳が武士を律するためには教育が必要であるとして、文化二（1805）年に学問所を創設したのが始まりで、同13年に第十代藩主の忠器が現在地に致道館を建設した。門弟の学力に応じた少人数制による個別的な指導を実践するため、小規模な教場を多く必要としたとされる。現存するのは、表御門・廟門・聖廟・御入り間・講堂・西御門・東御門・養老堂である



日本遺産「旧渋谷家住宅」

#### (4) その他の関連調査

##### 1. 現地調査

場 所：広島県広島市（頼山陽史跡資料館、頼家之墓）

期 日：平成29年9月5日（火）

調査者：吉田博嗣

内 容：廣瀬淡窓や咸宜園歴代塾主などが葬られた長生園（国史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」の一部）との比較研究の視点から「頼家之墓」（広島県指定史跡）の現地調査をおこなった。墓所は、広島市南区の多聞院境内に在する。頼家は安芸国竹原の出身で商家を営む家柄であったが、江戸時代後期には春水や春風、杏坪などの文人を多く輩出した。また淡窓や咸宜園関係者と交流の深かった頼山陽は春水の子である。後に広島藩儒となった春水が、広島に居を移したことで頼一族の墓所も広島につくられた。墓所には春水と室の梅颯のほか、杏坪や聿庵、誠軒、古樸など現在までに一族の墓、およそ30基が現存する。中でも、春水や聿庵など一部の墓が採用する墓碑背後の円錐状の構築物は特徴的である。



国史跡「旧致道館」表御門



広島県史跡「頼家之墓」(内、頼串庵墓)

(5) 研究会活動

1. 漢学者記念館会議

場 所：東京都（二松學舎大学）

期 日：平成 29 年 7 月 29 日（土）

発表者：吉田博嗣

内 容：二松學舎創立 140 周年記念事業として開催された初めての取組みで、内容は以下のとおりである。

第一部：講演会（10:00～11:55）

- ◆基調講演「書院と私塾の発展—中国・韓国・日本」関西大学 教授 吾妻 重二 氏
- 講演Ⅰ「成島柳北の漢学」ブランダイス大学 准教授 マシュー・フレリー
- 講演Ⅱ「地理学者志賀重昂の漢詩—テキサス州のアラム遺跡に立つ 漢文「記念碑」に触れて考えたこと」

早稲田大学 教授 稲畑 耕一郎 氏

第二部：「漢学者記念館の現状と課題」（10:00～11:55）「SRF 事業による漢学塾関連資料調査の報告」SRF 研究代表者 町泉寿郎、研究助手 平崎真右

- ◆各記念館からの報告  
安積良斎記念館、蘆東山記念館、興讓館、広瀬淡窓・咸宜園教育研究センター、泊園記念会、安井息軒記念館、高粱方谷会
- ◆全体会議

2. 筑紫女学園創立 110 周年・咸宜園開塾 200 年記念特別研究会

場 所：福岡県太宰府市（筑紫女学園大学）

期 日：平成 30 年 2 月 1 日（木）

発表者：深町浩一郎、溝田直己

内 容：筑紫女学園の創立者である水月哲英（1868-1948）は、咸宜園の廣瀬淡窓に学んだ木屋徳令（1803-1892）が郷里である筑後黒木（現福岡県八女市）で開いた私塾・修文館に学んだ。2017 年は咸宜園開塾 200 年、筑紫女学園創立 110 年という節目の年であることから、咸宜園教育が後世にどのような影響をもたらしたのか、咸宜園教育の系譜をたどりながら、水月哲英の人格形成にどのような影響があったのかを理解するきっかけとして、特別研究会が開催された。

筑紫女学園創立110周年・咸宜園開塾200年記念特別研究会

咸宜園教育の系譜とその影響  
-水月哲英(筑紫女学園創立者)の人格形成に関連して-

咸宜園は、広瀬淡窓(1782-1854)の私塾として、現在の太宰府市(旧太宰府)に誕生しました。2017年は、創塾して200年という節目を迎えています。では咸宜園教育は、後世にどのような影響をもたらしたのでしょうか。筑紫女学園の創立者の系譜(1868-1948)を探ると、咸宜園の門下生である本屋徳令(1803-1892)のふとで学んでいることがわかってきます。水月哲英の人格形成にどのような影響があったのかを探るきっかけとして、咸宜園の門下生で筑紫女学園の前身である本屋徳令(1803-1892)・堀江(1818-1888)父子にも焦点を当てます。井上父子と本屋を比較検討することにより、咸宜園教育の影響をより明らかにすることができそうです。筑紫女学園は、2017年に100周年を迎えようとしています。この機会に、改めて創塾した水月哲英の思想の系譜をみなさんと確かめたいと思います。多くのご参加をお待ちしています。

日時：2018年2月1日(木) 13:30-17:00

場所：筑紫女学園大学 8号館2階 8203教室

連絡先(13:30-13:35)

第1報告(13:35-15:05)

「広瀬淡窓とその教育」

深町浩一郎(筑紫女学園大学リサーチ・研究員)

「本屋徳令」

溝田直己(筑紫女学園大学リサーチ・研究員)

第2報告(15:20-15:50)

「井上知恵・堀江」

清水美穂(筑紫女学園大学)

第3報告(15:50-16:35)

「水月哲英」

中西道博(筑紫女学園)

ディスカッション(16:35-17:00)

司会 小林久恵(筑紫女学園大学)

お問い合わせ：研究事務局 (tsukatsuki@chukyo-u.ac.jp)

参加費は無料です。上記の申し込みは不要です。

詳細はホームページをご覧ください。

※主催：筑紫女学園大学人間文化研究所



「好漢」の系譜



水月哲英

3. 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター (KU-ORCAS) 第3回研究集会ユニット2)

場 所：大阪府吹田市（関西大学 以文館）

期 日：平成 30 年 3 月 16 日（金）

発表者：原田弘徳

内 容：関西大学は、2017 年 4 月、東アジア文化研究の一大拠点を目指し、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター (Kansai University Open Research Center for Asian Studies: KU-ORCAS) を設立した。

センターの活動では、関西大学の知的ルーツの一つとなった泊園書院に関する、書物や記録、印章、門人などさまざまな情報のアーカイブ化を進めている。泊園書院は江戸後期から昭和前期まで栄えた漢学塾で、商業都市大阪の繁栄を背景に全国各地から集まり、塾主の藤澤東咳（とうがい）、南岳（なんがく）らは、大阪を拠点に活躍していた廣瀬旭荘とも交流があった。

現在、「泊園門人データベース」の構築に向けて準備を進めている。門人録や成績表、月謝領収簿などの資料、二千名程度の氏名の明らかな門人に関する資料を収集し、WB 上での公開を目指している。

当該データベースの構築に当たり、日田市世界遺産登録検討委員会委員でもある関西大学の吾妻重二教授からの依頼を受け、咸宜園の門下生情報の管理など、先行事例として「咸宜園教育研究センター情報検索システム」に関する発表を行った。

日時：平成 30 年 3 月 16 日（金）

13:00～16:30

会場：関西大学千里山キャンパス 以文館 4 階セミナースペース

13:00～13:40

吾妻重二（関西大学文学部）

「泊園書院のアーカイブ構築に向けて」

13:40～14:20

原田弘徳（日田市咸宜園教育研究センター）  
「咸宜園教育研究センター情報検索システムについて」

14:30～15:10

横山俊一郎（関西大学東西学術研究所）  
「各種帳簿類から読み取る泊園門人データについて」

15:10～15:50

中谷伸生（関西大学文学部）  
「藤澤南岳による題跋と大坂画壇」

15:50～16:30 総括

発表では咸宜園における情報検索システムの紹介と利用上の改善点などを報告した。具体的には、システムの運用上の課題として、キーワードや出身地別といった検索結果のデータ抽出ができないようになっており、泊園書院のデータベース構築のプログラム作成にあたって配慮すべき点として指摘をした。また、発表後の意見交換では、咸宜園教育研究センター情報検索システムはWEB上に一般公開できないのかといった質問があり、セキュリティ上の問題などから現在はセンター内での利用にとどまっている旨を報告した。今後の課題として、泊園書院データベースとの連携の模索などの意見が出された。

横山氏の発表では、咸宜園における「月旦評」にあたる「生員勤惰表」といった成績表など大坂における廣瀬旭莊塾の影響がうかがえる史料の紹介もあった。

中谷氏の発表では、大坂画壇のデータベース構築に向けて藤澤南岳が題跋を行った作品の例の紹介がなされた。発表後、大坂画壇を構成する絵師と廣瀬旭莊との交流などについて意見交換を行った。

今回の発表では、「泊園書院データベース」の構築に向けて、咸宜園教育研究センターの事例紹介を行うことが主な目的であったが、泊園書院・大坂画壇と咸宜園・廣瀬旭莊との交流についても強く意識する機会となった。

## （6）外部研究機関との共同調査

### 1. 福岡大学（高橋昌彦教授）

「平成29年度廣瀬淡窓に関わる史料の所在調査及び確認調査」

委託期間：平成29年10月30日～30年3月31日

担当職員：溝田直己

調査先：福岡県朝倉市、柳川古文書館（福岡県柳川市）国立公文書館、国文学研究資料館、大分県立図書館郷土資料室

調査目的：廣瀬淡窓や咸宜園の歴代塾主、またその門人等に関する書簡や書幅等の史料のうち、日田市が把握していない大学等の調査研究

機関の所蔵資料を当センター専門委員会委員で、近世文学が専門の高橋昌彦教授（福岡大学）に調査を委託した。この調査を通じて、咸宜園教育の調査研究や展示公開に活かし、広く咸宜園のことを周知する基礎とするために行うものである。

調査成果：○これまでの古谷家旧蔵典籍の調査結果をまとめた「古谷家旧蔵典籍目録（仮）」（『福岡大学研究部論集A人文科学編』17-4、平成29年12月）の提供を受けた。

○柳川市からの依頼で「広報やながわ」307（平成30年1月1日）に「『淡窓詩話』と柳川」を執筆・コピーの提供を受けた。

○平成29年11月3日に福岡県朝倉市を調査。咸宜園の門人佐野東庵の墓所・塾跡を巡り、市立図書館で佐野の伝記について調査。合わせて、福岡大学図書館所蔵の佐野の詩集『梅西舎詩鈔』（刊・半紙本2巻2冊）の調査を行った。

○平成30年1月26日に柳川古文書館を調査。所蔵文書の『遠思楼詩鈔』について書誌を採る。中でも貴重と思われるものが、綿貫家文書（E39）に残る巻上1冊のみ残る本で、破損が甚だしいが、淡窓の講義や中野南強の評などの書き入れが見える。この他に森（正）文書（A33・34）本は、初版初刷に近いものかと思われる。裏見返しに「天保八年仲秋贖得小野氏伸」と墨書が見える。

○平成30年2月14日～16日、東京に行き、国立公文書館・国文学研究資料館で調査。14日は国立公文書館で咸宜園関連の著作について5点を調査（国文学研究資料館が休館日だったため）。15・16日は国文学研究資料館で廣瀬青邨文庫の書誌調査を行った。今回の調査で239点中、18点の著作について書誌調査を終えた。

○平成30年3月6日、大分県立図書館郷土資料室で調査。『義府』淡窓自筆草稿を調査。園田鷹巢『不時宜先生遺愛巻』（1冊・大正4年例言・活版）に淡窓批評の「東遊百絶」が所収されている。また、小川弘蔵『漫遊紀行』（1冊・明治14年刊・活版）中にも淡窓評「南遊紀行」が見える。

※上記、調査成果については紙資料やデジタルデータで調査成果の提供を受けた。

### Ⅲ．資料収集事業

#### 1. 寄贈資料

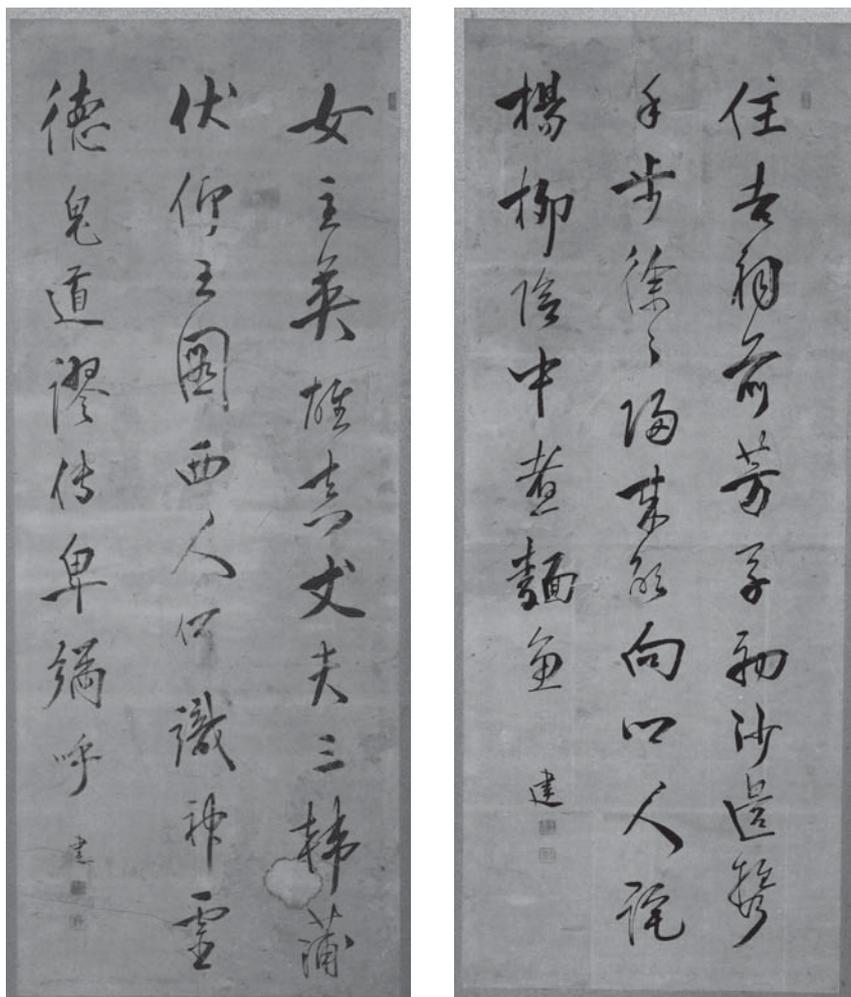
##### ①旧行徳家関係資料

廣瀬淡窓書 七言絶句「御風主人、予を那珂川の上りにおいて觴す、賦して贈る」「史を詠む 四首の内二首目」

(1) 屏風（二曲一隻）/ 紙本墨書

(2) 廣瀬淡窓の漢詩集である『遠思樓詩鈔』第二編上に収録された「御風主人觴予於那珂川上賦贈」と同じく初編上に収録された「詠詩 四首」の二首目である。

※その他、行徳家に伝来した頼杏坪書の扁額と行徳家所用の薬箱についても寄贈いただいた。



廣瀬淡窓書 屏風

(印)

住吉祠前芳草初沙邊携

手徐徐歸來欲向鄉人詫

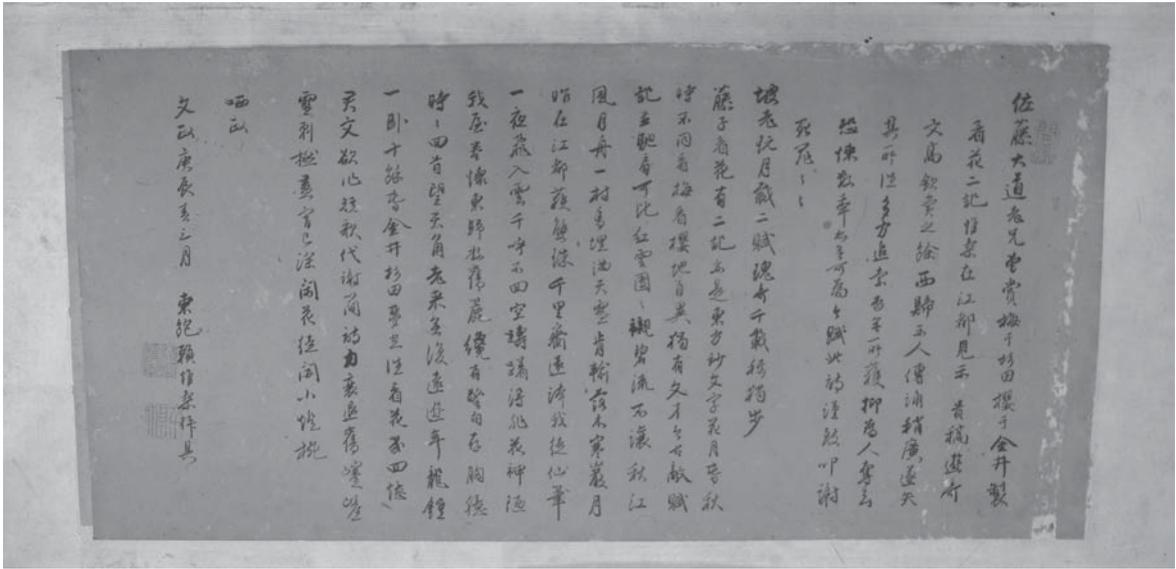
楊柳陰中煮麪魚建 (印) (印)

(印)

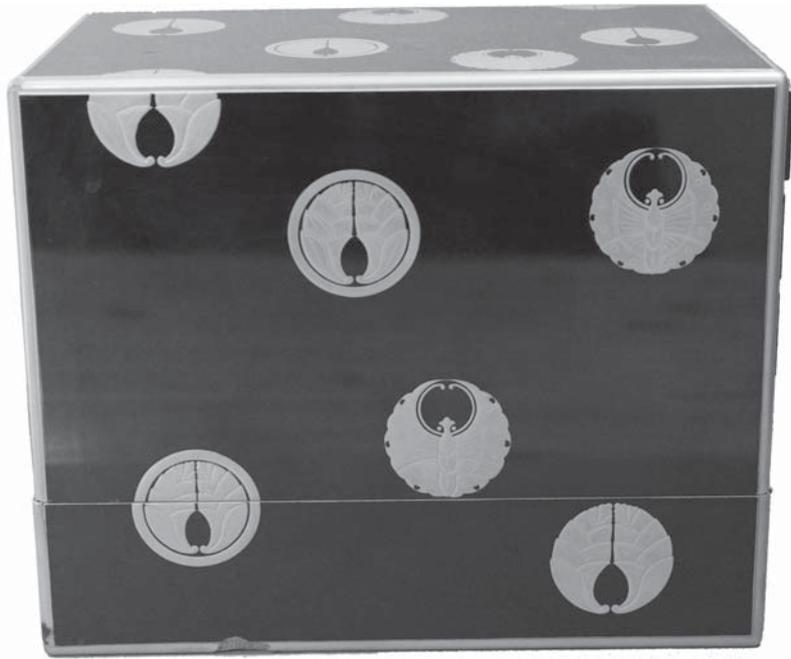
女主英雄真丈夫三韓蒲

伏仰王圖西人何識神靈

徳鬼道謬傳卑彌呼建 (印) (印)



賴杏坪書 扁額



行德家所用藥箱

②廣瀬淡窓書 七言絶句「逸雲畫山水」

(1) 書幅 / 紙本墨書

(2) 『淡窓小品』下巻に収録されている「逸雲畫山水」である。日田市内の個人の方から寄贈いただいたもの。

(印)  
 青山繚繞水平鋪、點々風帆  
 似足泛鼻、憶得往年瓊浦路、  
 玖城東畔望琴湖 建(印)(印)



③合原士郎氏旧蔵資料

廣瀬淡窓書 七言絶句「桂林荘雜詠示諸生 四首のうち二首目」「彦山」

(1) 書幅 / 紙本墨書

(2) 廣瀬淡窓の漢詩集である『遠思楼詩鈔』巻上に収録されている「桂林荘雜詠 四首」の内の二首目（通称 休道之詩）、「彦山」である。「休道之詩」・「彦山」は、漢詩人として著名であった廣瀬淡窓の漢詩の中でも人口に膾炙された漢詩である。

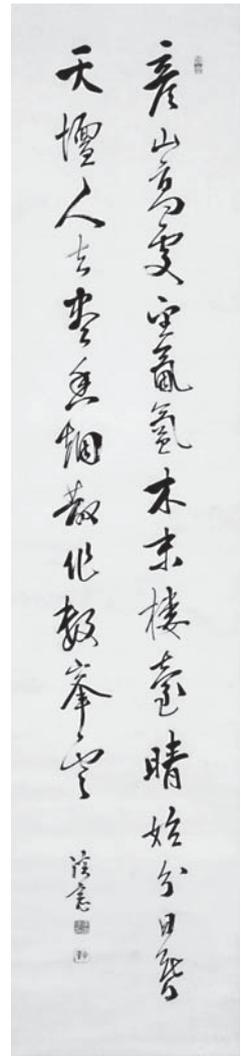
※書幅の他に淡窓の漢詩集である『遠思楼詩鈔』、淡窓愛玩と伝わる硯、廣瀬旭荘著『克己編』（写本）、頼山陽著『日本外史』、『大日本諸國細身國郡全圖』（版元 奈良大仏前「絵図屋庄八」）についても寄贈いただいた。



遠思楼詩鈔



遠思楼詩鈔

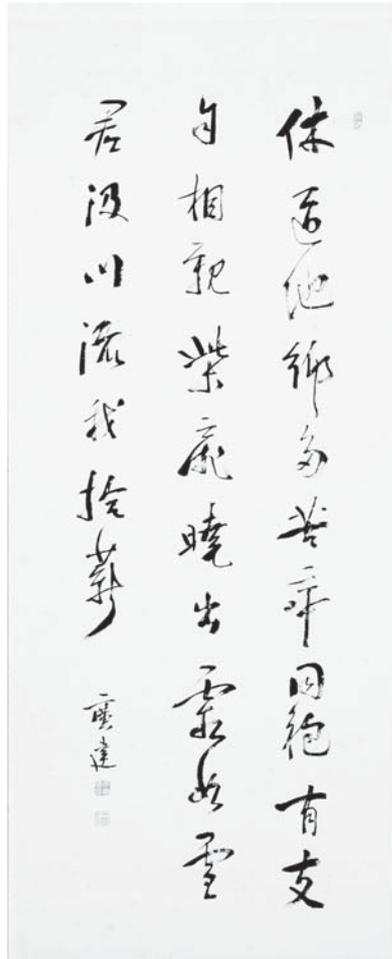


彦山

(印)

彦山高處望氤氳、木末樓臺晴始分、日暮

天壇人去盡、香煙散作數峯雲 淡窓 (印) (印)



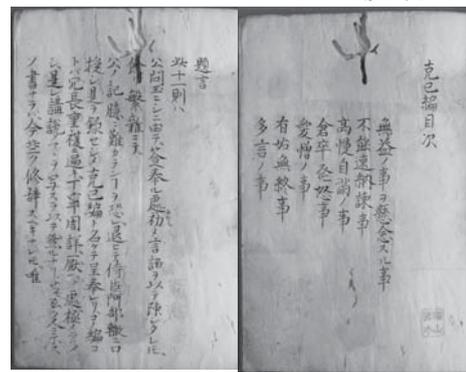
(印)

休道他鄉多苦辛、同袍有友

自相親、柴扉曉出霜如雪、

君汲川流我拾薪 廣建 (印) (印)

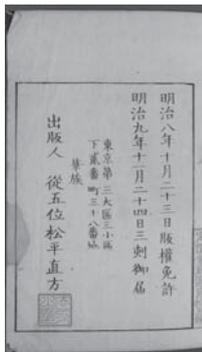
桂林莊雜詠諸生に示す 四首のうち二首目



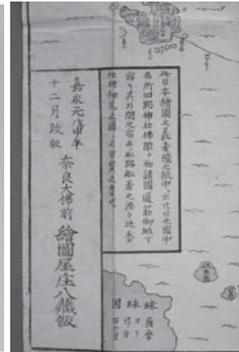
廣瀬旭莊著『克己編』(写本)



伝「淡窓愛玩硯」



校刻日本外史



大日本諸國細身國郡全圖

## 2. 寄託資料

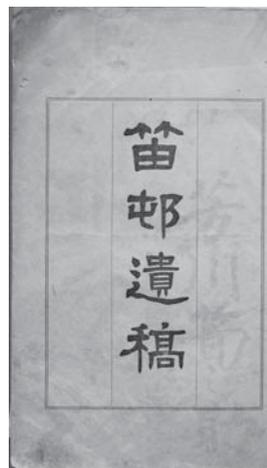
### ① 芳川笛邨関係資料

芳川笛邨は、大和国葛下郡笛堂村（現奈良県葛城市笛堂）の出身で、明治時代に活躍した南画家。元治元年（1864）6月、第四代塾主である廣瀨林外の時に咸宜園に入門。帆足杏雨や平野五岳、鉄翁祖門などと交流を持ち、画を学んだという。また浪華では十時梅厓に私淑し、南画を修めた。

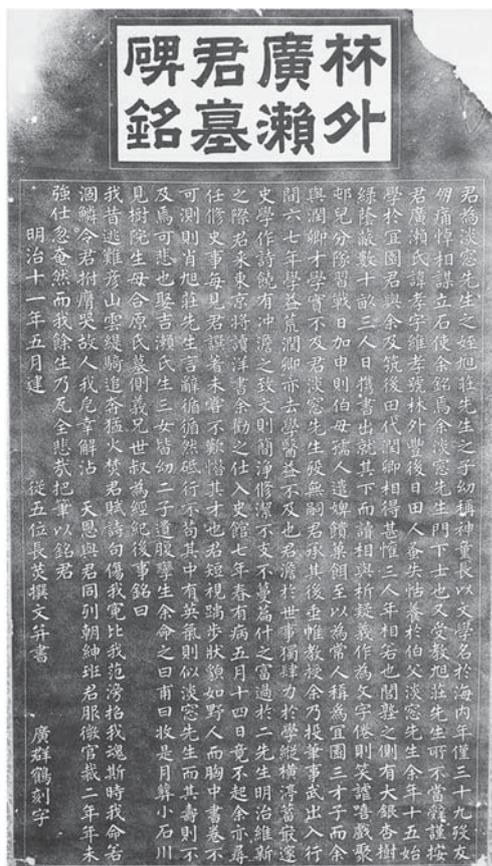
今回、芳川笛邨の子孫の方から笛邨関係資料の寄託を受けた。芳川笛邨の事歴がまとめられた『笛邨遺稿』を始め、笛邨書画の書幅など様々な資料が含まれている。



芳川笛邨肖像写真（『笛邨遺稿』）



『笛邨遺稿』



「林外廣瀨君墓碑銘」（拓本）



その他掛軸類

### 3. 寄贈図書

- 足跡足利学校跡 西側隣接地 発掘調査報告書  
 足利市教育委員会
- 掘りだされた足利の歴史 - 平成 27 年度 足利市  
 埋蔵発掘調査レポート - 足利市教育委員会
- ほとけの王国 大分の仏像 大分市歴史資料館  
 フォトコン 5 月号 香川良海
- 博物館ニュース「SHU」 No. 48 玉川大学教育博物館  
 玉川大学教育博物館 紀要 第 14 号 玉川大学教育博物館  
 実践女子大学香雪記念資料館 館報 第 14 号  
 2016 年度 実践女子大学香雪記念資料館  
 賀茂神社誌 熊懷稜丸  
 読楽 5 月号 徳間書店  
 読楽 6 月号 徳間書店
- 澤井常四郎 『経学者平賀晋民先生』  
 近代日本漢学資料叢書 I 二松學舎大学文部科学省私立大学戦略  
 的研究基盤形成支援事業
- 平賀中南 『春秋集箋』 近代日本漢籍影印叢書 I  
 二松學舎大学文部科学省私立大学戦略  
 的研究基盤形成支援事業
- 第 15 回 全国藩校サミット 金沢大会  
 第 15 回全国藩校サミット金沢大会実  
 行委員会
- 近代日本漢学資料叢書 2 柿村重松『松南雑草』  
 二松學舎大学文部科学省私立大学戦略  
 的研究基盤形成支援事業
- 適塾 No. 50 大阪大学適塾記念センター  
 立誠舎と草庵に学ぶ 養父市教育委員会  
 明延鉱山の一日電車 養父市教育委員会  
 養父市の文化財と産業遺産 養父市教育委員会  
 家礼文献集成 日本編 四 関西大学東西学術研究所  
 天草の崎津集落と今富・大江、長崎海外  
 天草市教育委員会
- 東有田の歴史 東有田公民館  
 開館二十周年記念誌 二十年の彩り 京都市教育委員会  
 京都市学校歴史博物館だより vol.34 京都市教育委員会  
 平野五岳展図録 専念寺  
 咸宜園系譜塾の展開に関する実証的研究 鈴木理恵  
 国指定特別史跡「旧弘道館」保存活用計画書 茨城県  
 筑紫野市歴史博物館 年報 18 (平成 28 年度)  
 筑紫野市歴史博物館
- 史料館研究紀要 第 22 号 大分県立先哲史料館  
 図録近代日本の道德教育 京都市教育委員会  
 玉川大学教育博物館 館報 第 15 号 2016 年度  
 玉川大学教育博物館  
 博物館ニュース「SHU」 No. 49 玉川大学教育博物館  
 草場佩川著 『婆心帖』 活字体版 多久市教育委員会  
 江戸時代の教育から見えてくるもの 藩校・私塾を  
 たずねて 吉井信雄  
 新聞「泊園」—泊園書院資料集成 三一 吾妻重二
- 京都市学校歴史博物館だより vol.32 京都市学校歴史博物館  
 月刊 歴史街道 平成 29 年 9 月号 PHP 研究所  
 「林外」をめぐる『大分県地方史』第 229 号 秋月立雄  
 千田家寄贈品展 II 行橋市歴史資料館  
 広報紙 書くよろこび 第 11 号 日本書芸院  
 京都市学校歴史博物館研究紀要 第 6 号 (博物館年報 18 号)  
 京都市教育委員会  
 究理堂所蔵 京都小石家来簡集 究理堂書簡を読む会  
 泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈 吾妻重二  
 日本漢文学研究 第 12 号 川邊雄大  
 苦楽吉祥 川島真人  
 水滴は岩をも穿つ 川島真人  
 社会医療法人 玄真堂川島整形外科病院 35 周年 業績集  
 川島真人
- 中津藩蘭学の光芒 豊前中津医学史散歩 川島真人  
 特別史跡 廉塾ならびに菅茶山旧宅 保存活用計画 福山市教育委員会  
 史跡朝鮮通信使遺跡 鞆福禪寺境内 保存活用計画 福山市教育委員会  
 史跡朝鮮通信使遺跡 鞆福禪寺境内 第 1 次発掘調査報告書  
 福山市教育委員会  
 閑谷学校研究 第 21 号 公益社団法人 特別史跡閑谷学校顕  
 彰保存会  
 瀧廉太郎記念音楽祭 70 周年記念誌 瀧廉太郎記念音楽祭実行委員会  
 沖代条里の調査 1 大分県荘園村落遺跡  
 詳細分布調査概要報告書 大分県立歴史博物館  
 雅俗 第 16 号 平野五岳の磐井・石人観 秋月立雄  
 旧閑谷月光世界遺産登録推進運動「まなび」  
 フォーラム・講演会 報告書 2013～2016 年度  
 備前市  
 館蔵品選集 I - 先人が遺してくれたもの - 鳥取市  
 館蔵品選集 II - 先人が遺してくれたもの - 鳥取市  
 受賞記念・玄真堂新病院竣工記念誌 水滴は岩をも穿つ  
 川島真人  
 川島整形外科病院 新築移転記念誌  
 - 理事長の軌跡と風景 - 一隅に輝く 川島真人  
 MY WAY 私の歩んできた道  
 - 一隅を照らし、一隅に輝く - 川島真人  
 福井県小浜市主催 第 7 回 杉田玄白賞  
 受賞記念誌 近代医学を築いた開拓者達 川島真人  
 アーカイブズ講座 報告書 IV 中津市教育委員会  
 沖代条里の調査 1 大分県荘園村落遺跡  
 詳細分布調査概要報告書 大分県立歴史博物館  
 江戸時代の文化 北九州ゆかりの絵師たち  
 北九州市立いのちのたび博物館  
 北九州市立自然史・歴史博物館 研究報告  
 B 類 歴史 第 7 号 北九州市立いのちのたび博物館

(敬称略)

#### 4. 咸宜園関係参考文献

- ・廣瀬貞治『淡窓の申聞書 旭荘の御請書』1923
- ・廣瀬貞治『贈従五位廣瀬旭荘先生小傳』1924
- ・下 稲束 猛、吉田銳雄『池田人物誌』太陽日報社 1924
- ・武藤長平「広瀬淡窓と広瀬旭荘」『西南文運史論』岡書院 1926
- ・大分縣日田郡教育會『廣瀬家一門の光彩—淡窓先生を中心として—』1934
- ・乙竹岩造「教賢広瀬淡窓」『教育学研究』3巻8—10 日本教育学会 1935
- ・袁了凡 四方文吉「淡窓先生と陰陽録」『改修和語陰陽録』1935
- ・山本 喜三「(三) 廣瀬淡窓の教育精神」『教育学研究』4巻5号 599-601 1935
- ・山極 眞衛「(一) 概観」『教育学研究』4巻5号 565-570 1935
- ・伯爵清浦奎吾伝刊行会 編『伯爵清浦奎吾伝』上巻 第1篇 伯爵清浦奎吾伝刊行会 1935
- ・中島市三郎『教聖・広瀬淡窓の研究』  
第一出版協会 1936
- ・小西重直「教育家としての広瀬淡窓」『日本諸学振興委員会研究報告』第1篇 文部省教学局 内閣印刷局 1937
- ・森銚三「蛭雪事業鈔」『伝記』5-1 伝記学会 1938
- ・中島市三郎『広瀬淡窓 咸宜園と日本文化』  
第一出版協会 1942
- ・小西重直『広瀬淡窓』文教書院 1943
- ・小西重直「広瀬淡窓を繰り返す」『教育学論集』第3輯 日本教育学会 新紀元社 1944
- ・長 壽吉「廣瀬旭荘の講學と尊皇思想」『大阪の先賢と史蹟』第三輯 大阪出版堂 1944
- ・井上源吾「広瀬淡窓における敬天説の成立」『人文社会科学研究报告』1 長崎大学学芸学部 1951
- ・井上源吾「広瀬淡窓に於ける内省と実践について」『西日本史学』11 西日本史学会 1952
- ・吉田澄夫「遠思楼詩鈔〔広瀬淡窓〕—近世詩抄その1」『学苑』152 昭和女子大学近代文化研究所 1953
- ・井上源吾「広瀬淡窓の思想についての諸説批判」『人文社会科学研究报告』3 長崎大学学芸学部 1953
- ・井上源吾「広瀬淡窓の教育意見」『人文社会科学研究报告』3 長崎大学学芸学部 1953
- ・井上源吾「広瀬淡窓の教育意見」『人文社会科学研究报告』4 長崎大学学芸学部 1954
- ・井上源吾「広瀬淡窓の教育思想、とくに訓育とその方法について」『人文社会科学研究报告』4 長崎大学学芸学部 1954
- ・井上源吾「広瀬淡窓の教育管見、とくに教授の方法について」『人文社会科学研究报告』4  
長崎大学学芸学部 1954
- ・東晋太郎「広瀬淡窓の経済思想」『経済學論究』8-3 関西学院大学 1954
- ・工藤豊彦「広瀬淡窓の禍福応報論について」『支那学研究』12 広島支那学会 1955
- ・工藤豊彦「広瀬淡窓の老荘学について」『大分大学学芸学部研究紀要』4 大分大学学芸学部 1955
- ・古川克己『教聖広瀬淡窓』淡窓会 1955
- ・黒江一郎「日向と咸宜園」『宮崎大学学芸学部研究時報』第1巻第3号 宮崎大学学芸学部 1957
- ・黒江一郎「日間瑣事備忘録」に見える旭荘の詩名と二三の日向人」『宮崎大学学芸学部紀要』第4号 宮崎大学学芸学部 1958
- ・武谷祐之「南柯一夢」『九州文化史研究所紀要』10 井上忠 九州大学付属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 1963
- ・前野喜代治「迂言」小考—その学制を中心として」『弘前大学人文社会』第28号 教育・心理学篇 弘前大学人文社会学会 1963
- ・大久保勇市「広瀬淡窓の教育精神」『芸文』第4巻第1号 近畿大学文科学会 1963
- ・廣瀬八賢顕彰会『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』1965
- ・大久保 勇市「広瀬淡窓の人間性 1」『芸文』  
近畿大学文科学会 5巻3号 1965
- ・大久保 勇市「広瀬淡窓の人間性 2」『芸文』  
近畿大学文科学会 6巻2号 1965
- ・大谷篤蔵「広瀬旭荘の「追思録」」『文学』34巻3号 岩波書店 1966
- ・大久保 勇市「広瀬淡窓の人間性 3」『芸文』近畿大学文科学会 6巻3号 1966
- ・松下忠「広瀬淡窓の詩論」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』17 和歌山大学教育学部 1967
- ・新田大作「咸宜園覚書—九州紀行より」『斯文』47  
欺文会 1967
- ・大久保勇市「広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-1-」『芸文』第7巻2号 近畿大学文科学会 1967
- ・大久保勇市「広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-2-」『芸文』第8巻1号 近畿大学文科学会 1967
- ・大久保勇市「広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-3-」『芸文』第8巻2号 近畿大学文科学会 1968
- ・松月秀雄「広瀬淡窓と高野長英」『教育学雑誌』2号 日本大学教育学会 1968
- ・萬善簿 青木繁「広瀬淡窓先生の修練ぶり」『先覚と共に』第1集 農林叢書刊行会 1968
- ・中島市三郎「淡窓・長英をかぼう」『日田文化』第11号 日田市教育委員会 1968
- ・広瀬宗家『咸宜園入門簿抄』1968
- ・古川克己「広瀬淡窓門下萍華上人の話」『日田文化』第12号 日田市教育委員会 1969
- ・中島市三郎「塩谷大四郎正義公の生誕二百年を迎えて」『日田文化』第12号 日田市教育委員会 1969
- ・大久保勇市「広瀬淡窓の易理観—人間性研究の一環として〔付「義府（放言）」（天保12年稿）翻刻〕」『近畿大学教養部研究紀要』1号 近畿大学教養部 1969
- ・井上義巳「小倉落城〔慶応2年〕と日田・咸宜園—「林外日記」を中心として」『九州大学教育学部紀要 教育学部部門』15 九州大学教育学部 1969
- ・大久保勇市『広瀬淡窓の人間性研究』  
フタバ書店 1969
- ・青野春水「広瀬淡窓の思想と教育」『日本歴史』第264号 吉川弘文館 1970

- ・井上義巳「咸宜園をめぐる政治情勢—咸宜園と日田代官府との関係(近世日田とその周辺地域の総合的研究)」『九州文化史研究所紀要』15 九州大学付属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 1970
- ・高倉芳男「咸宜園最後の講師勝屋明浜先生」『大分県地方史』第 56 号 大分県地方史研究会 1970
- ・広瀬正雄他「広瀬淡窓と咸宜園」『歴史残花』第 4 時事通信社 1971
- ・杉本勲「豊後日田の広瀬家史料の調査によせて(研究余録)」『日本歴史』第 272 号 吉川弘文館 1971
- ・井上義巳「咸宜園の財政—塾主の会計記録より見た」『日本歴史』第 276 号 吉川弘文館 1971
- ・島崎隆夫「幕末経済論の一研究—経世家としての広瀬淡窓」『三田学会雑誌』64 巻 8 号 慶応義塾大学経済学会 1971
- ・井上義巳「咸宜園の財政」『日本歴史』5 月号 第 276 号 吉川弘文館 1971
- ・島崎隆夫「幕末経済論の一研究—経世家としての広瀬淡窓」『三田学会雑誌』64 巻 8 号 慶応義塾大学経済学会 1971
- ・杉本勲「咸宜園と洋学」『史淵』第 105・106 合輯 九州大学大学院人文科学研究院 1971
- ・井上義巳「咸宜園の財政」『日本歴史』5 月号 第 276 号 吉川弘文館 1971
- ・巻端淳印「広瀬旭荘の来越と越中咸宜園の流れ」『富山商船高等専門学校研究集録』4 富山商船高等専門学校 1971
- ・大久保勇市『広瀬淡窓・万善簿の原点』啓文社 1971
- ・金沢春友『西国筋郡代と広瀬淡窓』大盛堂印刷出版部 1972
- ・大久保勇市「広瀬淡窓の儒林評とその道統」『近畿大学教養部研究紀要』4 巻 3 号 近畿大学教養部 1973
- ・大久保勇市「万善簿のねらい〔広瀬淡窓〕」『近畿大学教養部研究紀要』5 巻 2 号 近畿大学教養部 1973
- ・中島市三郎『咸宜園教育発達史』中島国夫 1973
- ・広瀬正雄『広瀬淡窓手ほどき』(非売品) 広瀬先賢顕彰会 1973
- ・井上義巳「咸宜園入門者についての研究(青山学院創立 100 周年記念論文集)」『青山学院大学文学部紀要』16 号 青山学院大学文学部 1974
- ・田中佩刀「詩人廣瀬旭莊論」『明治大学教養論集 84 号』明治大学教養論集刊行会 1974
- ・杉本勲「広瀬旭莊の海外認識と海防思想」『対外関係と政治文化』第三 政治文化 近世・近代編 森克己博士古稀記念会編 吉川弘文館 1974
- ・杉本勲 編『九州天領の研究 日田地方を中心として』吉川弘文館 1976
- ・松井康秀「適材適育—広瀬淡窓とその教育思想」『日本及日本人』1548 号 J&J コーポレーション 1978
- ・広瀬正雄「広瀬淡窓について」『東洋研究』49 号(講演) 大東文化大学東洋研究所 1978
- ・平野翠 中尾「小石元瑞と広瀬淡窓の書簡」『混沌』第 5 号 松泉堂書店 1978
- ・鹿毛基生「近世教育思想研究 -3- 広瀬淡窓の教育思想」『大分大学教育学部研究紀要 教育科学』5 巻 4 号 大分大学教育学部 1979
- ・関山邦宏「幕末私塾の学規の研究—咸宜園を中心として」『教育研究』23 青山学院大学教育学会 1979
- ・松岡久人『瀬戸内海の歴史と文化』瀬戸内海環境保全協会 1979
- ・小島 康敬「広瀬淡窓の敬天思想 徂徠を手がかりに」『季刊日本思想史』ペリかん社 15 号 1980.12
- ・海原徹「近世私塾の就学形態—淡窓日録の分析を中心に」『人文』27 京都大学教養部 1981
- ・井内嘉美「広瀬淡窓の敬天説とその教育方法理論」『IBU 四天王寺国際仏教大学文学部紀要』14 号 四天王寺国際仏教大学 1981
- ・壺井秀生『日本人の道德思想』[内容]:福沢以前の「天」の思想について(広瀬淡窓)文化総合出版 1981
- ・大塚 祐子「咸宜園と東洋文庫新収広瀬家所蔵本(影印)」『東洋文庫書報』東洋文庫 13 号 1981
- ・日田市教育委員会『廣瀬淡窓生誕二百年記念展』1981.11
- ・高橋文博「広瀬淡窓の不安—その自己と超越的なもの」『季刊日本思想史』19 号 ペリかん社 1983
- ・工藤豊彦「『約言』の思想について」『季刊日本思想史』19 号 ペリかん社 1983
- ・関山邦宏「広瀬淡窓の教育思想」『季刊日本思想史』19 号 ペリかん社 1983
- ・田中加代「教育理念としての「敬天」—『約言』『約言或問』をめぐって」『季刊日本思想史』19 号 ペリかん社 1983
- ・藤本雅彦「天命と人情—広瀬淡窓の敬天論をめぐって」『季刊日本思想史』19 号 ペリかん社 1983
- ・藤原敬子「広瀬淡窓の教育観—「教育」の語を中心に」『季刊日本思想史』19 号 ペリかん社 1983
- ・古川哲史「『万善簿』と『陰陽録』」『季刊日本思想史』19 号 ペリかん社 1983
- ・「広瀬淡窓の思想<特集>」『季刊日本思想史』日本思想史懇話会 編 ペリかん社 19 号 1983
- ・黒住真「広瀬淡窓の倫理思想」『倫理学紀要』1 輯 東京大学文学部 1984
- ・田中加代「広瀬淡窓の生涯とその時代区分」『日本女子大学紀要 文学部』34 日本女子大学 1984
- ・多田建次「近世塾の近代化過程の研究—咸宜園と慶応義塾を例として - 前 - 近世塾の諸問題」『論叢』(玉川大学文学部紀要) 25 玉川大学 1984
- ・梅溪昇『緒方洪庵と適塾生』—「日間瑣事備忘」にみえる— 思文閣 1984
- ・寺脇 恵「日本: 近世 一九(一九八三年の歴史学界: 回顧と展望)」『史学雑誌』93 巻 5 号 712-718 1984
- ・梅溪昇「一、広瀬旭莊の日記にみえる緒方洪庵と適塾



- ・岡村 繁『広瀬淡窓・広瀬旭荘』江戸詩人選集九  
岩波書店 1991
- ・田中 加代「広瀬淡窓の教育思想：その系譜的特徴を中心に」日本教育学会大会研究発表要項 50 巻 52 1991
- ・田中 加代「広瀬淡窓の教育思想の系譜 荻生徂徠・亀井南冥・昭陽の影響を中心として」『教育学研究』58 巻  
4 号 349-358 1991
- ・徳田 武「「追補 広瀬旭荘と遠山荷塘また旭荘と原采蘋」詩人 廣瀬旭荘伝」『江戸文学』8 ぺりかん社 1992
- ・徳田 武「「論詩」の成立」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』9 ぺりかん社 1992
- ・森 眞理子「咸宜園塾頭諫山菽村宛来簡の書誌的研究」  
京都大学 1991-1992
- ・木南卓一「広瀬淡窓私新抄 -1-」『帝塚山大学教養学部紀要』35 帝塚山大学教養学部 1993
- ・木南卓一「広瀬淡窓私新抄 (2)」『帝塚山大学教養学部紀要』36 帝塚山大学教養学部 1993
- ・徳田 武「「昭陽塾退塾」詩人 廣瀬旭荘伝」  
『江戸文学』10 ぺりかん社 1993
- ・徳田 武「「樺島石梁訪問」詩人 廣瀬旭荘伝」  
『江戸文学』11 ぺりかん社 1993
- ・福島理子「儒者の怪奇趣味—広瀬旭荘『丑時咀』をめぐって—」『江戸小説と漢文学』和漢比較文学叢書第十七巻  
和漢比較文学会編 汲古書院 1993
- ・三沢勝己「広瀬淡窓・広瀬旭荘と洋学 序論」『明治聖徳記念学会紀要』復刊八号 明治聖徳記念学会 1993
- ・楊 宏民「広瀬淡窓の経世論について 徂徠学との比較を通して」『立命館大学人文科学研究紀要』59 号  
1993.10
- ・木南卓一「広瀬淡窓私新抄 (3)」『帝塚山大学教養学部紀要』38 帝塚山大学教養学部 1994
- ・木南卓一「広瀬淡窓私新抄 (4)」『帝塚山大学教養学部紀要』39 帝塚山大学教養学部 1994
- ・三澤勝己「広瀬淡窓と「徒然草」」『大倉山論集』第 36 輯 大倉精神文化研究所 1994
- ・田中加代「咸宜園—広瀬淡窓の私塾教育が今日に与える意味—」『家庭科学』61 巻 3 号《特集》21 世紀の教育制度を考える -1-  
日本女子社会教育会家庭科学研究所 1994
- ・徳田 武「「旭荘」の命名」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』12 ぺりかん社 1994
- ・徳田 武「「廉塾」行」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』13 ぺりかん社 1994
- ・徳田 武「未紹介広瀬旭荘詩文解説 (一)」『明治大学教養論集』268 号 明治大学教養論集刊行会 1994
- ・小堀一正「幕末大阪文人社会の動向—広瀬旭荘と藤井藍田・河野鉄兜らを中心として」『大阪の歴史と文化』  
和泉書院 1994
- ・廣瀬尚美『廣瀬資料館図録 天領日田の掛屋』  
源流社 1994
- ・新井白石 三澤勝己「新井白石と広瀬淡窓」『季刊日本思想史』46《特集》日本思想史懇話会 ぺりかん社 1995
- ・田中晃「山陽手批淡窓詩稿」『日田文化』第 38 号  
日田市教育委員会 1995
- ・杜栄「広瀬淡窓の自然観について」『中国哲学論集』21  
九州大学中国哲学研究会 1995
- ・徳田 武「「廉塾」行 (二)」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』14 ぺりかん社 1995
- ・徳田 武「未紹介広瀬旭荘詩文解説 (二)」『明治大学教養論集』279 号 明治大学教養論集刊行会 1995
- ・中村幸彦、井上敏幸『広瀬先賢文庫目録』  
廣瀬先賢文庫 1995
- ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考 (四) —諸儒との交遊を中心として—」『大倉山論集』三七号  
大倉精神文化研究所 1995
- ・森眞理子「咸宜園塾頭諫山菽村宛来簡の書誌的研究」  
京都大学 1995
- ・木山 実、四宮 正親、佐々木 聡、橘川 武郎「一九九三年の日本経営史」『経営史学』30 巻 1 号 56-79 1995
- ・木村 政伸「唐津藩における私塾教育の研究」『日本の教育史学』38 巻 6-23 1995
- ・西江錦史郎「寛政の教化政策と地方儒学」『東洋研究』121 大東文化大学東洋研究所 1996
- ・徳田 武「「廉塾」行 (三)」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』15 ぺりかん社 1996
- ・徳田 武「未紹介広瀬旭荘書牘・資料紹介—文久三年四、五月—」『明治大学教養論集』286 号  
明治大学教養論集刊行会 1996
- ・杉森 玲子「柿原謙一編『秩父地域絹織物史料集』」埼玉新聞社『史学雑誌』105 巻 9 号 120-121 1996
- ・井上源吾『広瀬淡窓の詩 遠思楼詩鈔評釈』  
葦書房 1996
- ・徳田 武「「廉塾」行 (四)」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』17 ぺりかん社 1997
- ・西江錦史郎「広瀬旭荘研究 (1) 系譜と活動」『東洋研究』126 号大東文化大学 東洋研究所 1997
- ・岡村 繁「広瀬旭荘の遺稿とその推敲課程〔含略年譜〕」先儒祭記念公演『斯文』106 号 斯文会 1997
- ・肥田明啓「広瀬淡窓と袁枚」『学林』28・29  
中国芸文研究会 1998
- ・大木正義「淡窓詩話の文章 (特集 中世・近世)」『解釈』44 巻 3 号 解釈学会 1998
- ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考 (五) —儒との交遊を中心として—」『大倉山論集』四二号  
大倉精神文化研究所 1998
- ・井上源吾『若き日の廣瀬淡窓』葦書房 1998
- ・田中加代著「広瀬淡窓の研究」『大倉山論集』44  
三沢勝己 大蔵精神文化研究所 1999
- ・大野 雅之「広瀬旭荘と咸宜園—離郷決意の萌芽をさぐる」『史料館研究紀要』  
大分県立先哲史料館 4 号 1999.3
- ・肥田明啓「広瀬淡窓の詩論とその源流—清代前期の詩

- 論の受容を中心として」『学林』30  
中国芸文研究所 1999
- ・山本佐貴「咸宜園における漢詩講釈の展開」『教育学研究紀要』45巻1号 中国四国教育学会 1999
  - ・宮崎修多「私塾 本立書院（東宜園）（特集 明治十年代の江戸）」『江戸文学』21 ぺりかん社 1999
  - ・Nazario Bustos「江戸時代の学習機会 - その2-」『九州 共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要』4 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター 1999
  - ・高橋昌彦「松下筑陰伝攷（上）」『語文研究』86・87号 九州大学国語国文学会 1999
  - ・徳田 武「未紹介広瀬旭荘詩文解説（三）」『明治大学教養論集』322号 明治大学教養論集刊行会 1999
  - ・大野修作『広瀬旭荘』日本漢詩人選集 16 研文出版 1999
  - ・平岡 豊「特集『三奪の法』から『五奪の法』-- 咸宜園の理念の中に、新しい人材育成の灯火を観た」『産業訓練』日本産業訓練協会 531号 1999
  - ・狭間久『広瀬淡窓の世界』大分合同新聞社 1999
  - ・山本佐貴「咸宜園門人たちの詩社「玉川吟社」に関する考察」『大分県地方史』179号  
大分県地方史研究会 2000
  - ・杜 栄「広瀬淡窓と老子思想」『中国哲学論集』26  
九州大学中国哲学研究会 2000
  - ・肥田明啓「廣瀬淡窓の詩論と咸宜園教育との関連」『立命館文學』563号 立命館大学人文学会 2000
  - ・高橋昌彦「女流漢詩人を探す」『機』No109  
藤原書店 2000
  - ・大野修作「『東瀛詩選』の成立と広瀬旭荘」『女子大國文』第二百二十七号 京都女子大学国文学会 2000
  - ・三澤 勝己「広瀬淡窓の経世論小考」『日本経済思想史研究』(1) 日本経済思想史研究会 2001
  - ・月野文子「広瀬旭荘の「夜過二州橋一書二曝目一」詩：成立事情とその推敲の態度をめぐって」『文芸と思想』65 福岡女子大学文学部 2001年
  - ・高橋 昌彦「寛政期の豊後日田漢詩壇 -- 咸宜園前史」『雅俗』雅俗の会 8号 2001
  - ・月野文子「広瀬旭荘の題画詩「題春川釣魚図」の手法：楽府詩「枯魚過河泣」と『莊子』寓喩」『文芸と思想』66 福岡女子大学文学部 2002
  - ・西村富美子「〈論文〉 広瀬旭荘生涯と作品：波華大阪の地」『紀要 言語・文学編』34  
愛知県立大学外国語学部 2002
  - ・大野修作「広瀬旭荘と山梨稲川―『東瀛詩選』中の詩人たち―」『女子大國文 第三百一十一号』  
京都女子大学国文学会 2002
  - ・山本 さき「咸宜園隆盛における漢詩教育の意義」『日本歴史』日本歴史学会 吉川弘文館 646号 2002
  - ・鈴木理恵「近世末期芸州の漢学塾を介した書籍貸借―一塾生を中心に」『長崎大学教育学部社会科学論叢』63号 長崎大学教育学部 2003
  - ・橋本 昭彦「日本教育史の研究動向（近世以前）(III 研究動向)」『日本の教育史学』45巻 332-337 2002
  - ・神田嘉延「日本の経済発展と学校教育（1）」『鹿児島大学教育学部教育実践センター研究紀要論文』13  
鹿児島大学教育学部 2003
  - ・徳田 武「広瀬旭荘の善通寺参詣」『明治大学教養論集』362号 明治大学教養論集刊行会 2003
  - ・月野文子「広瀬旭荘の天保十五年正月詩の周辺：「肅舎」取得と江戸開塾」『文芸と思想』67  
福岡女子大学文学部 2003
  - ・向野康江「広瀬淡窓（1782-1856）による漢詩教育のあり方 1―江戸詩壇史における位置づけ（1）」『茨城大学教育学部紀要』53号 茨城大学教育学部 2004
  - ・向野康江「広瀬淡窓（1782-1856）による漢詩教育のあり方 1―江戸詩壇史における位置づけ（2）」『茨城大学教育学部紀要』53号 茨城大学教育学部 2004
  - ・林田慎之助「日本漢詩人紀行（1）淡窓の筑遊」『創文』469号 創文社 2004
  - ・奥村覚「丹波における明治維新前後 広瀬淡窓の思想」『丹波』6号《特集》幕末維新を馳せた丹波の人々 丹波史談会 2004
  - ・三澤勝己「咸宜園の漢籍収集と塾生の閲覧」『漢籍』12号 漢籍研究会 2004
  - ・亀田一邦「嘉永4年広瀬旭荘の長府娶嫁及び藩儒招聘に関する一考察」『山口県地方史研究』91  
山口県地方史学会 2004
  - ・堺市博物館『堺市博物館 書の世界―山下是臣コレクション―』2004
  - ・杜栄『廣瀬淡窓の哲学思想に関する研究』九州大学博士論文 2004
  - ・尾本優輝「広瀬淡窓「歳暮」による授業実践報告」『漢文教育』30 広島漢文教育研究会 中国中世文学会 2005
  - ・小金澤豊「漢文教材としての広瀬淡窓―『桂林荘雜詠示諸生』教材化の背景―」『二松学舎大学人文論叢』75号 二松学舎大学人文学会 2005
  - ・岩本 馨「近世都市における「知」の空間と場―豊後国日田咸宜園を中心に―」『年報都市史研究』13号  
山川出版社 2005
  - ・野田高巳「淡窓漢文日記・懐舊樓筆記にみる 天保の大飢饉」『日田文化』第47号 日田市教育委員会 2005
  - ・島岡成治「9286 広瀬旭荘における住まいと都市の場所について（建築論・場所、建築歴史・意匠）」『学術講演梗概集』日本建築学会 2005
  - ・亀田一邦「広瀬旭荘晩年の赤閑厄難について」『日間瑣事備忘録』に見る婚家当主清水麻之丞との粉擾顛末  
『地域文化研究』20 梅光学院大学地域文化研究所 2005
  - ・廣瀬 修二、山田 有一「広瀬久兵衛嘉貞について」『農業土木学会誌』73巻10号 923-924,2005
  - ・太田 素子「日本教育史の研究動向（近世以前）」『日本

- の教育史学』48巻 174-178 2005
- ・小池 喜明「儒者と開国 廣瀬淡窓」『井上円了センター年報』東洋大学井上円了記念学術センター 14号 2005
  - ・「九州をもっと良く知る 温故知新 先人に学ぶ人間学 (15) 廣瀬淡窓 (大分県)」『財界九州』財界九州社 46巻 10号 (通号 973) 2005.10
  - ・小池 喜明「儒者と開国 -- 廣瀬淡窓著者」『井上円了センター年報』東洋大学井上円了記念学術センター 14号 2005
  - ・齋藤尚志「廣瀬淡窓の「教育ノ術」 礼楽刑政による解釈 [含 論評]」『日本教育史研究』25号  
日本教育史研究会 2006
  - ・林田慎之助「廣瀬淡窓と陶淵明」『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』  
松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集刊行會 2006
  - ・島岡成治「813 廣瀬旭荘の大阪の住まいと都市へのまなざし (歴史・意匠)」『日本建築学会研究報告』  
日本建築学会 2006
  - ・郭穎「『東瀛詩選』における俞樾の修改—廣瀬旭荘の『梅墩詩鈔』との比較を通して—」『中国学研究論集』第十六号 広島中国文学会 2006
  - ・木村 政伸「日本教育史の研究動向 (近世以前)」『日本の教育史学』49巻 208-212 2006
  - ・後藤 宗俊「歴史シリーズ 大分の歴史を歩く (17) 史跡 咸宜園跡」『おおいの経済と経営』大銀経済経営研究所 196号 2007
  - ・三澤 勝己「廣瀬淡窓と咸宜園」『日本教育』  
日本教育会 361号 2007.10
  - ・朱 玲莉「咸宜園と白鹿洞書院一日中私塾の比較研究—」『國學院大学大学院紀要』39号國學院大学大学院 2008
  - ・海原徹『廣瀬淡窓と咸宜園: ことごとく皆宜し』  
ミネルヴァ書房 2008
  - ・川野 祐二「さわやか公益紀行 (42) 私塾の底力 (巻 5) 咸宜園」『月刊公益法人』  
全国公益法人協会 440号 2008
  - ・小財陽平「廣瀬淡窓、李白への挑戦「月下独酌」論」『文学』10巻 3号 岩波書店 2009
  - ・川邊雄大「幕末明治期の咸宜園と真宗僧」『淡窓研究会会報』淡窓研究会 2009
  - ・山本郁男・井本真澄・宇佐見則行ほか「日向薬事始め (その5) 日向出身の緒方洪庵・適塾と廣瀬淡窓・咸宜園に学んだ人々」『九州保健福祉大学研究紀要』10号九州保健福祉大学研究紀要委員会九州保健福祉大学 2009
  - ・前田勉「廣瀬淡窓における学校と社会」『日本文化論叢』17号 愛知教育大学日本文化研究室 2009
  - ・岩沢光夫「休道詩鑑賞への一考『敬天』第37号 淡窓会 2009
  - ・黒川桃子「廣瀬淡窓と頼山陽 文化五年の交流を通して」『近世文芸研究と評論』75号 近世文芸研究と評論の会  
早稲田大学文学部 2009
  - ・藤井準一郎「廣瀬淡窓の教育」『杵築史談会』久米忠臣  
杵築史談会 2009
  - ・大野雅之「大給府内藩と廣瀬家 近説と旭荘の関係を中心に」『資料館研究紀要』14 大分県立先哲資料館 2009
  - ・亀田一邦「高杉晋作の主治医 石田精一について—変革期草医の「雅」と「侠」—」『日本医学史雑誌』第55巻 第4号 日本医学史学会 2009
  - ・梅溪 昇「廣瀬旭荘と池田」『池田郷土研究』11号 池田郷土史学会 2009
  - ・託明寺『託明寺縁起略伝記』2009
  - ・池田市、池田市教育委員会『続池田学講座—人物編— 新たに知る池田 改めて出会う池田—』2009
  - ・天野 晴子「日本教育史の研究動向 (近世以前)」『日本の教育史学』52巻 140-142 2009
  - ・朱 秋而「廣瀬淡窓の詩風について—その日本化の側面を中心に—」『アジア文化交流研究』第5号別冊《特集》幕末明治期における日本文学・歴史・思想・藝術の諸相 関西大学アジア文化交流研究センター 2010
  - ・黒川桃子「廣瀬淡窓と陸游詩—淡窓詩の一流流—」『江戸風雅』第2号 江戸風雅の会 2010
  - ・徳田武「廣瀬旭荘の足利学校行」『江戸風雅』第3号  
江戸風雅の会 2010
  - ・池澤一郎「苔を二広の墓碑と合原松子の墓とに掃ふ」『江戸風雅』第3号 江戸風雅の会 2010
  - ・徳田武・土屋和之「廣瀬旭荘と『水滸伝』」『江戸風雅』第3号 江戸風雅の会 2010
  - ・大野雅之「淡窓先生手書己篇」にみる廣瀬淡窓の苦悩 末弟旭荘のこと」『史料館研究紀要』15  
大分県立先哲資料館 2010
  - ・川崎理恵「近世社会における曆占の実態 廣瀬旭荘と古谷道庵を素材に」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編 9』京都女子大学大学院文学研究科史学専攻 2010
  - ・亀田一邦『幕末防長儒医の研究』知泉書館 2010
  - ・「歴史の指標 廣瀬淡窓 (上) 身代りになった妹の恩愛にこたえて」『明日への選択』日本政策研究センター 通号 295 2010
  - ・黒川桃子「廣瀬淡窓の陸游詩受容「論詩詩」を中心に」『近世文芸』日本近世文学会 92号 2010.7
  - ・神戸輝夫「旭荘の漢文日記」『潮 一月号』  
潮出版社 2011
  - ・合山林太郎「幕末京撰の漢詩壇 廣瀬旭荘・河野鉄兜・柴秋村を中心に (特集 近世韻文の力)」『日本文学』60巻 10号 日本文学協会 2011
  - ・黒川桃子「亀井少榊小伝—父昭陽の詩文を通して— (上)」『江戸風雅 第五号』江戸風雅の会 2011
  - ・徳田武「囲記事 廣瀬林外と川路聖謨・安井息軒・大沼枕山」『江戸風雅』第五号 江戸風雅の会 2011
  - ・合山 林太郎「幕末京撰の漢詩壇—廣瀬旭荘・河野鉄兜・柴秋村を中心に—」『日本文学』60巻 10号 30-39 2011
  - ・鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』塙書房 2012
  - ・日田市教育委員会『廣瀬淡窓の生家—廣瀬家の歴史と

- 業績一』2012
- ・吹田市教育委員会『吹田市立博物館 大庄屋 中西家名品展』2012
  - ・咸宜園教育研究センター 展示解説書『廣瀬旭荘一東遊大坂 池田一』2012
  - ・池田市立歴史民俗資料館 展示図録『廣瀬旭荘と池田・大坂』2012
  - ・原 千里「廣瀬淡窓とその世界」『季論 21』編集委員会 18号 2012
  - ・大野 雅之「廣瀬淡窓書簡の作成年代について：寛政期から文化期まで」『史料館研究紀要』大分県立先哲史料館 17号 2013
  - ・徳田 武「廣瀬旭荘と江戸」『江戸風雅』第七号 江戸風雅の会 2013
  - ・日田市教育委員会『廣瀬淡窓と咸宜園一近世日本の教育遺産として一』2013
  - ・別府大学文化財研究所・日田市教育委員会『廣瀬淡窓と咸宜園一近世日本の教育遺産として一資料編』2013
  - ・廣瀬本家 ガイドブック ～文化財指定記念～国史跡『廣瀬淡窓旧宅及び墓』2013
  - ・咸宜園教育研究センター 展示解説書 平成 25 年度特別展『九州の私塾と教育～咸宜園とその周辺～』2013
  - ・池田 寿生「近世日本最大の私塾「咸宜園」と「廣瀬淡窓」『せせらぎ』地方財務協会 742号 2013
  - ・杉谷 昭「草場佩川と古賀穀堂・廣瀬淡窓」『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』佐賀県立佐賀城本丸歴史館 8号 2013
  - ・帆秋 孝幸「豊後の先哲 廣瀬淡窓とその弟 久兵衛」『日本精神科病院協会雑誌』日本精神科病院協会 32 巻 8 号通巻 382 2013.8
  - ・岸田 知子「平成二十五年度先儒祭墓前講話 廣瀬旭荘：幕末の漢学者」『斯文』斯文会 124号 2014.3
  - ・徳田武・長田和也・山形彩美「増訂西村天因著『亀門の二広』廣瀬旭荘」『江戸風雅』第九号 江戸風雅の会 2014.6
  - ・徳田武「廣瀬旭荘略年譜」『江戸風雅』第九号 江戸風雅の会 2014.6
  - ・徳田武「廣瀬旭荘と春日載陽」『江戸風雅』第九号 江戸風雅の会 2014.6
  - ・咸宜園教育研究センター 平成 26 年度特別展『漢詩人 廣瀬淡窓』2014
  - ・徳田武「廣瀬旭荘『日間瑣事備忘』の顕彰一亀谷省軒・牧野藻洲・西村天因一」『江戸風雅』第十号 江戸風雅の会 2014.11
  - ・今村孝次著・徳田武増訂「中島子玉」『江戸風雅』第十号江戸風雅の会 2014.11
  - ・栗三直隆『野上文山 覚書』2014
  - ・原 千里「廣瀬淡窓の反骨精神」『季論 21』編集委員会 編 24号 2014
  - ・日田市教育庁世界遺産推進室「江戸の学びと文化」実施報告書（教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム 2014）2015
  - ・川邊雄大「善教寺蔵・「田原法水略歴」および「田原法水紀功碑」（草稿）について」『国士舘大学経済研紀要』第 26 号 国士舘大学政経学部附属経済研究所 2014.3
  - ・原千里「廣瀬淡窓とその世界時代を先取りした淡窓の教育」『海』第二期第 13 号（通巻第 80 号）花書院 2015.1
  - ・原千里「廣瀬淡窓とその世界『学制の儀』をめぐって」『海』第二期第 13 号（通巻第 80 号）花書院 2015.1
  - ・川邊雄大・町泉寿郎「資料紹介 善教寺蔵・小栗憲一「琉球日記」について」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第 45 集 二松学舎大学東アジア学術総合研究所 2015.3
  - ・川邊雄大「明治期の琉球における真宗法難事件に関する一考察一善教寺資料を中心に一」『沖繩文化研究』41 法政大学沖繩文化研究所 2015.3
  - ・求菩提資料館『ふるさと豊前 人物再発見』2015.3
  - ・徳田武「廣瀬旭荘と筑井昆陽」『江戸風雅』第 11 号 江戸風雅の会 2015.6
  - ・鈴木理恵「近世後期の教育環境としての漢学塾一咸宜園とその系譜塾」『書籍文化とその基底』平凡社 2015.10
  - ・徳田武「廣瀬旭荘と鈴木春山（一）」『江戸風雅』第 12 号 江戸風雅の会 2015.11
  - ・徳田武「『在臆話記』の廣瀬旭荘記事一『日間瑣事備忘』の顕彰一」『江戸風雅』第 12 号 江戸風雅の会 2015.11
  - ・四十五周年記念大会実行委員会『淡窓伝光霊流 日本詩道会 日田詩道会四十五周年記念大会』2015.11
  - ・山田 明「廣瀬淡窓の人権思想と咸宜園教育」『リベラシオン』福岡県人権研究所 160号 2015.11
  - ・原千里「廣瀬淡窓とその世界咸宜園の入門者をめぐって」『海』第二期第 15 号（通巻 82 号）花書院 2016
  - ・川邊雄大「資料紹介 白華文庫蔵・小栗栖香頂「水築小相伝」について」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第 46 集 二松学舎大学東アジア学術総合研究所 2016.3
  - ・法政大学沖繩文化研究所『沖繩文化研究』41 2015.3
  - ・求菩提資料館『ふるさと豊前 人物再発見』2015.3
  - ・徳田武「廣瀬旭荘と筑井昆陽」『江戸風雅』第 11 号 江戸風雅の会 2015.6
  - ・鈴木理恵「近世後期の教育環境としての漢学塾一咸宜園とその系譜塾」『書籍文化とその基底』平凡社 2015.10
  - ・徳田武「廣瀬旭荘と鈴木春山（一）」『江戸風雅』第 12 号 江戸風雅の会 2015.11
  - ・徳田武「『在臆話記』の廣瀬旭荘記事一『日間瑣事備忘』の顕彰一」『江戸風雅』第 12 号 江戸風雅の会 2015.11
  - ・四十五周年記念大会実行委員会『淡窓伝光霊流 日本詩道会 日田詩道会四十五周年記念大会』2015.11
  - ・高橋 昌彦「廣瀬淡窓著述攷」『史料館研究紀要』大分県立先哲史料館 20号 2016.1

- ・湯谷 祐三「広瀬淡窓より見たる雲華上人の人間関係  
「雲華院積大含信慶講師年譜稿」補遺」『名古屋外国語  
大学外国語学部紀要』名古屋外国語大学 50号 2016.2
- ・川邊雄大「資料紹介 白華文庫蔵・小栗栖香頂「水築  
小相伝」について」『二松学舎大学東アジア学術総合研  
究所集刊』第 46 集  
二松学舎大学東アジア学術総合研究所 2016.3
- ・高橋昌彦(資料)「廣瀬淡窓の著述 - 新出資料の紹介 -」  
『福岡大学人文論叢』第 48 巻第 1 号  
福岡大学研究推進部 2016
- ・鈴木理恵「咸宜園蔵書の形成と管理」『広島大学院教育  
学研究科紀要』第 3 部 第 65 号  
広島大学大学院教育学研究科 2016
- ・高橋昌彦「廣瀬旭荘の著述 - 未紹介資料について -」  
『福岡大学人文論叢』第 48 巻第 3 号  
福岡大学研究推進部 2016
- ・徳田 武 神田 正行 小財 陽平「廣瀬旭荘の林外・青村宛  
て書簡」『江戸風雅』『江戸風雅の会』13号 2016.5
- ・大野 雅之「廣瀬淡窓と菅茶山 交流の軌跡」  
『史料館研究紀要』大分県立先哲史料館 20号 2016
- ・森 隆夫「『星巖甲集』における廣瀬旭荘の題辞について」  
『江戸風雅』江戸風雅の会 14号 2016.11
- ・秋月立雄「「林外」をめぐって」『大分県地方史』第  
229号 大分県地方史研究会 2017
- ・川邊雄大「白華文庫蔵・平野五岳「五岳道人 古竹郵  
舎詩鈔」について」『日本漢文学研究』第 12 号 二松  
学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推  
進室 2017.3.31
- ・川邊雄大「「応接筆記」・「藩庁応接記」・「廿二日対辨記」  
について - 真宗法難事件における東本願寺と琉球藩  
庁の会議記録 - 」『国土館大学経済研紀要』第 29 号  
国土館大学経済学研究科 2017
- ・西江錦史郎「長州藩時代の長三洲」『国土館大学経  
済研紀要』第 29 号  
国土館大学大学院経済学研究科 2017
- ・城戸淳一「幕末の漢詩人たちの歴遊 - 廣瀬旭荘の書  
簡と『佛山堂日記』を中心に - 」『北九州国文』第  
44号 福岡県高等学校国語部会北九州地区部会 2017
- ・童門 冬二「廣瀬淡窓 (1) ~ (13)  
『ガバナンス』ぎょうせい 192 ~ 204 号  
2017.4 ~ 2018.4
- ・徳田 武「廣瀬旭荘と吉田松陰」『江戸風雅』江戸風雅の  
会 15号 2017.6
- ・徳田 武「廣瀬旭荘の『観瀑図誌』詩に就いて」『江戸風雅』  
江戸風雅の会 15号 2017.6
- ・鈴木理恵『咸宜園系譜塾の展開に関する実証的研究: 西  
日本を中心として』文部科学省科学研究費補助金研究  
成果報告書(研究種目 基盤研究 (C)) 2018
- ・徳田 武「菊池晩香の廣瀬旭荘年譜」『江戸風雅』  
江戸風雅の会 17号 2018.5
- ・三澤勝己『江戸の書院と現代の図書館』樹村房 2018.9

## Ⅳ．咸宜園開塾200年記念事業

### 廣瀬淡窓の「咸宜園」は開塾から200年を迎えました

1817年（文化14）2月、廣瀬淡窓は豊後国日田郡堀田村（現在の所在地）に私塾「咸宜園」を開いた。2017年（平成29年）2月、咸宜園開塾から200年を迎えたことから日田市や日田市教育委員会では平成29年2月18日から下記の記念事業をスタートした。

ここでは咸宜園開塾200年記念事業の内容とオープニングに実施した記念式典や記念講演、記念鼎談の様子を写真を使って報告する。

平成29年度実施の主な事業一覧

#### ◇記念遺墨展「咸宜園門下生遺墨展」

内 容：日田市内在住者を中心として構成される日田先哲研究会に協力いただき、200年記念の展示として咸宜園塾主・門下生らの遺墨展を開催した。

場 所：日田市民文化会館 パトリア日田ギャラリー

主 催：日田市・日田市教育委員会

共 催：日田先哲研究会

開催期間：平成29年9月3日（日）～17日（日）

入館者数：1,345人（14日間中、一日は台風のため臨時休館）



「咸宜園門下生遺墨展」開会式・展示風景

◇「嚶鳴フォーラム in ひた」

期 日：平成 29 年 11 月 10 日（金）・11 日（土） 午前 10:00～11:50

記念事業：「先哲に学ぶー歴史が現代に語りかけるものとは？」

参加者：250 名

内 容：全国 14 自治体 4 が参加する嚶鳴協議会の日田大会を記念事業の一環として取り組んだ。  
協議会では、例年「嚶鳴フォーラム」（講演会、シンポジウム等）を実施する中で併せて市  
村会議・教育長会議・担当者会議等を開催している。日田大会ではフォーラム内の記念対談に  
ついて一般の参加が可能な公開事業とした。

講 師：童門 冬二 氏（歴史小説家）

鼎 談：童門冬二氏（歴史小説家）、吉田公平氏（東洋大学名誉教授）

後藤宗俊氏（別府大学名誉教授）

聞 き 手：岡野 涼子（大分大学 COC + 推進機構コーディネーター）

主 催：日田市・日田市教育委員会 共 催：嚶鳴協議会 企画協力：PHP 研究所



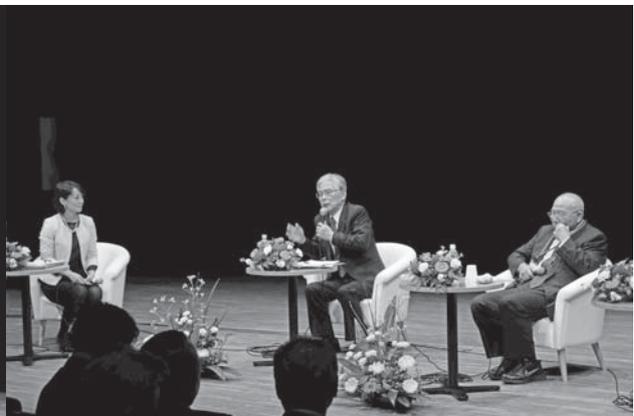
嚶鳴フォーラム オープニング（咸宜小学校）



嚶鳴フォーラム 原田市長挨拶



童門先生 講演



鼎 談



教育長会議



嚶鳴協議会 豆田町見学

◇「咸宜園の日」・「咸宜園開塾 200 年記念事業」

期 日：平成 30 年 2 月 24 日（土）～ 25 日（日）

場 所：日田市民文化会館（パトリア日田）ほか

主 催：日田市・日田市教育委員会（所轄：咸宜園教育研究センター）

(1) 第 1 日目（24 日） 全体時間 13：00～20：00

- ・第一部 「咸宜園の日記念事業」・「咸宜園開塾 200 年記念事業」  
記念式典等

廣瀬家代表、門下生子孫代表あいさつ 廣瀬 貞雄 氏

記念講話「咸宜園と門下生たち」別府大学名誉教授 後藤宗俊氏

- ・第二部 「咸宜園開塾 200 年記念講演」

テーマ：「江戸時代の人々にとっての学び」

講 師：法政大学総長 田中 優子 氏

場 所：パトリア日田 小ホール

- ・第三部 交流イベント「咸宜園門下生子孫の集い」

【特別企画トークショー】

対 談：田中 優子氏（法政大学総長）、後藤宗俊氏（別府大学名誉教授）

場 所：日田温泉旅館街（みくまホテル）

(2) 第 2 日目（25 日） 9:30～12:00（集合場所は咸宜園跡）

- ・第四部 「淡窓ゆかりの地ウォーキング」 対象：門下生子孫・市民  
咸宜園教育研究センター職員が咸宜園や豆田町などの関係施設を案内



廣瀬家・門下生子孫代表あいさつ 廣瀬貞雄 氏



田中優子先生 講演



咸宜園門下生子孫の集い 田中優子先生・後藤宗俊先生対談

◇研究紀要第7号（開塾200年記念特集号）の刊行

咸宜園開塾200年記念事業で行われた海原徹氏の講演録を含む論考などを掲載し、開塾200年記念特集号として刊行

◇「淡窓日記」翻刻版の印刷・刊行

翻刻作業：漢文日記を読む会（代表：野田高巳氏）

◇淡窓先生に学ぶ学校の取組み

期 日：平成30年2月20日（火）～3月4日（日）

会 場：パトリア日田ギャラリー

◇咸宜園教育顕彰事業「咸宜園の日」記念事業 ※「咸宜園門下生の集い」と共同で実施

期 日：平成30年2月24日（土）

会 場：パトリア日田 小ホール



「咸宜園の日」記念事業 オープニングアクト  
日隈こども園 園児による詩吟「休道之詩」

# V. 教育顕彰事業

## 咸宜園教育顕彰事業

### ■ 顕彰事業（「咸宜園の日」記念事業）

咸宜園開塾 200 年記念事業との共催

内 容：記念式典・講演・記念鼎談など

日 時：平成 30 年 2 月 24 日（日）

午後 1 時 から 2 時半

#### ① 咸宜園教育顕彰事業 表彰式

事業概要：廣瀬淡窓や咸宜園教育に関して、学術研究部門（調査研究の論文等が対象）及び教育文化部門（個人、団体、学校などが制作した作品や文化活動などが対象）を設け、毎年公募し、優秀な作品等を表彰するもの。

募集期間：平成 29 年 6 月 1 日から 11 月 1 日

教育文化部門 優秀賞受賞者 1 件

#### ② 日本遺産アイデア活用募集事業表彰式

#### ③ 発表会 特別発表「咸宜園世界遺産登録推進小学生作文コンクール」（豆田町地区振興協議会主催）



教育文化部門 優秀賞 淡窓研究会

### 【教育文化部門】優秀賞 1 名

賞名	団体名	所属	受賞内容
優秀賞	淡窓研究会	—	「廣瀬淡窓ならびに咸宜園教育関係者の学術研究。また関東方面に在住している咸宜園関係者の交流・情報交換等」

平成 29 年度 (第 7 回) 咸宜園教育顕彰事業募集チラシ 表(左側)・裏(右側)

■淡窓先生に学ぶ～学校の取組み～

学校の取組みを広く市民等知ってもらうことを目的とし、咸宜園や咸宜園教育等について関心を持ってもらうきっかけとする。市内小中学校による顕彰活動の成果を紹介するため、展示会を行っている。

◇期 間：平成30年2月20日（水）～3月4日（土）

◇展示場所：パトリア日田（ギャラリー）

◇参加校：小学校12校 咸宜小学校、桂林小学校、日隈小学校、高瀬小学校、光岡小学校、朝日小学校、三和小学校、小野小学校、石井小学校、前津江小学校、有田小学校、三芳小学校  
中学校5校 東部中学校、三隈中学校、北部中学校、東有田中学校、五馬中学校



ギャラリー入り口



ギャラリー内



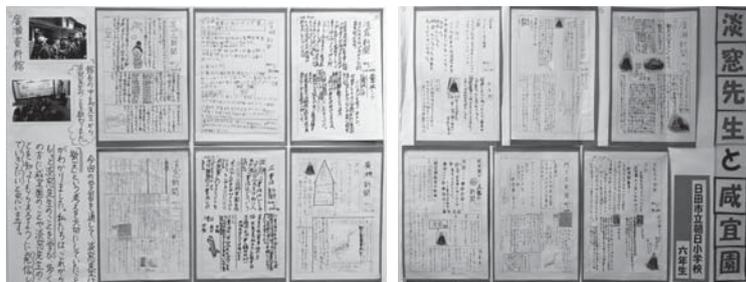
咸宜小学校



三和小学校



高瀬小学校



朝日小学校



日隈小学校



三芳小学校



光岡小学校



桂林小学校



石井小学校



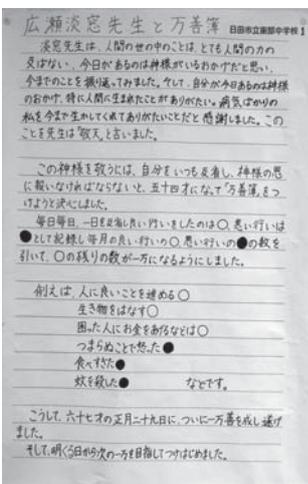
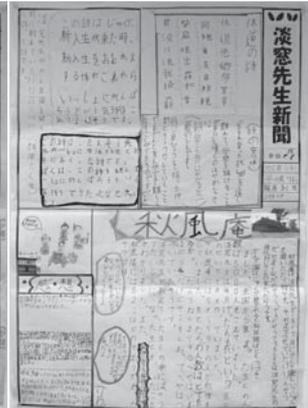
小野小学校



有田小学校



前津江小学校



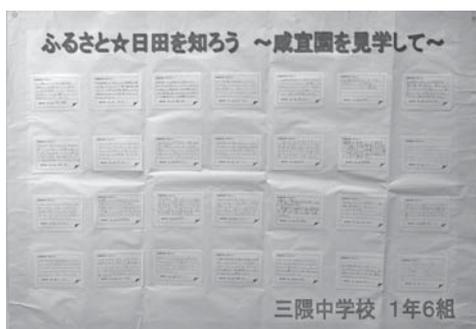
東部中学校



北部中学校



五馬中学校



三隈中学校



東有田中学校



## VI . 世界文化遺産登録推進の取り組み

### 1 . 世界遺産とは

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から引き継がれた貴重なもの。世界遺産にはさまざまな国や地域に住む人びとが誇る文化財や自然環境などがあり、人類の残酷な歴史を刻むものや戦争や自然災害、環境汚染などにより危機にさらされているものも含まれている。それらは国際協力を通じた保護のもと、国境を越え世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべきものである。

○世界遺産リストに記載されるまで

- ①条約締約国の推薦：締約国の政府が国内の世界遺産候補の中から、条件の揃ったものを世界遺産委員会に推薦。（各国の世界遺産暫定一覧表記載の資産から推薦される。）世界遺産委員会の事務局としての機能はユネスコ世界遺産センターが担っている。
- ②専門機関による調査：世界遺産委員会の依頼により、文化遺産はICOMOS、自然遺産はIUCNが候補地の評価調査を行う。
- ③世界遺産委員会での審議：ICOMOSやIUCNなどによる評価調査報告を受け、毎年1回開催される世界遺産委員会において、世界遺産リストへの記載物件の可否を決定する。

### 2 . 事業の概要

日田市では平成22年度に世界遺産推進室を開設し、茨城県水戸市の弘道館及び偕楽園、栃木県足利市の足利学校と連携し、「近世日本の教育遺産群」という主題で咸宜園の世界文化遺産登録を目指して取り組んでおり、平成27年5月には、新たに岡山藩の日本最古の郷学（校）・閑谷学校の所在する岡山県備前市が教育遺産世界遺産登録推進協議会に加わった。

世界文化遺産として登録されるには、ユネスコが定めた基準である「顕著で普遍的な価値」を証明する必要がある。そこで、「近世日本の教育遺産群」が持つ「顕著で普遍的な価値」を証明するために、世界遺産推進室では日田市世界遺産登録検討委員会の指導のもと、咸宜園に関する学術的な調査研究を「咸宜園教育研究センター」と両輪となって作業を進めている。また、この取り組みは行政のみで進められるものではなく、市民の機運の醸成と協力が必要となってくる。市民と行政とが一体となって取り組むことが重要となることから、調査研究の結果を公表しその情報を共有することで普及啓発につなげ、一人でも多くの市民の協力を得ることができるよう取組まなければならない。

また、平成27年4月には、国が新たに創設し、国内外からの観光誘客や地域活性化に役立てる仕組みである「日本遺産」の第1号認定を受けた。認定ストーリーのタイトルは「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」で、日田市における日本遺産のストーリーを構成する文化財は、「咸宜園跡」、「日田市豆田町伝統的建造物群保存地区」、「廣瀬淡窓旧宅及び墓」、「長福寺本堂」、「桂林園跡」、「咸宜園関係歴史資料」の6件である。国からの支援を受けた情報発信・普及啓発の取組を推進した。



日本遺産

日本遺産ロゴマーク

○調査研究

世界遺産登録検討委員会を開催し、調査研究についての報告などに意見をいただいた。また、日本遺産認定を含め、教育遺産世界遺産登録推進協議会による事業についての報告も行った。

○普及啓発

- ①日本遺産サミット in 京都～日本遺産観光見市～への参加 平成29年7月1日（土）～2日（日）協議会を構成する4市関係者によるPRブースの展開等を行った。

会場：けいはんなオープンイノベーションセンター

主催：文化庁、京都府、精華町、日本遺産連盟、宇治茶の郷づくり協議会、お茶の京都博実行委員会

- 1 認定自治体によるPRブースの設置
- 2 日本遺産サミット対談
- 3 日本遺産先進事例発表
- 4 全国のご当地グルメが集合

②市民協働の取組み（咸宜園平成門下生之会の活動）

世界遺産登録を目指す取り組みは市民と行政とが一体となって取り組むことが重要となることから、市民によ

る応援団体「咸宜園平成門下生之会」が平成23年度に発足し、この団体は廣瀬淡窓や咸宜園について学習すると同時に、世界遺産登録の取組みを市民の側から支援する活動を中心とする。今年度は咸宜園に関する講座や世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産群」の視察研修の他、「咸宜園交流事業サポーター」として登録された会員を中心に、咸宜園で行ったイベント等に協力をいただいた。(2ページ参照)

### ③情報発信

市ホームページの更新や広報誌の活用、「日田川開き観光祭」のパレードに参加するなどの啓発活動を行った。

### ④日本遺産魅力発信推進事業

日本遺産認定を受け、国からの支援を受けて日田市においても観光振興・地域活性化に繋げる各種事業を実施した。(事業主体：教育遺産世界遺産登録推進協議会)

#### ・月刊誌「教育旅行」記事掲載

教育機関や旅行会社等を中心に購読されている雑誌「教育旅行」に特集記事と広告を掲載し、日本遺産の魅力を発信した。

協議会全体での取り組みとして、日本遺産ホームページを制作した。この他、日田市独自の取り組みとして、昨年組織した「日田市日本遺産活性化懇話会」を中心に、昨年度に引き続き市民他一般から日本遺産を活用する取組み・アイデアを募集し、優秀な取組み・アイデアを表彰する「日本遺産活用アイデア募集事業」を実施した。また、平成29年10月・11月の2ヶ月間に「日本遺産スタンプラリー」を開催した。この取組みは、日本遺産の構成文化財を巡り、回遊性を促し、滞在時間を延ばすことや日本遺産に対する理解を深めるために実施した。平成29年6月からフェイスブックを活用した情報発信を行っている。



教育旅行 2018年2月号 表紙



教育旅行 記事

### 日田市の取組み

#### ◇「日本遺産子どもガイド」の養成・実施

市内小学校4・5・6年生(計28名)を「日本遺産子どもガイド」として養成し、日本遺産に認定された咸宜園跡、長生園、豆田町、廣瀬家、長福寺、桂林園跡を日田天領祭り、天領日田おひなまつりにおいて実際にガイドを実施した。

#### ◇日本遺産活用アイデア募集事業

審査機関：日田市日本遺産活性化懇話会審査会(会員から選出された審査員：8名)

募集期間：平成29年7月1日(土)～9月30日(土)、「広報ひた」斑回覧

応募総数：232件

応募内訳：アイデア部門223の個人から232件(うち市内高校生211件)

審査会を開催し、応募案件から優秀賞を選出する。優秀賞副賞：賞金3万円(最大5件)

審査会：平成30年1月19日(金)15:00

審査員：日田市日本遺産活性化懇話会員8名(1名欠席)

審査結果

取組み・商品開発部門（最大3件）

対象：取組みや商品等が具体的な形となっているもの（具象化されているもの）

（優秀賞）なし

アイデア部門（最大3件）

対象：具体的な形になっていないもの（具象化されていないもの）

（優秀賞）1件

応募者：春末 京香（日田高校）

案件名：日本遺産標識

内 容：豆田に来て咸宜園や長福寺の場所がわからない人がいるので豆田町のあちこちに「あとのくらしい歩けばココに着く！」と分かるキャラクターの顔の看板をたてる。（キャラクターは淡窓さんやお寺の絵）



日本遺産子どもガイド：研修風景①



日本遺産子どもガイド：研修風景②



日本遺産子どもガイド：研修風景③



日本遺産子どもガイド：研修風景④



日本遺産子どもガイド：豆田町班



日本遺産子どもガイド：咸宜園班



日本遺産子どもガイド：長福寺班



史跡内での説明



廣瀬資料館内での説明



長福寺での説明



秋風庵での説明



長生園での説明



中学生による「英語子どもガイド」



「英語子どもガイド」

### 3. 教育遺産世界遺産登録推進協議会

#### ①協議会

「近世日本の教育遺産群」として、咸宜園とともに世界遺産登録を目指す茨城県水戸市の水戸藩藩校「弘道館」と栃木県足利市の「足利学校」。また、関係三市は、相互の連絡調整の円滑化及び一体的な事業の展開を図ることを目的として、平成24年11月に「教育遺産世界遺産登録推進協議会」を設立した。平成27年5月には岡山藩の郷校「閑谷学校」の所在する岡山県備前市が加わり、四県四市体制となった。協議会は、市長と教育委員会教育長、学識経験者（商工会議所会頭、専門家、県の担当課長、市民団体代表）を委員とし、国内外の教育遺産に係る調査研究、教育遺産を 活用した普及啓発に関することなどを所掌する。また、4市で構成する本協議会に対して、日本遺産「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」の認定を受け、各種情報発信・普及啓発事業を展開している。

#### ②会議

##### ○幹事会 平成29年5月16日（都内）

- 1 平成28年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業報告について
- 2 平成28年度教育遺産世界遺産登録推進協議会決算について
- 3 平成29年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算（案）について  
議案第2号 教育遺産世界遺産登録推進協議会規約の一部改正について

##### ○協議会 平成29年5月28日（都内）

- 報告第1号 平成28年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業報告について  
認定第1号 平成28年度教育遺産世界遺産登録推進協議会歳入歳出決算について  
議案第1号 平成29年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算について  
議案第2号 教育遺産世界遺産登録推進協議会規約の一部改正について

#### ③専門部会の開催

検討状況報告書（素案）の内容に厚みを加え、熟度を高めるため、昨年度に引き続き、専門部会の開催を通して、専門部会A（登録推進戦略の検討）、専門部会B（国内外の教育遺産の評価）、専門部会C（保存管理方策の検討）に分かれ、各専門部会による調査研究を行った。

##### ○専門部会A・B合同会議 平成29年7月22日（都内）→災害対応のため欠席

- 1 今年度の日本遺産関係事業及び日本遺産サミットの報告について
- 2 今後の専門部会の報告性について
- 3 顕著な普遍的価値の抽出について
- 4 検討状況報告書第3章の修正案について

##### ○専門部会C会議 平成29年8月29日（都内）

- 1 各構成資産の保存活用計画の策定状況について
- 2 検討状況報告書第4章、第5章及び第6章の加筆修正案について

##### ○専門部会A・B合同会議 平成29年10月16日（都内）

- 1 ストーリー案第3章の修正案について
- 2 その他

##### ○専門部会A・B・C合同会議 平成30年2月18日（岡山県備前市）

- 1 検討状況報告書の加筆修正案について
- 2 その他

#### ④有識者・団体との協議

○九州大学大学院教授藤原恵洋先生との個別協議 平成 29 年 9 月 28 日（九州大学大橋キャンパス）

○日本イコモス国内委員会・教育遺産世界遺産登録推進協議会意見交換会 平成 30 年 3 月 3 日・4 日（茨城県）

- 1 検討状況報告書案について
- 2 その他

\*構成文化財である、特別史跡旧弘道館（茨城県水戸市）と史跡足利学校（栃木県足利市）の視察も行う。

#### ⑤事務連絡会議の開催

○平成 29 年 7 月 22 日（都内）→ 災害対応のため日田市からの出席は中止

- 1 今年度の日本遺産魅力発信推進事業の執行について
- 2 平成 30 年度事業計画・予算（案）について

○平成 29 年 8 月 24 日（都内）

- 1 協議会ホームページの進捗状況及びホームページへの協賛店舗の情報掲載について
- 2 平成 30 年度事業計画・予算（案）について

○平成 29 年 10 月 16 日（都内）

- 1 協議会ホームページの進捗状況について
- 2 日本遺産ホームページへの広告等の掲載について
- 3 その他
  - ①岡山県備前市での専門部会 A・B・C 合同会議について
  - ②来年度協議会総会及び幹事会の日程について
  - ③日本イコモス国内委員会との協議について
  - ④九州大学 藤原恵洋先生との協議について

○平成 29 年 11 月 14 日（足利市）

- 1 協議会ホームページの進捗状況について
- 2 協議会予算の執行状況及び今後の支払い予定について

○平成 29 年 12 月 19 日（都内）

- 1 日本遺産魅力発信推進事業の追加事業案について

○平成 30 年 1 月 23 日（都内）

- 1 岡山県備前市における専門部会 A・B・C 合同会議について
- 2 日本遺産魅力発信推進事業の変更申請及び追加事業案について
- 3 日本遺産魅力発信推進事業の進捗状況について
- 4 協議会有料広告掲載要綱等の整備について
- 5 日本イコモス国内委員会との意見交換会について
- 6 平成 30 年度日本遺産魅力発信推進事業について

○平成 30 年 2 月 17 日（岡山県備前市日生）

- 1 専門部会 A・B・C 合同専門部会について
- 2 日本遺産魅力発信推進事業の進捗状況について
- 3 協議会有料広告掲載要綱等の整備について
- 4 日本イコモス国内委員会との意見交換会について

○平成 30 年 3 月 27 日（都内）

- 1 当協議会及び構成資産候補の概要
- 2 現在の検討状況



公開講座「日本遺産を歩く」第 3 回



公開シンポジウム「日本遺産の活用について」



日本遺産サミット in 京都



京都市「日本遺産サミット」会場風景



日田市世界遺産登録推進講演会（パトリア日田小ホール）



「咸宜園放学遊山の会」事業成果発表会  
（協働担当課：世界遺産推進室）

#### 4. 経過

日田市においては、昨年度に引き続き、咸宜園教育研究センター公開講座「日本遺産を歩く」の開催や日本遺産スタンプラリーなど普及啓発のための取組を進めた。また、連携している茨城県水戸市、栃木県足利市、岡山県備前市との間においては、協議会会議のほか、有識者による専門部会や日本遺産認定を受け、事業の遂行のための事務連絡会議を重ねた。

日 程	内 容
平成 29 年 5 月 16 日	幹事会開催
5 月 21 日	日田川開き観光祭どんたくカーニバル参加
5 月 28 日	協議会開催
6 月 22 日	第 1 回日田市日本遺産活性化懇話会開催
7 月 1・2 日	日本遺産サミット in 京都参加
7 月 22 日	事務連絡会議開催、専門部会 A・B 合同会議開催
8 月 22 日	第 1 回日田市日本遺産活性化懇話会開催
8 月 29 日	事務連絡会議、専門部会 C 会議開催
9 月 28 日	九州大学大学院教授藤原恵洋先生との個別協議
10 月 16 日	事務連絡会議・専門部会 A・B 合同会議
10 月 1 日～11 月 30 日	2017 日本遺産スタンプラリー実施
10 月 13 日	日田市世界遺産登録推進講演会
10 月 16 日	事務連絡会議開催、専門部会 A・B 合同会議開催
10 月 18 日	第 2 回日田市日本遺産活性化懇話会開催
10 月 26 日	事務連絡会議開催、専門部会 A・B 合同会議開催
11 月 14 日	事務連絡会議開催、日本遺産プロデューサー派遣事業
12 月 10 日	咸宜園平成門下生之会バス研修（大分県立先哲史料館）
12 月 19 日	事務連絡会議開催
平成 30 年	
1 月 19 日	平成 29 年度日本遺産活用アイデア募集事業審査会開催
1 月 23 日	事務連絡会議開催
1 月 24 日	第 3 回日田市日本遺産活性化懇話会開催
2 月 4 日	水戸市日本遺産講演会参加
2 月 17 日	事務連絡会議開催
2 月 17 日～3 月 31 日	豆田まちづくり歴史交流館において日本遺産写真パネル展示
3 月 3・4 日	日本イコモス国内委員会との意見交換会
3 月 12 日	太宰府市日本遺産シンポジウム参加
3 月 17 日	平成 29 年度日本遺産活用アイデア募集事業表彰式及び市長報告
3 月 17・18 日	「天領日田おひなまつり」において日本遺産子どもガイド実施
3 月 19 日	第 1 回日田市世界遺産登録検討委員会開催
3 月 27 日	事務連絡会議・文化庁との意見交換会開催





## Ⅷ．各種委員会・職員名簿

### 1. 咸宜園教育研究センター運営委員会委員名簿

任期：平成30年5月31日まで

選出資格	氏名	所属
学識経験者	大神 信 證	日田市文化財保護審議会副会長
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	廣瀬 貞 雄	公益財団法人廣瀬資料館理事長
文化団体	野田 高 巳	淡窓会顧問
	三宅 多加子	日田書道協会
まちづくり	武内 眞 司	社団法人日田市観光協会理事
生涯教育	巨山 宣 幸	日田市大鶴公民館館長
行政関係	三 笥 眞治郎	日田市教育委員会教育長

### 2. 咸宜園教育研究センター専門委員会委員名簿

任期：平成30年5月31日まで

選出資格	氏名	所属
学識経験者	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	佐藤 晃 洋	大分県立高田高等学校校長
	鈴木 理 恵	広島大学大学院教授
	高橋 昌 彦	福岡大学人文学部教授
	豊田 寛 三	大分大学名誉教授 前別府大学学長
	中島 三 夫	日田市文化財保護員

(50音順)

### 3. 世界遺産登録検討委員会委員名簿

任期：平成30年5月31日まで

選出資格	氏名	所属
学識経験者	吾妻 重 二	関西大学教授
	江面 嗣 人	岡山理科大学教授
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	鈴木 理 恵	広島大学大学院教授
	豊田 寛 三	前別府大学学長

(50音順)

### 4. 職員名簿

咸宜園教育研究センター

職名	氏名
名誉館長	後藤 宗 俊

(平成29年4月1日現在)

職名	氏名
所 長	竹尾 秀 広
主幹(総括)	吉田 博 嗣
主 幹	高村 智恵美
主 査	原田 弘 徳
主 任	溝田 直 己
研 究 員	深町 浩一郎

(平成29年4月1日現在)

世界遺産推進室

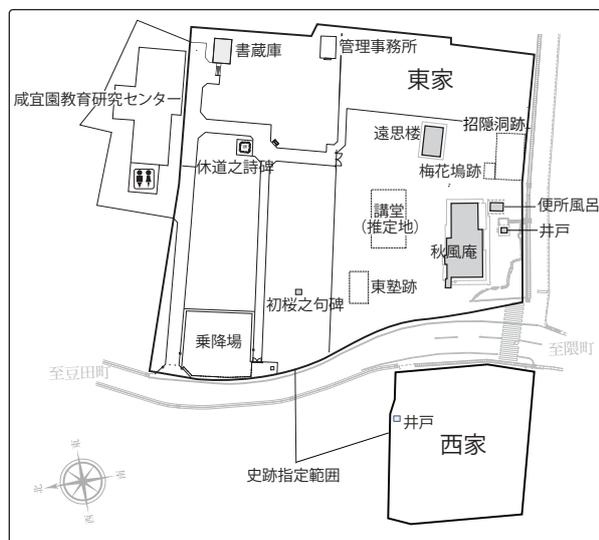
職名	氏名
室 長	竹尾 秀 広
主幹(総括)	高村 智恵美
主 幹	吉田 博 嗣
主 査	原田 弘 徳
主 任	溝田 直 己

(平成29年4月1日現在)

## 1. 沿革

明治 30 年 (1897) 9 月 咸宜園閉塾  
 大正 2 年 (1913) 淡窓先生頌徳祭  
 (生誕 130 年祭) 開催  
 大正 5 年 (1916) 淡窓図書館建設  
 大正 8 年 (1919) 休道の詩碑建立  
 昭和 7 年 (1932) 7 月「咸宜園跡」が国指定史跡に指定  
 昭和 23 年 (1948) 「廣瀬淡窓墓」が国指定史跡に指定  
 昭和 35 年 (1960) 11 月 淡窓百年祭 (100 回忌) の開催  
 平成 2 年 (1990) 3 月『第 3 次日田市総合計画』で咸宜園跡の保存整備を計画  
 平成 4 年 (1992) 2 月 史跡咸宜園跡保存整備構想検討委員会発足  
 平成 5 年 (1993) 3 月 史跡咸宜園跡保存整備構想の策定  
 平成 6 年 (1994) 1 月 秋風庵等保存修理事業実施  
 (～平成 8 年)  
 平成 7 年 (1995) 3 月 史跡咸宜園跡内秋風庵等保存修理事業委員会発足 (～平成 12 年度)  
 平成 9 年 (1997) 1 月 遠思楼復元修理事業 (～平成 12 年度)  
 平成 15 年 (2003) 史跡咸宜園跡保存整備委員会発足 (～平成 25 年度)  
 平成 17 年 (2005) 史跡咸宜園跡保存整備実施設計  
 淡窓先生 150 年祭 (150 回忌) 開催  
 平成 19 年 (2007) 11 月 史跡咸宜園跡ガイダンス棟実施設計が後の咸宜園教育研究センターの基本設計となる  
 平成 20 年 (2008) 咸宜園教育研究センター建設 (国土交通省所管のまちづくり交付金事業を導入) (～平成 22 年 3 月)

平成 21 年 (2009) 9 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催  
 平成 22 年 (2010) 1 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催  
 3 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催  
 10 月 咸宜園教育研究センター開館  
 記念式典、記念事業実施  
 「咸宜園門下生子孫の集い」開催  
 (日田市制 70 周年記念事業)  
 12 月 咸宜園平成門下生之会発足  
 平成 23 年 (2011) 10 月 平成 23 年度特別展  
 「近世の私塾－西日本を中心として－」開催  
 11 月 開館一周年記念事業「私塾フォーラム」開催  
 平成 24 年 (2012) 3 月 第 1 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施  
 8 月 廣瀬旭荘没後 150 年記念事業 (特別展・講演会・鼎談) 実施  
 11 月 教育遺産世界遺産登録推進協議会発足・世界遺産登録推進国際シンポジウム開催 (水戸市)  
 平成 25 年 (2013) 2 月 第 2 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施  
 3 月 国史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」(国史跡「廣瀬淡窓墓」の追加指定及び指定名称の変更)  
 10 月 世界遺産登録推進国際シンポジウム開催 (足利市)  
 平成 26 年 (2014) 2 月 第 3 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施  
 平成 27 年 (2015) 2 月 第 4 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施  
 4 月 「咸宜園跡」や「豆田町重要伝統的建造物群保存地区」などが初の日本遺産に認定  
 11 月 日本遺産認定記念フォーラムの開催  
 平成 28 年 (2016) 2 月 第 5 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施  
 平成 29 年 (2017) 2 月 咸宜園開塾 200 年記念事業  
 第 6 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施  
 9 月 『咸宜園門下生遺墨展』共催  
 11 月 「2017 嚶鳴フォーラム in ひた」実施  
 平成 30 年 (2018) 2 月 「咸宜園の日」・「咸宜園開塾 200 年記念事業」実施



咸宜園教育研究センター及び史跡咸宜園跡位置図

## 2. 施設の概要・組織

### (1) 設置目的

咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与する。

### (2) 設置年月日

平成22年4月1日  
(平成22年10月2日開館)

### (3) 設置場所

日田市淡窓2丁目2番18号

### (4) 設置の概要

公開展示室・研修室・研究室を備えた「史跡咸宜園跡」のガイダンス施設。

- ①構造・規模 木造平屋造 建物延べ面積  
約373㎡(専有面積)
- ②開館時間 午前9時から午後5時
- ③休館日 ・水曜日  
(水曜日が国民の祝日または振替休日  
に当たるときはその翌日)  
・年末年始(12月29日～1月3日)

### ④主要な施設

- ◇公開展示室 (約108㎡)  
常設展示  
企画展示  
特別展示
- ◇研修室 (約73㎡)  
咸宜園入門ばっくすの体験や各種研修に利用

### ◇研究室 (約61㎡)

図書コーナーやパソコン閲覧コーナーを設け、廣瀬淡窓や咸宜園のことなどについて、自由に調べることが可能。ただし、図書の貸し出しは行わない

### ◇収蔵庫 (約44㎡)

### (5) 主な業務

- ①咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究調査並びに関係資料の収集、整理及び保管
- ②上記①の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用
- ③咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発
- ④史跡咸宜園跡の公開

### (6) 組織

#### ①咸宜園教育研究センター

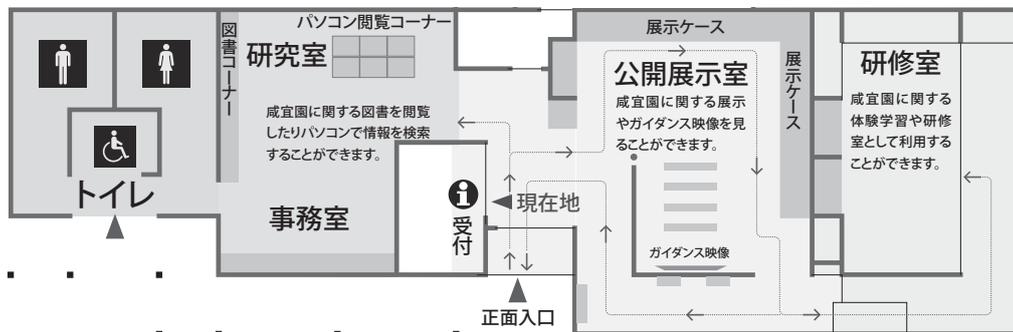
名誉館長(非常勤)

所長	主幹(総括)	1
	主幹	1
	主査	1
	主任	1
	嘱託	1(研究員)
	臨時職員	3

#### ②世界遺産推進室

室長	主幹(総括)	1
	主幹	1
	主査	1
	主任	1
	臨時職員	1

(内、学芸員資格者3)



咸宜園教育研究センター平面図

### 3. 利用案内

#### (1) 開館時間

- 公開展示室：午前9時から午後5時
- 研修室：午前9時から午後5時
- 研究室：午前9時から午後5時  
(入館時間は、午後9時から午後4時30分)
- 休館日：・水曜日（水曜日が国民の祝日または振替  
休日に当たるときはその翌日）  
・年末年始（12月29日～1月3日）

#### (1) 交通

- JR久大本線：「日田駅」下車徒歩約10分
- 高速バス：「市役所前」下車徒歩約7分
- 車：大分自動車道「日田IC」から約5分  
・専用駐車場には10台駐車可能  
・乗降場は大型バス3台まで乗降可能



## 4. 条例・規則

### 1. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例

平成22年3月24日  
条例第9号

(設置)

第1条 咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与することを目的として咸宜園教育研究センター（以下「センター」という。）を設置する。

(名称及び位置)

第2条 センターの名称及び位置は、次のとおりとする。

名称 咸宜園教育研究センター

位置 日田市淡窓2丁目2番18号

(業務)

第3条 センターの業務は、次のとおりとする。

- (1) 咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究並びに関係資料の調査、収集、整理及び保管
- (2) 前号の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用
- (3) 咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発
- (4) 史跡咸宜園跡の公開
- (5) 前各号に掲げるもののほか、センターの運営に関する事務のうち、教育委員会が必要と認める業務

(開館時間及び休館日)

第4条 センターの開館時間は、午前9時から午後5時まで（入館時間については、午前9時から午後4時30分まで）とする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、開館時間を変更することができる。

2 センターの休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

- (1) 水曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日にあたるときは、当該休日以後の直近の休日でない日）
- (2) 12月29日から翌年1月3日まで

(入館料)

第5条 センターの入館料は、無料とする。

(入館の制限)

第6条 教育委員会は、センターの入館者が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、入館を拒み、又は退館を命ずることができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) センターの建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他センターの管理上支障があるとき。

(原状回復義務又は損害賠償)

第7条 故意又は過失によりセンターの建物、設備、展示物等を損傷又は滅失した者は、直ちにこれを原状に復し、又はその損害を賠償しなければならない。た

し、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、損害賠償義務の全部又は一部を免除することができる。

(研修室の利用の許可)

第8条 研修室の利用（体験学習の利用を除く。以下同じ。）をしようとする者は、あらかじめ、教育委員会の許可を受けなければならない。許可を受けた事項を変更しようとするときも、同様とする。

2 教育委員会は、前項の許可をするに当たっては、管理上必要な条件を付することができる。

(利用許可の制限)

第9条 教育委員会は、その利用が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、研修室の利用の許可（以下「利用許可」という。）をしないことができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) 研修室の建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他研修室の管理上支障があるとき。

(利用許可の取消し等)

第10条 教育委員会は、利用許可を受けた者（以下「利用者」という。）が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、利用許可を取り消し、又は研修室の利用を停止し、若しくは制限することができる。

- (1) 利用許可の条件に違反したとき。
- (2) 偽りその他不正な手段により利用許可を受けたことが明らかになったとき。
- (3) この条例又はこの条例に基づく教育委員会規則の規定に違反したとき。
- (4) その他研修室の管理上支障があるとき。

2 教育委員会は、前項の規定による利用許可の取消し等によって利用者が損害を受けても、その賠償の責めを負わないものとする。

(目的外利用又は権利譲渡の禁止)

第11条 利用者は、研修室を利用許可を受けた目的以外に利用し、又はその利用する権利を他の者に譲渡し、若しくは転貸してはならない。

(使用料)

第12条 利用者は、別表に定める額を使用料として前納しなければならない。ただし、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、使用料を後納することができる。

(使用料の減免)

第13条 教育委員会は、前条の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当するときは、使用料を減額し、又は免除することができる。

- (1) 市及び市の執行機関が市の行政上のために利用するとき。
- (2) 市長又は教育委員会が特に必要と認める者が第

1 条に規定する設置目的に沿って利用するとき。  
(使用料の不還付)

第 14 条 既に納入された使用料は、還付しない。ただし、次の各号のいずれかに該当する事由に基づいて利用を中止したときは、既納の使用料の全部又は一部を還付することができる。

- (1) 研修室の管理上必要があるため、その利用許可を取り消したとき。
- (2) 利用者が自己の都合により 2 日前に利用許可の取消しを申し出たとき。
- (3) 災害その他やむを得ない事情により利用することができなくなったとき。

(咸宜園教育研究センター運営委員会の設置)

第 15 条 センターの適正かつ効果的な運営を図るため、咸宜園教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会の所掌事務、組織その他必要な事項は、教育委員会規則で定める。

(委任)

第 16 条 この条例の施行に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

(施行期日)

1 この条例は、公布の日から起算して 7 月を超えない範囲内において教育委員会規則で定める日から施行する。ただし、第 15 条及び次項の規定並びに附則第 3 項の改正は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

(平成 22 年教委規則第 11 号で平成 22 年 10 月 2 日から施行)

(準備行為)

2 教育委員会は、施行の日前においても、この条例に規定する事務の実施について必要な準備行為をすることができる。

(日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正)

3 日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例（昭和 31 年条例第 167 号）の一部を次のように改正する。

[次のよう] 略

別表（第 12 条関係）

区分	単位	金額	備 考
研修室	1 時間 につき	320 円	1 常設電灯以外の電気を利用するときは、1 回につき 410 円を加算する。 2 冷暖房を利用するときは、1 時間につき 200 円を加算する。

備考 1 日の利用時間は、原則として 3 時間を限度とする。

## 2. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例施行規則

平成 22 年 3 月 25 日

教委規則第 2 号

改正 平成 29 年 3 月 22 日教委規則第 7 号

(趣旨)

第 1 条 この規則は、咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例（平成 22 年条例第 9 号。以下「条例」という。）の施行に関し、必要な事項を定めるものとする。

(組織及び職務)

第 2 条 咸宜園教育研究センター（以下「センター」という。）に、所長、係総括（日田市教育庁組織規則（平成 22 年教育委員会規則第 15 号）第 2 条に規定する係総括をいう。以下同じ。）及びその他の職員を置く。

2 センターの業務を処理するため、研究・啓発係を置く。

3 所長は、教育委員会の指揮を受けてセンターの職務を掌理し、所属職員を指揮監督する。

4 係総括は、上司の命を受け、係の事務を処理し、係の分掌事務を総括・調整する。

5 その他の職員は、上司の命を受けて分担する業務を処理する。

(平 29 教委規則 7 ・追加)

(分掌事務)

第 3 条 センターの分掌事務は、おおむね次のとおりとする。

- (1) センターの運営に関すること。
- (2) 調査研究、史料収集・整理保管に関すること。

(3) 展示公開、情報発信に関すること。

(4) 講座、講演会等による普及啓発に関すること。

(5) 交流事業に関すること。

(6) その他センターの目的達成のために必要な事業。

(平 29 教委規則 7 ・追加)

(利用申請)

第 4 条 条例第 8 条第 1 項の許可を受けようとする者（以下「申請者」という。）は、咸宜園教育研究センター研修室利用許可申請書（様式第 1 号。以下「利用許可申請書」という。）を教育委員会に提出しなければならない。

(平 29 教委規則 7 ・旧第 2 条繰下)

(利用許可)

第 5 条 教育委員会は、研修室の利用の許可（以下「利用許可」という。）をしたときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可証（様式第 2 号。以下「利用許可証」という。）を申請者に交付するものとする。

(平 29 教委規則 7 ・旧第 3 条繰下)

(利用者の遵守事項)

第 6 条 利用許可を受けた者（以下「利用者」という。）は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

(1) 他人に危害を及ぼし、若しくは迷惑となる物品又は動物を持ち込まないこと。

(2) 研修室内において、許可を受けずに物品の販売若

しくは陳列をし、又は看板その他の広告物の掲示若しくは配布をしないこと。

(3) 利用を終了したときは、研修室内を整理整頓すること。

(4) その他職員の指示に従うこと。

(平 29 教委規則 7・旧第 4 条 繰下)  
(利用許可の変更等)

第 7 条 利用者は、利用許可の変更又は取消しを求めようとするときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可変更・取消申請書(様式第 3 号)に利用許可証を添えて教育委員会に提出しなければならない。

2 教育委員会は、前項の利用許可の変更又は取消しを許可したときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可変更・取消許可証(様式第 4 号)を利用者に交付するものとする。

3 利用者は、前項の規定による利用許可の変更の許可を受けた場合において、既納の使用料の額が変更後の使用料の額に対して不足額を生じるときは、直ちに、当該不足額を納付しなければならない。

(平 29 教委規則 7・旧第 5 条 繰下)  
(使用料の減免)

第 8 条 条例第 13 条の規定による使用料の減額又は免除(以下「使用料の減免」という。)ができる場合及び減免の率は、別表第 1 に定めるとおりとする。

(平 29 教委規則 7・旧第 6 条 繰下)  
(使用料の減免の申請)

第 9 条 使用料の減免を受けようとする利用者は、咸宜園教育研究センター研修室使用料減免申請書(様式第 5 号)に利用許可申請書を添えて教育委員会に提出し、承認を受けなければならない。

(平 29 教委規則 7・旧第 7 条 繰下)  
(使用料の還付)

第 10 条 条例第 14 条ただし書の規定による既納の使用料の還付ができる場合及び還付の率は、別表第 2 に定めるとおりとする。

(平 29 教委規則 7・旧第 8 条 繰下)  
(使用料の還付の申請)

第 11 条 使用料の還付を受けようとする利用者は、咸宜園教育研究センター研修室使用料還付申請書(様式第 6 号)を教育委員会に提出し、承認を受けなければならない。

(平 29 教委規則 7・旧第 9 条 繰下)  
(損傷等の届出)

第 12 条 センターの入館者は、センターの建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、咸宜園教育研究センター施設等損傷(汚損・滅失)届(様式第 7 号)を教育委員会に提出しなければならない。

(平 29 教委規則 7・旧第 10 条 繰下・一部改正)  
(寄贈及び寄託)

第 13 条 センターは、咸宜園に関係する資料の寄贈及び寄託を受けることができる。

2 前項の資料の所有者は、センターに当該資料を寄贈し、又は寄託しようとするときは、資料名、数量等を明記した寄贈・寄託申込書(様式第 8 号)を教育委員会に提出しなければならない。

3 教育委員会は、前項の規定による資料の寄託を受けるものと決定したときは、預かり証(様式第 9 号。以

下同じ。)を寄託者に交付し、受託控(様式第 10 号)をセンターに保管するものとする。

4 寄託期間は、原則として 3 年とする。ただし、教育委員会が特別な事情があると認めるときは、この期間を短縮することができる。なお、寄託の更新を妨げないものとする。

5 前項の期間の起算日は、寄託資料をセンターが受託した日が 1 月 1 日から 6 月 30 日までのときは 1 月 1 日、7 月 1 日から 12 月 31 日までのときは 7 月 1 日とする。

6 寄託者は、寄託期間中に、特別の理由により寄託資料の一時返還を受けようとするときは、寄託資料一時返還申請書(様式第 11 号)を教育委員会に提出しなければならない。この場合において、寄託資料の一時返還を受けようとする者が寄託者の代理人であるときは、その旨を証明する書類を添付しなければならない。

7 教育委員会は、前項の寄託資料の一時返還を承認したときは、寄託資料一時返還承認書(様式第 12 号)を寄託者に交付し、当該寄託資料を一時返還するものとする。

8 寄贈資料又は寄託資料の保管その他の取扱いについては、センターの所蔵する資料に準じて行うものとする。ただし、寄贈者又は寄託者と利用制限等に関して特約があるものについては、この限りでない。

9 資料の寄贈又は寄託に要する経費は、寄贈者又は寄託者の負担とする。ただし、特別の事情があるときは、この限りでない。

10 寄託資料が汚損し、損傷し、又は滅失したときは、教育委員会が補償するものとする。ただし、天災その他やむを得ない事由によるものであるときは、その賠償の責めを負わないものとする。

11 寄託資料の所有者が譲渡により変更が生じたときは、譲渡人は、速やかに預かり証に所有権の移転を証明する書類を添えて教育委員会に提出し、その旨の書き換えを受けなければならない。

12 寄託者は、預かり証を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、速やかにその事実を証明する書類又は当該預かり証を教育委員会に提出し、再交付を受けなければならない。

(平 29 教委規則 7・旧第 11 条 繰下)  
(資料の館外貸出し)

第 14 条 収蔵品等の資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、教育委員会が、博物館、図書館、学校等において学術上の調査研究又は教育普及の目的で使用され、かつ、取扱い上安全性が確保されると認めるときは、この限りでない。

2 前項の館外貸出しを受けようとする者(以下「貸出し申請者」という。)は、咸宜園資料貸出し許可申請書(様式第 13 号)を教育委員会に提出しなければならない。

3 教育委員会は、前項の館外貸出しを許可したときは、咸宜園資料貸出し許可書(様式第 14 号)を貸出し申請者に交付するものとする。

(平 29 教委規則 7・旧第 12 条 繰下)  
(撮影、複写等の許可)

第 15 条 収蔵品等の資料を学術上の調査研究等の目的で撮影し、若しくは複写し、出版物等への掲載をしよ

うとする者又は模写、模造等をしようとする者（以下「撮影等申請者」という。）は、咸宜園資料撮影等許可申請書（様式第 15 号）を教育委員会に提出しなければならない。

2 教育委員会は、前項の規定による撮影等を許可したときは、咸宜園資料撮影等許可書（様式第 16 号）を撮影等申請者に交付するものとする。

（平 29 教委規則 7・旧第 13 条繰下）

（運営委員会の所掌事務）

第 16 条 条例第 15 条に規定する咸宜園教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）は、教育委員会の諮問に応じ、条例第 3 条各号に掲げる業務に関する事項について審議し、及びこれらの事項について教育委員会に建議する。

2 運営委員会は、前項に定める事項のほか、センターの運営に関する事項について、教育委員会に意見を述べることができる。

（平 29 教委規則 7・旧第 14 条繰下）

（運営委員会の組織等）

第 17 条 運営委員会は、委員 10 名以内で組織する。

2 委員は、学識経験者等のうちから、教育委員会が委嘱する。

3 委員の任期は、2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員が欠けた場合における補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 運営委員会に会長及び副会長を置き、委員の互選により定める。

5 会長は、会務を総理する。

6 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。

7 運営委員会の会議（以下「会議」という。）は、会長が招集し、会長がその議長となる。

8 会議は、委員の過半数が出席しなければ、これを開き、議決をすることができない。

9 会議の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

10 運営委員会に、専門の事項について審議する必要があるときは、臨時委員を置くことができる。

11 臨時委員は、教育委員会が運営委員会の意見を聴いて委嘱する。

12 臨時委員は、専門の事項について審議し、運営委員会への報告が完了したときは、解職されるものとする。

13 運営委員会の庶務は、教育委員会において処理する。

（平 29 教委規則 7・旧第 15 条繰下）

（評価委員会）

第 18 条 センターに収蔵する咸宜園に関係する資料の購入価格の適正な評価を行うため、咸宜園教育研究センター収蔵資料評価委員会（以下「評価委員会」という。）を置き、評価委員若干名で組織する。

2 評価委員は、教育委員会の諮問に応じ、センターが購入しようとする資料の評価を行い、その意見書を提出する。

3 評価委員は、学識経験者のうちから、教育委員会が委嘱する。

4 評価委員の任期は、1 年以内とする。

5 評価委員は、職務上知り得た秘密のほか、自己が評価委員であることを他に漏らしてはならない。

6 購入しようとする資料について利害関係を有する評価委員は、当該資料の評価に加わることができない。

7 評価委員会の庶務は、教育委員会において処理する。

（平 29 教委規則 7・旧第 16 条繰下）

（委任）

第 19 条 この規則に定めるもののほか、必要な事項は、教育委員会が別に定める。

（平 29 教委規則 7・旧第 17 条繰下）

附 則

（施行期日）

1 この規則は、条例の施行の日から施行する。ただし、第 11 条から第 16 条まで及び次項の規定並びに附則第 3 項の改正は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

（準備行為）

2 教育委員会は、施行の日前においても、この規則に規定する事務の実施について必要な準備行為をすることができる。

（日田市教育委員会事務委任規則の一部改正）

3 日田市教育委員会事務委任規則（昭和 39 年教委規則第 10 号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

附 則（平成 29 年 3 月 22 日教委規則第 7 号）

この規則は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

#### 別表第 1（第 6 条関係）

減免ができる場合	減免の率	備 考
1 市及び市の執行機関が市の行政上のために利用するとき。	免 除	1 号の免除は、使用料の減免の申請を省略することができる。
2 市長又は教育委員会が特に必要と認める者が第 1 条に規定する設置目的に沿って利用するとき。	免 除	

#### 別表第 2（第 8 条関係）

還付ができる場合	還付の率	備 考
1 研修室の管理上必要があるため、その利用許可を取り消したとき。	10 割	還付金に 10 円未満の端数があるときは、これを切り捨てる。
2 利用者が自己の都合により 10 日前に利用許可の取消しを申し出たとき。	7 割	
3 利用者が自己の都合により 2 日前に利用許可の取消しを申し出たとき。	5 割	
4 災害その他やむを得ない事情により利用することができなくなったとき。	10 割	

咸宜園教育研究センター

研究紀要 第八号

二〇一九年三月二〇日印刷発行

編集 日田市教育庁咸宜園教育研究センター

〒八七七・〇〇一二

大分県日田市淡窓二・二・一八

咸宜園教育研究センター

発行 日田市教育委員会

印刷・製本 日田時報紙器印刷株式会社

THE KANGIEN EDUCATION RESEARCH CENTER  
B U L L E T I N

Vol.8

- Tanso Hirose and the person concerned for Kangien for honoring and the academic research, an information exchange and interaction for the person concerned in Hita who live in Kanto area. TANSOKENKYUKAI
- About the reason of the biggest private school in modern times for Kangien. FUKAMACHI Koichiro
- The school in Kyoto prefecture and education of Kangien.-Especially, about Seison Hirose. FUKAMACHI Koichiro
- The relationship of Kangien and Keiougijuku. MIZOTA Naoki
- The biographic background of the students of Kangien.(6) WATANABE Mika  
YOSHIDA Hiroshi
- The introduction of educational heritage.(No.2) YOSHIDA Hiroshi
3. Suisaien(historic site designated by Fukuoka prefecture)in Yukuhashi City.  
4. Seikeishoin(historic site designated by Hyogo prefecture)in Yabu City.
- 
- Research Center Annual Report (Fiscal2017)
- Research Center Directory

March.2019